

『チンギス・ハーンの二頭の駿馬』について

——写本と口頭伝承の比較を中心に——

楊 海 英*

The Story of Two Great Steeds of Činggis Qayan: Focusing on Ancient Manuscripts and Oral Tradition

Haiying Yang

叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」は、写本と口頭伝承の形で内蒙古自治区西部オルドス地域を中心に伝わっている。叙事詩の写本は古くからその種類が多く、民間に多数存在する。一方、口頭伝承では「聖主の二頭の駿馬」という民歌で広く知られている。従来の研究は叙事詩の物語の分析に重点をおいてきた。そこで本稿は、叙事詩の写本公開を基本的な目的とする。そのうえで、叙事詩の写本と口頭伝承のテキストとの比較検討を試みる。それによって、写本と口頭伝承の関連性を明らかにし、叙事詩の物語の再生産についての仮説をうちたてる。

A Mongolian epic *Činggis qayan-u er-e qoyar jayal -un tuyuji* (*Two Great Steeds of Činggis Qayan*) has been preserved for centuries in the form both of manuscript and oral tradition, mainly in Ordus, which is an autonomous region in Inner Mongolia. There exist many different manuscripts for this epic, which have been collected and reported by researchers through generations. The entire corpus of manuscripts, however, has not yet been identified or elucidated. On the other hand, the oral tradition has taken the form of “Urtu-yin dayuu” the title of which is “*Ejen boyda-yin qoyar jayal*” (*Two Great Steeds of the Holy Qayan*). “Urtu-yin dayuu” literally means a “long song”. This paper is aimed at publicising two manuscripts, which the author discovered in Ordus, as well as a text that has existed in the Mongolian People’s

* 静岡大学，国立民族学博物館共同研究員

Key Words : Ordus Mongols, epics, Urtu-yin dayuu, Qoyar Jayal (Two Great Steeds)
キーワード : オルドス・モンゴル, 叙事詩, ウルトゥイン・ドー, 二頭のジャガル

Republic for many years.

Conventionally, the study of the epic has centred round the analysis of the stories that are described in it. For this reason, there has not been sufficient academic work to date that aims to compare the written epic with the “long song”, which is the oral tradition. In this paper, in order to shed light from a new angle, the author aims to identify various forms of the “long song” entitled “Two Great Steeds of the Holy Qayan”, which have been passed on through generations of people in Ordus, thus elucidating the structure and content of the oral tradition. Then a comparison will be made between the oral tradition and the manuscripts in relation to what is described.

As for the content, most of the manuscripts which have been discovered in the Ordus region consist of the following two stories. The first is about two horses, which are called “Yeke Jayal” (Big Jayal) and “Bay-a Jayal” (Small Jayal). They were born in a huge herd of 100,000 horses owned by Činggis qayan. As they grew as outstanding young horses, they contributed greatly to the success of the great hunt carried out by Činggis Qayan and his men, in which a hunting ground was encircled by hundreds of hunters on horseback who chased wild game out into the open. Unfortunately, however, despite the high calibre which both Jayal demonstrated, they somehow failed to gain legitimate credit from people for their contribution.

Disappointed and grieved, the two horses left Činggis Qayan’s court, running off to the remote countryside, where they spent a few years without attending to any official duty or assignment. However, their dedication and loyalty to Činggis Qayan was so genuine that they could never forget their Qayan. Eventually they came back to the court again. Deeply pleased with their return, Činggis Qayan set out for a great hunt again, when everybody generously rewarded the achievement of the horses with sincere words of adoration. To their great pleasure, the two Jayal came to be admired by literally everybody in the country, enjoying the fame. This concludes the first story.

Of the two Jayal, Bay-a Jayal (Small Jayal) alone reappears at the end of the second story. The hero in this is a little boy who was taken into bondage as a hostage and forced to work as a shepherd looking after a herd of sheep owned by a wealthy man. Although the rich man possessed as many as 100,000 horses, he was utterly ignorant of the value of horses, incapable of telling a great steed from others of poor breed. There happened to be a fine horse in the herd, which could run extremely fast. In the rich man’s possession, however, the value of this horse was totally wasted, without him being given any chance to show his excel-

lence. The boy immediately discovered the outstanding strength and nature of this horse and, a few years later, managed to ride off on his back to seek freedom from bondage. Unfortunately, however, the boy was chased and recaptured in the end by a pursuer riding “Small Jayal”. Tragically enough, “Small Jayal” ran too fast during the chase and exhausted himself only to die after running the race. The story ends with the remarks that, since that incident, great steeds have come to be born only in the “Land of the Han”, and not anywhere else.

It is generally believed that the former half of the epic was constructed during the dynasty of Mongolia-Qayan in the 13th century, whereas the latter was created between the 14th and 15th centuries. On the other hand, the “long song” titled “Two Great Steeds of the Holy Qayan” includes only the former half of the epic, which is, in fact, the most moving legend. Whereas those who recite the epic are experts with special skill, the “long song” can be performed by almost everybody. Currently the number of specialists who can narrate the epic is getting extremely low in Ordus. In this context, it would be fair to say that the “long song” titled “Two Great Steeds of the Holy Qayan” was made as a popularisation and simplified version of the authentic epic “Two Great Steeds of Činggis Qayan”.

はじめに——資料と研究方法——

1 従来からの写本収集と研究

- 1.1 ジャムツァラーノとエルデニトクトホの固めた礎石
- 1.2 モスタールト師の記録
- 1.3 現地からの視点——チンギス・ハーンと関連つけた研究——

2 写本の所蔵状況

- 2.1 民族文化宮本=内モンゴル図書館 C 本
- 2.2 内モンゴル図書館の三写本

3 口頭伝承の実態

- 3.1 オルドス・モンゴル族の「聖主の二頭の駿馬」
- 3.2 「聖主の二頭の駿馬」の伝承地域
- 3.3 叙事詩とその変形の問題

4 写本の訳注

- 4.1 公開する写本の来歴

4.2 OO 本: Ejen boyda qoyar jayal-un üliger bile——聖主の二頭の駿馬の物語——

4.3 QB 本: Ejen Boyda-yin qoyar jayal-un tuyuji orusiba——聖主の二頭の駿馬の伝説——

4.4 B 写本: 内モンゴル図書館所蔵モンゴル国本 Činggis-un qoyar jayal-un tuyuji orusiba——チンギスの二頭の駿馬の伝説——

5 叙事詩の物語の成立および「長い歌」^{ウルトゥイン・ド}との関係

- 5.1 叙事詩の物語の成立
- 5.2 帰る駿馬と帰らぬ駿馬——叙事詩の二つの物語の関連性 ——
- 5.3 叙事詩の物語と「長い歌」との関係
- 5.4 駿馬には鞍きずがある——物語の再生産——

はじめに——資料と研究方法——

モンゴルには古くから歴史上の出来事や叙事詩、民歌、シャマニズムと仏教の経文を写本にする伝統がある。ヨーロッパの学問研究の方法を身につけた学者と探検家たちがモンゴルにやってきて口伝資料を記録しはじめる以前から、モンゴル人自身による文字を駆使した作業は蓄積されていた。欧米の「モンゴル学」(Mongolistik)が文献研究を主流として発展してきたことは、被調査者側のモンゴルのこのような社会的精神的土壌と無関係ではない。

学問と知識を好む面で、モンゴル諸部のなかでもオルドス・モンゴル部は突出した存在であった。一例をあげよう。16世紀にホトクタイ・セチェン・ホン・タイジ(1540-1586)が編纂した『十善白史』をはじめ、ドゥバ・タイジの『シャル・トゥージ』、サガン・セチェン・ホン・タイジの『蒙古源流』、『ロ・アルタン・トプチ』、『ゲゲン・トリ』など、モンゴルの歴史を書きのこした年代記の大半がオルドス・モンゴル人の手によるものである(Narasun & Öljeibayar 1986: 217-277)。民間において、どの家庭にも写本を珍重し、写本を収蔵する習慣がある(楊 1998: 3-4)。換言すれば、各家庭には多かれ少なかれ写本が保管されていた。写本には彼らのアイデンティティが集約されている。今世紀初頭、オルドス地域で調査し、膨大な写本を収集したモンゴル学者モスタールトの実績がこれを立証している(Serruys 1975: 191-208)。「文化大革命」中に壊滅的な打撃を受けた後も、民間には資料価値の高い写本はまだ存在している。このことは私自身がフィールド・ワークで確認している。本研究のもととなる叙事詩の写本もオルドス・モンゴルのあいだから収集したものである。

叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」(Činggis qayan-u er-e qoyar jayal-un tuyuji)は、写本と口頭伝承の形で内蒙古自治区オルドス地域を中心に伝わっている。写本の種類は多く、研究者によって収集、報告されてきた(表1参照)が、その全容はまだ完全に把握されていない。口頭では「聖主の二頭の駿馬」(Ejen boyda-yin qoyar jayal)というウルトゥイン・ドー(urtu-yin dayuu)によって伝えられている。ウルトゥイン・ドーとは直訳すれば「長い歌」との意味である。

私は、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」を『ジャンガル』や『ゲセル』と並ぶモンゴルにおける「三大叙事詩のひとつ」と位置づけている。『ジャンガル』や『ゲセル』はすでに日本語訳が上梓されており(若松 1993; 1995)、最近でも新たに採録したテキストが公開されている(塔壘 1999)。本研究は、私がオルドス地域から

収集した写本二種類とモンゴル国からのテキストひとつを公開することを主要な目的とする。また、従来の研究は叙事詩の物語に関する分析に重点をおいてきたため、叙事詩を口頭伝承の歌と比較する議論は十分ではなかった。本稿ではまず、オルドス地域を中心に伝えられている「聖主の二頭の駿馬」のさまざまな形態を示し、口頭伝承の実態を考察する。そのうえで、口頭伝承と写本の内容との関連を検討し、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の成立過程および叙事詩の中心思想についての仮説を呈示する。

ここで叙事詩の内容を要約しておこう。オルドス地域から収集された写本のほとんどが以下のような二つの物語からなる。叙事詩には、「大きいジャガル」(Yeke Jayal)と「小さいジャガル」(Bay-a Jayal)という二頭の駿馬が登場する。チンギス・ハーンの十万頭の馬群のなかに生まれた二頭のジャガルは、大きくなってから巻狩で活躍するが、人びとから正当に評価されなかった。そのためチンギス・ハーンのもとを離れ、遠方へと出奔する。新天地で数年間のんびり過ごすか、主君への思いが断ちきれずにもどってくる。駿馬の帰還をチンギス・ハーンは大いに喜び、ふたたび巻狩に出かける。二頭のジャガルの活躍ぶりを誰もが称賛し、駿馬の名声は世のなかに広まった。ここで前半の幕が降ろされる。

叙事詩の後半には、小さいジャガルのみが最後に登場する。人質とされ、金持ちのヒツジの番をしていた少年が主人公を演じる。金持ちは十万頭のウマを所有していたにもかかわらずウマのよしあしが分からず、駿馬は埋没していた。人質の少年は駿馬をいち早く識別し、数年後には自らの発見した駿馬にまたがって逃げ出す。追手は小さいジャガルに乗って、少年を捕らえる。追撃の際に走りすぎたため、小さいジャガルは死んでしまい、それ以降駿馬はもっぱら「漢族の土地」に生まれるようになる、という結末を迎える。

叙事詩の写本は、オルドス地域以外にモンゴル国からも発見されている。現状では、同国の写本は前半の物語だけで形成されている。

オルドス地域の「聖主の二頭の駿馬」という「長い歌」には、前半の物語しか含まれていない。つまり、写本には二つの物語があるのに対して、口頭伝承の歌には、後半の人質の少年の話が欠如しているということである。写本は二つの物語からなっているのに対して、口伝の「長い歌」にはひとつのみすなわち前半の物語しかない。この構成をいままでに出版された民歌のテキストが証明しており、私自身もフィールド・ワークで確認している。口頭伝承と写本の内容との異なる構成は注目に値する。

「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」という叙事詩は、ウマをもっとも愛し、ウマを

神聖視するモンゴル社会に誕生した。叙事詩の主人公が駿馬である以上、モンゴルにおけるウマの毛色の民族的分類を簡単に述べておく必要がある。ウマの毛色は数えきれないほどあるといわれる。叙事詩に登場するジャガルについても地域による認識の差がある。オルドス地域のある老人によると、鬣と尾が黒く、白あるいは白みがかかった淡黄色馬 (*čayan qaliyu*) がジャガルであるという。モンゴル国ウブス・ハンガイ県南部の老人は、クリーム色 (*čabidar*) の種雄馬と、黒の牝ウマからジャガルが生まれるといい、ここでは毛色の異なるウマによるかけあいの結果を強調している。『二十八卷本辞典』では、肩部から首にかけて茶褐色か黒の細長い斑点のある、浅黄色馬 (*qova qula*)、灰白色馬 (*sayaral*) をジャガルとしている (Namjilm-a 1994: 1875)。『蒙漢辞典』では「綉脖」, 「鷹膀」と訳している (内蒙古大学蒙古語文研究室 1976: 1282)。このように、毛色に関する認識の差はあるが、ジャガルは「格好いいウマ」, 「美しいウマ」でなければならないとの見方は共通している。そのため本稿では、便宜上ジャガルを「駿馬」に統一する。なお、本稿におけるモンゴル語のカタカナ表記は、現代オルドス・モンゴル語口語発音に近い方式をとる。転写にあたっては、j(J) を j(J) とする。

1 従来からの写本収集と研究

ここでは、叙事詩の写本収集とテキスト研究を回顧総括する。

1.1 ジャムツァラーノとエルデニトクトホの固めた礎石

「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」という叙事詩の写本にもっとも早く出会い、かつ収集できたのは、ブリヤート・モンゴル出身の大学者、ジャムツァラーノであろう。1910年4月にオルドス地域のジュンワン旗にあるチンギス・ハーンの祭殿「八白宮」を訪れた彼は、年代記をはじめ (Žamcarano 1955)、チンギス・ハーン祭祀に関する文書を多数収集した (Rintchen 1959a: 9–22; 1959b; 楊 1998: 30–36)。ジャムツァラーノのコレクションは現在サンクト・ペテルブルグの東洋学研究所に保存されており (Uspensky 1996: 176)、そのなかに「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の写本も含まれていたことは、後日、ダムディンスレンの『モンゴル文学珠玉百篇』の出版によって知られるようになる (Damdinsürüng 1959: 73)。私はまだジャムツァラーノが収集した写本をみる機会に恵まれていない。

内蒙古自治区でもっとも早くから「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」に注目したの

は、エルデニトクトホであろう。オールドス地域へ調査に赴いて写本を収集し、成果を1958年に『モンゴル歴史・語文』に発表している¹⁾。エルデニトクトホによると、オールドス地域には「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の写本が数多くあり、老人たちはその歌をよくうたうという。エルデニトクトホは四種類の写本を比較している。写本の内容は四種類とも基本的に同じであるが、語句や表現の面でそれぞれ異なっていた点も指摘している (Erdenitoqtu 1958: 46-47)。

ダムディンスレンの『モンゴル文学珠玉百篇』には、二つのテキストがある。そのうちのひとつは、エルデニトクトホが1958年に発表したオールドス地域からのテキストを底本 (Erdenitoqtu 1958: 46-58) に、ジャムツァラーノの写本とを比較したものである (Damdinsürüng 1959: 73)。

もうひとつは、1916年にボグド・ハーン政権下のモンゴル国外務省 (yadayatu-yin yamun) から出版されたものである (Damdinsürüng 1959: 68)。出版の際、どういった性質の写本をもとにしたのかは不明である²⁾。また、ダムディンスレンはこのテキストを『モンゴル文学珠玉百篇』に収録したとき、他の諸写本と比較したと述べているが、他の諸写本に関する情報には一切触れていない (Damdinsürüng 1959: 60-68)。その後内蒙古自治区やモンゴル国から出版されたさまざまな文学史や文学作品集には、ほとんど『モンゴル文学珠玉百篇』から「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」を転載している。研究者たちが叙事詩について論じる際も、ダムディンスレンの編集したテキストを分析材料とする傾向が強い。それはダムディンスレンの慧眼により、『モンゴル文学珠玉百篇』に収録された数々の作品自体がモンゴル文学の精粹であり、編集方針に内包された厳密な学術精神に魅せられているからであろう。

『モンゴル文学珠玉百篇』所収のオールドス地域からのテキスト、すなわちエルデニトクトホが1958年に発表したテキストを底本に、ジャムツァラーノの写本とを比較して収録した「二頭の駿馬の伝説」(Qoyar jayal-un tuyuji) は、二つの物語からなっている。前半は二頭の駿馬の出奔と回帰、後半には駿馬を見分けることのできる少年が登場するという内容になっている。一方、外務省出版本を底本とする「チンギスの二頭の雄の駿馬の伝説」(Činggis-un qoyar er-e jayal-un tuyuji orusiba) には、駿馬が分かる少年の物語はない。

中央民族大学のケシクトクトホは、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の思想方針に関する論文のなかで、ダムディンスレンの『モンゴル文学珠玉百篇』所収のテキストを対象資料としている。ケシクトクトホは、1958年に発表されたエルデニトクトホのテキストとジャムツァラーノの収集本を「オールドス本」、1916年にモンゴル国外務

省から出版されたものを「ハルハ本」とそれぞれ命名している (Kesigtoyaqu 1988: 282-283)。ケシクトクトホは、多くの研究者たちが「ハルハ本」を詩歌体、「オールドス本」を散文体とする見方に賛成しながらも、自らは両者とも基本的に詩歌体であるとの観点を示している (Kesigtoyaqu 1988: 283)。文体の特徴に関しては、私もケシクトクトホの説を支持する。しかし現時点では1916年にモンゴル国の外務省から出版されたテキストが、どこから収集された写本を底本にしたかなどの情報がはっきりしない限り、いわゆる「ハルハ本」の存在が成立するかどうか疑問を感じる。

西北民族学院のウニンウラーンは、『モンゴル族古代文学』(*Mongyol-un Erten-ü Uran Jokiyal*) のなかに、「チンギスの二頭の雄の駿馬の伝説」と「二頭の駿馬の伝説」を収録している (Üninulayan 1993: 455-500)。いずれも『モンゴル族文学資料集』(*Mongyol Ündüsten-ü Udq-a Jokiyal-un Materiyal-un Emkidgel*) 第一巻からの転載であるが、もとの『モンゴル族文学資料集』という本の性質については説明がない。そのうち「二頭の駿馬の伝説」はオールドスから見つかった写本であるとし、ダムディンスレンの『モンゴル文学珠玉百篇』所収のオールドスからのテキストと比較して、語句訂正をおこなっている (Üninulayan 1993: 486-487, 488-500)。となると、少なくともウニンウラーンの利用した『モンゴル族文学資料集』第一巻内の「二頭の駿馬の伝説」は、エルデニトクトホが1958年に発表したものとちがう、別の写本である可能性もあるのではないか。

1.2 モスタールト師の記録

ベルギー出身の神父モスタールト師は1906年から1925年までオールドス地域の西部に滞在し、宣教活動のかたわらモンゴル研究に専念した。その研究活動は歴史、言語、民俗など広範囲にわたり、評価すべき偉業を残した。モスタールト師はさらに文献収集にも熱心であった。それらは長い戦乱や政治的混乱を経た現在、現地のオールドス・モンゴル人のあいだにはもはや伝わらなくなった貴重な文献類である。かつてオールドス・モンゴル人がどれほど豊富な文化財を維持していたかを、モスタールト師のコレクションからうかがうことができよう。モスタールト師の収集した文献を後日セールイス師がカタログの形で公表している (Serruys 1975: 191-208)。

モスタールト師は、1937年に北京で出版されたオールドス・モンゴル族の口碑集のなかに、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」を収めている (Mostaert 1937: 228-235)。モスタールト師によると、オールドス地域の南部³⁾で「二頭の駿馬」の歌が非常に広くうたわれているという。同地域の南部には「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の写本

も多数あり、自らが採録したテキストも、現地のモンゴル人が写本をみながら語ったものである (Mostaert 1937: 228)。

不思議なことにモスタールト師の採録したテキストには後半の人質の少年の物語は含まれていない。私の知っている限りでは、モスタールト師のテキスト以外のオルドスの写本は例外なく二つの物語からなっている。モスタールト師はまた、モンゴル国で「チンギス・ハーンの二頭の雄の駿馬の伝説」が出版され、ロシアの学者たち⁴⁾に注目されていたことを知っていた。おそらく1916年に出版されたものを指しているであろう。1937年の時点で、モスタールトはオルドス南部に写本と口頭の形で伝わる二種類のテキストをモンゴル国で出版されたものとを比較することはできなかった (Mostaert 1937: 228)。後日、モスタールト師はさらにテキストをフランス語に訳している (Mostaert 1947: 328-336)。

モスタールト師は口碑集の序文で、オルドス地域から「英明聖主チンギス・ハーンの二頭の駿馬が語った驚くべき物語の本」(sutu boyda činggis qayan-u qoyar jayal ügüleldügsen yayiqamsiytu üliġer-ün debter.) という写本を収集したと記述している (Mostaert 1937: 12)。ところがセールイス師のカタログにはこの写本のタイトルは見当たらず、写本も行方不明になったかもしれない。幸いなことにモスタールト師は1944年にこの写本の写真をハイシツヒに渡していたため、後日ハイシツヒの公表 (Heissig 1976: 521-543) により写本をみることができるようになった。ハイシツヒによると、モスタールト師は写本をオルドス地域南部から入手したという。内容的にはエルデニトクトホヤダムディンスレンの発表したテキストとほぼ同じである (Heissig 1976: 521)。テキストの最後には「光緒三十四年春の最初の月の二十六日に書写した」(Badarayultu törü-yin yučin dörbedüger on qabur-un terigün sarayin qorin jiryuyan-a biçibeï) とある (Heissig 1976: 543)。このテキストは1908年にモスタールト師のために書写したものであるかもしれない。

モスタールト師の口碑集は、のちに磯野富士子によってその一部が日本語に訳されている。「チンギス帝の二頭のジャガル」という翻訳 (モスタールト 1966 [93]: 3-17) によって、二頭の駿馬の伝説が日本で知られるようになったのであろう。近年、原山はモンゴルの神話・伝説に関する著作のなかで、特別に「駿馬の章」を設け、モスタールト師が採録した「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」を要約の形で取りあげている (原山 1995: 182-188)。原山は、ウマを主人公とする多くの物語のうち、もっともよく知られ、並外れてすぐれたストーリー展開をもつのが、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」である、と指摘している (原山 1995: 183)。

1.3 現地からの視点——チンギス・ハーンと関連づけた研究——

オルドス地域出身のナラソンとウルジバヤルは「オルドス・モンゴル族作品選」と題する論文のなかで、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の伝説は、オルドスで基本的に写本の形で維持されてきたと主張している。また、オルドスには二頭の駿馬に関する伝説や歌も多い。オルドス・モンゴル族は、チンギス・ハーンの二頭の駿馬はかつてボルドカイ⁵⁾ (Boru Toqui) で放牧されていたと信じている。二頭の駿馬にちなんだ地名も多く、たとえばオトク旗には「駿馬の井戸」(jayal-un qudduy) とよばれる井戸があるという (Narasun & Öljeibayar 1986: 205-206)。

ナラソンとウルジバヤルは「聖主の二頭の駿馬」という歌が、「政治の歌」(gürü dayuu) としてうたわれているという点に注目すべきであると強調している (Narasun & Öljeibayar 1986: 205-206)。さらに、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の写本が発見された場所も重要であると指摘している。写本はかつてオトク旗領内の「ベルグーダイの白宮」(Belgüdei-yin čayan ordun) に保存されていたという (Narasun & Öljeibayar 1986: 207)。「ベルグーダイの白宮」とはチンギス・ハーンの弟ベルグーダイを祭る祭殿のことである。ナラソンとウルジバヤルは、「聖主の二頭の駿馬」という歌は「政治の歌」であることと、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の写本がベルグーダイの祭殿にあったこと、この二点から考えて、当該叙事詩はチンギス・ハーンに関する重要な書物であると位置づけている (Narasun & Öljeibayar 1986: 207)。1910年にジャムツァラーノが収集した「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の写本もおそらくチンギス・ハーンの祭殿「八白宮」内に保存されていたものであろう。チンギス・ハーンとその妃をはじめ、チンギス・ハーン一族の祭祀を数百年にわたって維持してきたオルドス・モンゴル族と、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」がきわめて特殊な関係にあることは確かである。

2 写本の収蔵状況

「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」という叙事詩がオルドス地域を中心に写本の形で広がっていることは、多くの研究者たちによって報告されている。以下では主として中国各地におけるその収蔵状況について述べたい。

『全国蒙文古旧図書資料聯合目録』(以下『目録』と略す)によると、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」(Činggis qayan-u qoyar jayal-un tuyuji) は現在北京の民族文

化宮図書館，内蒙古自治区モンゴル語言文学歴史研究所図書室に保存されていることが分かる（八省区蒙古語文工作協作小組弁公室 1979: 296-297）。

2.1 民族文化宮本＝内モンゴル図書館 C 本

『目録』では北京の民族文化宮本を「清朝末期に抄写したもので，一冊本」としている（八省区蒙古語文工作協作小組弁公室 1979: 296）。1997年1月に私は民族文化宮を訪ね，図書館側の協力を得て写本をみることができた。おそらく図書館側がつけたと思われるタイトルは「二頭の駿馬の物語」(Qoyar jayal-un üliġer)となっている。図書館のスタッフによると，この「二頭の駿馬の物語」という写本は，1950年代に民族文化宮図書館のモンゴル語書物を充実させるため，内モンゴル図書館より寄贈されたものであるという。本来は内モンゴル図書館の所蔵であったが，誰がいつどこから収集し，内モンゴル図書館に入れたかは不明である。民族文化宮での検索番号は，1085-212/18で，12.5×28.5 cm の大きさである。

現在の内モンゴル図書館に民族文化宮所蔵の「二頭の駿馬の物語」のゼロックス・コピーがある。コピーとはいえ，左綴じにするなど極力原本に近い形にしている。内モンゴル図書館の番号は 005555 で，サイズは 12.5×30.3 cm となっている。計21枚である。私は内モンゴル図書館の許可を得て，それをコピーすることができた。詳しくは後述するが，内モンゴル図書館にはこの他にも二種類の写本があり，私はそれぞれ A, B と命名することにする。オリジナルが民族文化宮にあり，内モンゴル図書館内のゼロックス・コピー本を C とよぶことにする。以下私が C 写本とよぶものは，民族文化宮の写本と同一のものであることを断っておきたい。

次に内モンゴル語言文学歴史研究所図書室にある三種類の写本をみてみよう。『目録』によるとそのうちのひとつは，「中華民国37年すなわち1948年に抄写したもので，一冊本」となっている。いつ，誰によって収集されたかなどの情報は書かれていない。もう一種は「主君ブケビリクトの白宮より抄写」(Ejen Būkebiligtü-yin čayan ordun-ača seyiregūlbe) とあり，ブケビリクトはブケ・ベルグーダイの間違いにちがいない⁶⁾。つまりこの一冊本は先のナラソンとウルジバヤルも言及した (Narasun & Öl-jeyibayar 1986: 207)，オルドス地域オトク旗にあるチンギス・ハーンの弟ベルグーダイの祭殿からのものであることが判明する。1954年春，メルゲンバートル (Mergenbayatur) がオトク旗から『蒙古源流』など大量の文献資料を収集した (Tuyay-a 1998: 107)。この「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」もそのときの将来本かその写しであろう。第三種はオルドス地域のハンギン旗のビルーンダライ (Biligūndalai) と

いう人物のものであった（八省区蒙古語文工作協作小組弁公室 1979: 296-297）。以上のように同研究所所蔵の三種類の写本のうち少なくとも二種類は、オルドス地域からのものであることが明らかである。私はまだこの三種類の写本をみる機会を得ていない。

2.2 内モンゴル図書館の三写本

1996年12月から翌年の1月にかけて、私は内モンゴル図書館で文献調査を実施した。図書館側の協力のもと、現在少なくとも三種類の「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」が保存されていることが分かった。私はそれらを A, B, C と命名する。以下、3写本の特徴について簡単に述べたい。

2.2.1 A 写本

図書館の番号は03212で、オルドス地域から収集され、1958年に同図書館に収められたことになっている。収集記録を検索したが、具体的にオルドス地域のどの旗からのものかは不明である。計9枚の中国製の麻紙からなる左綴じの冊子本である。29×24.0 cm の大きさで、鞆ペンで一頁に14行あるいは15行の文字が書かれてある。ハン (qan) などの文字の右側に満州文字に使われる○記号が付けられている場合が多く、長音の表記であるかもしれない。抄写者は満州文の教養をもつ人であったろう。文字末端の「右引き尾」(segül, orkiča) はなめらかで、やや短い。それに対して「前引き」の方は「連写前引き」(uruysilay-a) と、「分写前引き」(čačuly-a) の両方ともきわめて長く鋭く、躍動感がおのずと紙面に躍り出ている。これらは典型的なオルドス・モンゴル式書風である⁷⁾ (図1)。

この美しい書体の写本は、残念ながら最後の部分が1頁ほど欠落している。9枚目には7行の文字しかない(図1)。内容的には、駿馬を識別できる人質の少年が自らの発見した駿馬に乗って逃走し、それに追いついた小さいジャガルが疲労死したところで終わっている。

A 写本の冒頭：

- 1: Erte nigen čay-dur erketü tngri-eče. jayayatai qoyar unay-a törügsen-ü tula.
- 2: Tere qoyar unay-a-yi arbayad arbayad gegüü-tü telijü kekügülüged ary-a kijü
- 3: Ondaruyulbai.……

The image shows a page of handwritten text in Mongolian script. The text is arranged in several lines, with diagonal lines connecting different parts of the script, possibly indicating relationships or corrections. The script is dense and appears to be a historical document. The lines of text are roughly as follows from top to bottom:

- Line 1: A single line of text.
- Line 2: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 3: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 4: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 5: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 6: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 7: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 8: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 9: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 10: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 11: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 12: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 13: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 14: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 15: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 16: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 17: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 18: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 19: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 20: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 21: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 22: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 23: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 24: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 25: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 26: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 27: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 28: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 29: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 30: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 31: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 32: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 33: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 34: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 35: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 36: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 37: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 38: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 39: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 40: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 41: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 42: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 43: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 44: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 45: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 46: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 47: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 48: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 49: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.
- Line 50: A line of text with a diagonal line extending from the end to the start of the next line.

図1 内モンゴル図書館A写本の最後の二頁

A 写本の最後 (図1):

5: Nigen üdeši külüg-yin toyusun yarqui-yi üjejü gertegen qariju iriged. imegen-

6: Tegen kelebe. ai em-e či mede büü ene üdeši……

7: ……



図2 内モンゴル図書館 B 写本

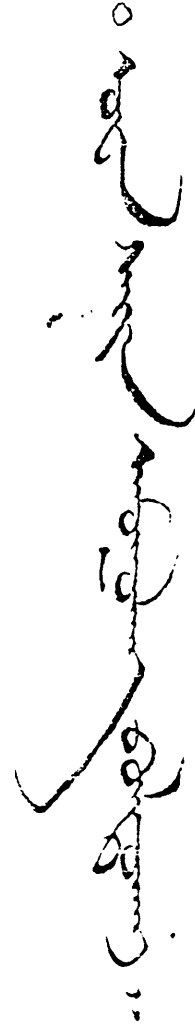


図3 内モンゴル図書館 B 写本 (表紙の裏)

2.2.2 B 写本

B 写本はモンゴル国で出版されたものを書きうつしたものである。現状では 13.9×27.7 cm の大きさで、計21枚42頁の紙からなる。図書館の番号は03284である。1958年に同図書館に収められたという。

B 写本には表紙に「チンギス・ハーンの二頭の駿馬の伝説」(Činggis-un qoyar jayal-un tuyuji orusiba) というタイトルがあり(図2), 表紙のうらには om sayin amuyulang boltuyai: とある(図3)。また、一頁目の冒頭も om suvasti šari (オム, 吉祥たれ) ではじまる(図4)。二, 三頁は図5, 6で示した通りである。

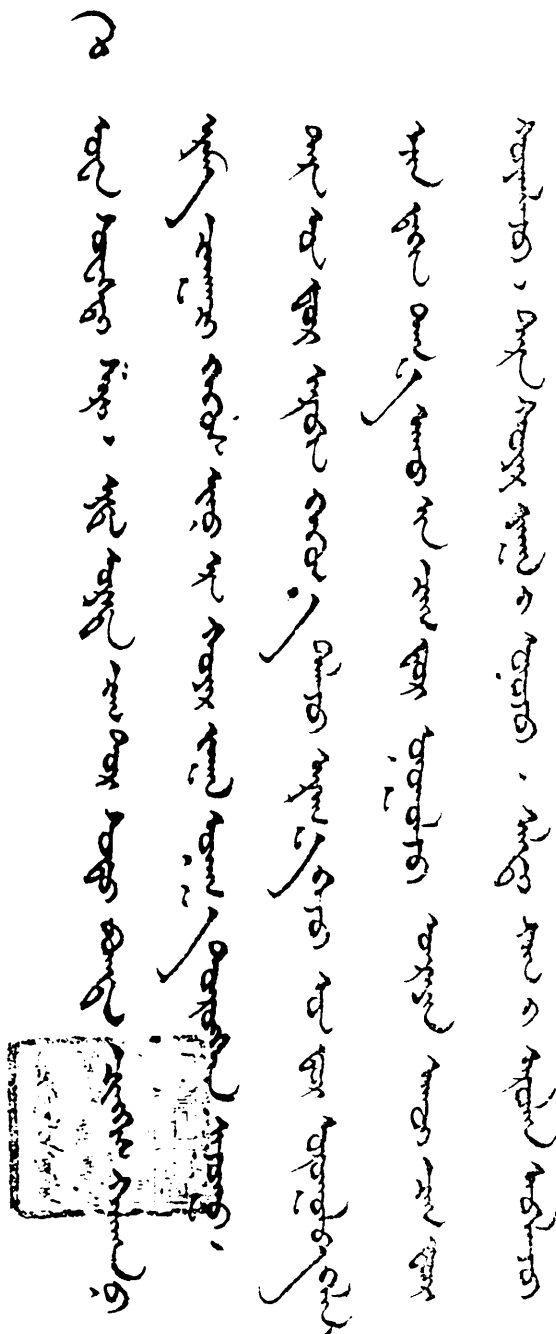


図4 内モンゴル図書館B写本の一頁目

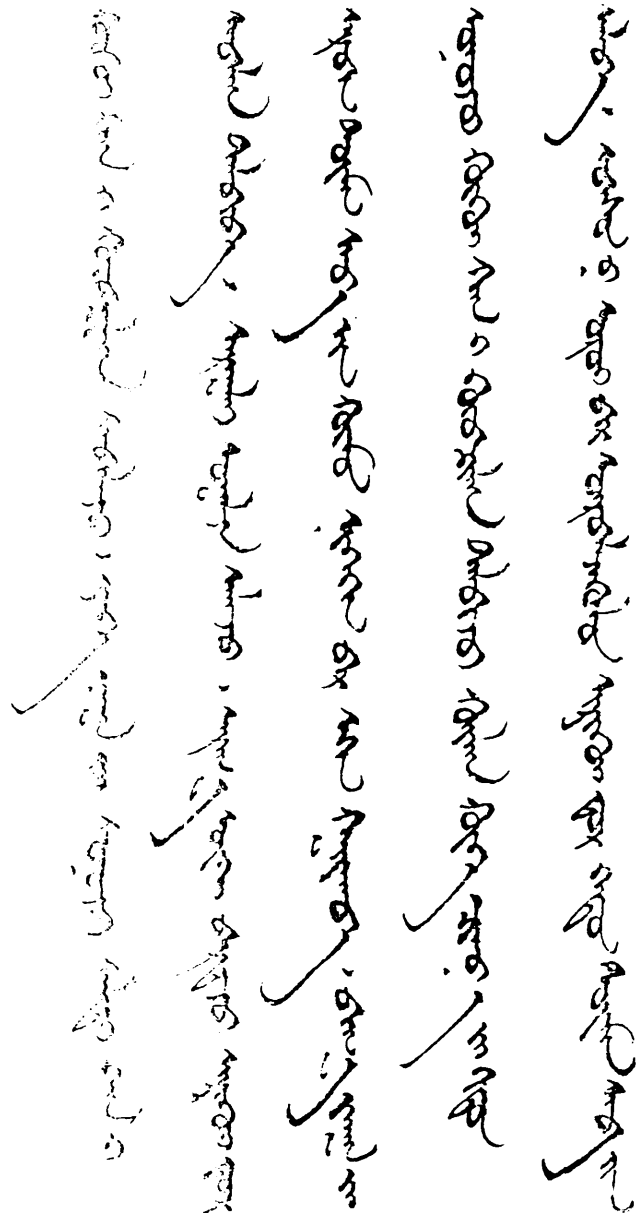


図5 内モンゴル図書館B写本の二頁目

写本の最後のページに次のような内容が書かれている (図7)。

△ Mongyol ulus-un sudur biçig-ün küriyeleng-ece Olan-a

モンゴル国の史籍研究所から共

Ergügdegsen-ü arban qoyar on-dur: nige mingyan

載十二年に。 一千

tabun jayun qubi-yi keblegölün yaryabai neyislel küriyen

五百部を出版させた。 首都クレ

deki Orus Mongyol-un keblel-ün yajar-a darumallabai

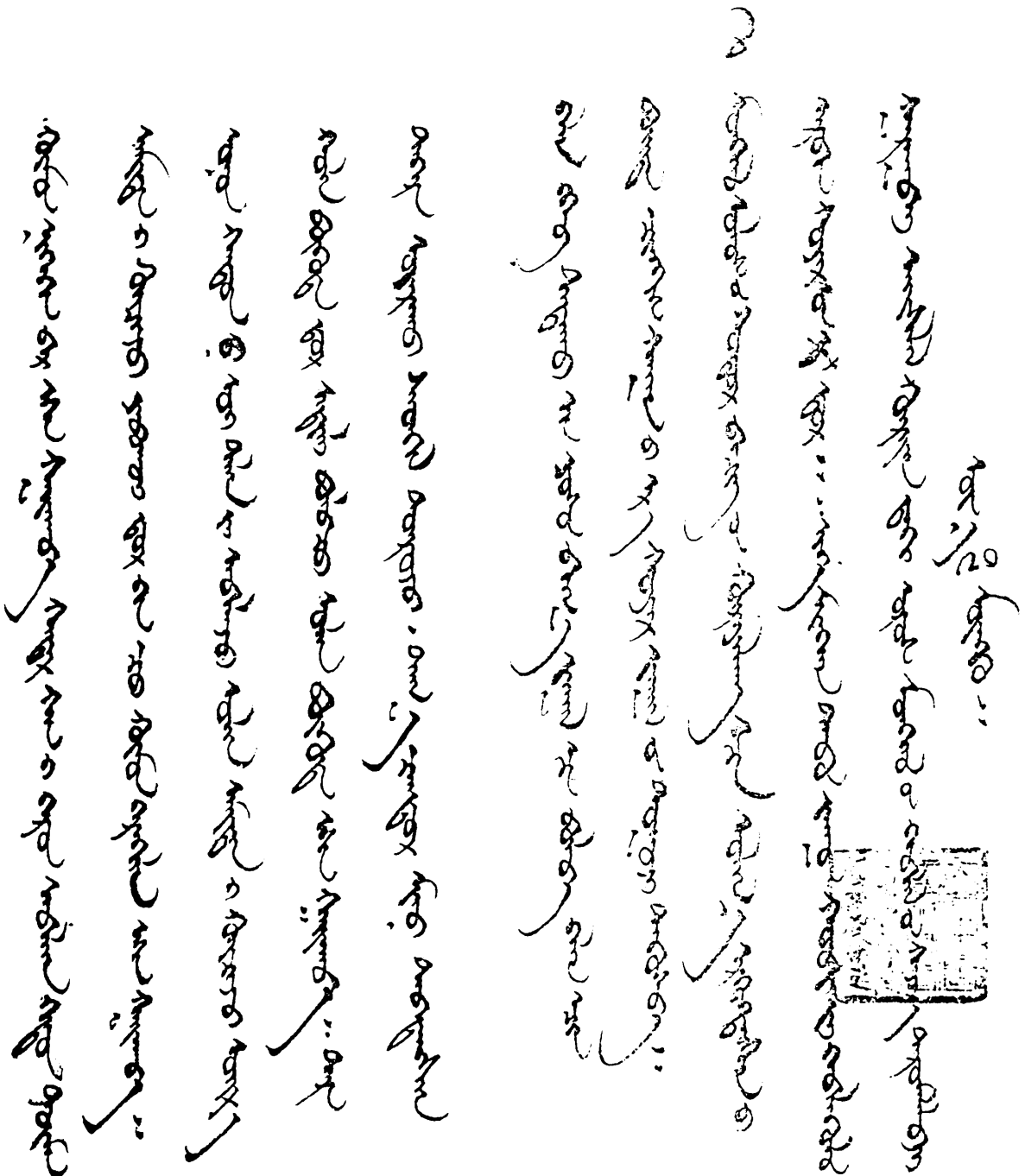


図6 内モンゴル図書館B写本の三頁目

図7 内モンゴル図書館B写本の最後の頁

楊 『チンギス・ハーンの二頭の駿馬』について

にあるロシア・モンゴル出版社から印刷された。

ün-e 90 mönggü:

定価 90圓⁸⁾。

以上の文面からこの B 写本は、ボグド・ハーン政権時代の共戴十二年すなわち 1923年に首都クレー⁹⁾で出版されたものから書きうつしたことが分かる。抄写者は不明である。前述のダムディンスレンがいう1916年にモンゴル国外務省から出版された「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」との関係も不明である。

1923年に出版されたものが、活字印刷かどうか確認できないが、それを底本に書きうつした B 写本は筆で抄写しており、一頁に 5 行の文字が書いてある。筆跡は上品で美しい。内容的には、チンギス・ハーンの二頭の駿馬の出奔と回帰という物語だけで、駿馬の分かる少年の話はない。ダムディンスレンがいう1916年にモンゴル国外務省から出版されたものとは、同じ内容である。本稿では、このB写本をダムディンスレンのテキスト（1959）と比較する。

2.2.3 C 写本

すでに触れたように、現在内モンゴル図書館にある C 写本は、そのオリジナルは北京の民族文化宮にある。一頁に 6 行筆で書かれた C 写本は、欠落部分が多い。

写本は、冒頭の二頭の駿馬の誕生、成長したあとにチンギス・ハーンとともに卷狩に出かける内容が完全に欠如している。現状では、チンギス・ハーンの「酷使」に耐えられず、小さいジャガルが不平不満をこぼし、出奔を勧めるところからはじまっている（図 8）。C 写本全体には、後半に駿馬を見分ける少年の物語も含まれているが、この後半部分にも欠落がある。つまり、人質であった少年が駿馬に乗って逃げたあと、アラクタイ・バヤンが聖主に人質の逃走を報告しているところで終わっている。追手が小さいジャガルに乗って追跡する内容がない。

C 写本の冒頭（図 8）：

……

1: Bida qoyar bayinam. abayai bida joriyun yabuy-a Altai Qan……

C 写本の最後：

5: ……egüni-i

005555

1. 蒙古の歴史と地理
 2. 蒙古の政治と行政
 3. 蒙古の経済と文化
 4. 蒙古の民族と宗教
 5. 蒙古の言語と文字
 6. 蒙古の文学と芸術
 7. 蒙古の科学と技術
 8. 蒙古の外交と国際関係
 9. 蒙古の現代史
 10. 蒙古の未来

図8 民族文化宮本=内モンゴル図書館C写本(現存する最初の一頁)

6: Ary-a ügei bolba geji irelüge. ejen minü ayiladdun soyurq-a

……

以上、内モンゴル図書館内に保存されている三種類の写本、私がそれぞれ A, B, C と命名した「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」について簡単に述べてきた。三種類の写本の特徴を以下のようにまとめることができよう。

A 写本と C 写本、とくに C 写本は欠落が多い。両者とも後半の駿馬を見分ける少年の物語に欠落があるが、C 写本の方が多い。モンゴル国共戴十二年クレで出版されたものを抄写した B 写本は、写本としてはもっとも完全な形をたもっているが、後半の駿馬を見分ける少年の物語が含まれていない点が目立つ。つまり、B 写本は純粹に二頭の駿馬の出奔と回帰をうたった物語である。一般的に、オルドス地域からの写本にだけ後半の少年の物語が入り、モンゴル国の写本にはそれがないとされている。この説にしたがえば、A, C 写本はオルドスからのものである可能性が高い。

2.2.4 その他の情報

ハイシヒによると、デンマークのコペンハーゲンにある王立図書館にも「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の写本があり、これは1922年にウランバートルで出版されたものであるという (Heissig 1971: 32)。また、日本では米子市にある「アジア博物館」にも、「チンギス・ハーンの二頭の雄の駿馬の伝説」と題するテキストがある。館員の話によると、1992年6月に春日行雄氏がウムヌ・ゴビ県のアベルメド知事から入手したという。ところどころに挿し絵がある。以上言及した諸写本の特徴をまとめたのが表1である。

3 口頭伝承の実態

写本の訳注に入る前に、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の口頭伝承の形、すなわち「^{ウルトゥイン・ドー}長い歌」としての「聖主の二頭の駿馬」について述べたい。オルドス地域で古くからうたわれている「聖主の二頭の駿馬」の実態を示したうえで、伝承の地域範囲を特定する。

冒頭で述べたように、学問と知識を重視するモンゴル社会において、古くから写本化された歌集が無数に存在する。中国内モンゴルとモンゴル国においても、モンゴル人研究者による民歌の採録とテキスト化は盛んである。本稿ではこのような歌集を使

表1 本稿で言及した諸写本

	収集先	所蔵先	研究状況	備
Žamcarano の写本	オルドスの 八白宮	サンクト・ペテルブルグの 東洋学研究所	Damdinsürüng (1959)	
Erdenitoytaqu	オルドス	不明	Erdenitoytaqu (1958) Damdinsürüng (1959)	少なくとも 4種収集
ボグド・ハーン政 権下1916年の出版 本	不明	未調査	Damdinsürüng (1959)	前半の物語 のみ
Mostaert の採録本	オルドス南 部		Mosataert (1937; 1947)	前半の物語 のみ
Mostaert の収集本	オルドス南 部	不明	Heissig (1976)	1908年に書 写
Üninulayan の言 及した写本	オルドス (?)	不明	Üninulayan (1993)	『モンゴル 族文学資料 集』より転 載
民族文化宮本『全 国蒙古旧図書資 料聯合目録』p. 296	不明	民族文化宮		内モンゴル 図書館より 寄贈、内モ ンゴル図書 館 C 本の オリジナル
内モンゴル語文学歴 史研究所の3写本	その1: オ ルドスのブ ケ・ベル グーダイの 祭殿 その2: オ ルドスのハ ンギン旗 その3: 不 明			1954年 にMergenba- yatur が収 集?
内モンゴル図書館 A本	オルドス (?)	内モンゴル図書館		1頁ほど欠 落
内モンゴル図書館 B本		内モンゴル図書館		モンゴル国 で1923年に 出版したも のより書写
アジア図書館所蔵 本	ウムス・ゴ ビ	日本・米子市アジア博物館		モンゴル国 での新版
コペンハーゲン王 立図書館所蔵本		コペンハーゲン王立図書館	Heissig (1971)	1922年にモ ンゴル国で 出版

用する。具体的には主として以下の歌集から引用した。

1. 『オルドス民歌』 (*Ordus arad-un dayuu*, Masijiryal 編, 1979)
2. 『オルドス民歌』 (*Ordus arad-un dayuu 1*, Bayar 他編, 1980)
3. 『オルドス民歌』 (*Ordus arad-un dayuu 2*, Bayar 他編, 1984)
4. 『モンゴル民歌叢書—バヤンノール盟集』 (*Mongyol arad-un dayuu-yin čobural-Bayannayur ayimay-un tegübüri*, 1991)
5. 『モンゴル民歌叢書—アラシャン盟集』 (*Mongyol arad-un dayuu-yin čobural-Alašan ayimay-un tegübüri* 上, 下1988)
6. 『モンゴル民歌五百首』 (*Mongyol arad-un dayun tabun jayu* 上, 1984)

公開出版されたものはこれだけではない。あくまで本研究と直接関係のある歌集に限定した。

3.1 オルドス・モンゴル族の「聖主の二頭の駿馬」

1996年春、私は「^{ウルトゥイン・ド}長い歌」の盛んな地域のひとつ、オルドス西部のオトク旗で調査をしていた。そのとき「聖主の二頭の駿馬」をうたってほしいという私の願いを受けいれて、一人の老人が立ち上がり、片手を胸にあてて、威風堂々とうたった。

Altai yo qangyai yajar-un öndür

アルタイとハンガイは山々の高いところ

Ayta yo mori mini tngri-yin unay-a:

私の去勢馬は天の賜物である。

Ejen Boyda-yin qoyar jayal

聖主の二頭の駿馬 (に)

Bay-a yo jayal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

……

うたいおわった老人は、「この長い歌はチンギス・ハーンとその駿馬を主題としているので、軽い気持ちでうたってはいけない」と語った。老人は「聖主の二頭の駿馬」の冒頭部分をうたった。その歌詞は出版されている歌集にあるテキストとほぼ同じであった。

ミ ミ ミ ミ

(1)

5 1 「聖主の二頭の駿馬」その1

3 6 — — 5 3 — 3 5 5 6 — 6 0 5 6 6 2 — —
ミ (ミ) ミ ミ ミ ミ

1 0 1 2 2 5 3 — 3 0 | 5 6 — — 5 3 3 5 — —
(ミ) ミ ミ ミ ミ (ミ) ミ

1 2 — — 1 0 1 2 2 2 1 — 1 3 — — 2 1 3 — — 2
ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ

1 6 — — — ||
ミ

ミ ミ ミ ミ

(2)

4/4 5/4 「聖主の二頭の駿馬」その2

3 6 5 0 3 . 5 | 5 6 — — 6 0 | 5 6 — 2 . 1
ミ (ミ) (ミ) ミ ミ (ミ) (ミ)

1 2 1 2 5 3 | 3 — — — | 3 3 6 5 3 — |
ミ ミ ミ ミ (ミ) ミ (ミ)

6 — — — 5 | 3 5 1 2 1 0 | 5/4 2 1 2 3 — 2
ミ ミ ミ ミ ミ (ミ) ミ

1 3 1 6 — — ||
ミ ミ

ミ ミ ミ ミ

(3)

「聖主の二頭の駿馬」その3

6 6 5 3 — 3 3 5 5 6 — — 6 0 5 5 6 2 — 1
ミ (ミ) (ミ) ミ ミ ミ (ミ) (ミ)

1 2 5 3 — — 3 0 | 6 6 5 3 — — 6 — 5 3 5 1
ミ ミ (ミ) (ミ) ミ

2 — — 2 0 1 2 3 — — 2 1 3 2 1 6 — — 6 0 |
ミ ミ ミ ミ (ミ) ミ

図9 オルドス地域の三種の「聖主の二頭の駿馬」
 出典『オルドス民歌』, 1979: 253-256.

このように、オルドス・モンゴル族のあいだでうたわれている「聖主の二頭の駿馬」は、「尊敬される歌」、「政治の歌」として理解されている。歌は現在主としてオルドス地域南西部のウーシン旗、北西部のオトク旗、北部のハンギン旗で伝承されている。

オルドス地域の「聖主の二頭の駿馬」の歌詞は、各地ともほぼ同じであるが、音調 (ayaly-a) はオトク旗とウーシン旗のあいだで微妙に異なる。1979年に編纂された『オルドス民歌』にも旋律のちがう三種類の「聖主の二頭の駿馬」を収録している (Masijiryal 1979: 253–256)。具体的にそれぞれどの地域から採譜したかは明らかにしていない (図9)。以下、「聖主の二頭の駿馬」の歌詞 (Bayar 他 1980: 435–440) をみてみよう。

1: Altai qangyai yajar-un öndür

アルタイとハンガイは山々の高いところ

Ayta mori mini tngri-yin unay-a:

私の去勢馬は天の賜物である。

Ejen Boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬 (に)

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

2: Küiten juujai-ban jayuyadui jiyal

冷たい馬銜をまだはめたことのないジャガル

Kölüsü-tei toqum-iyän toquyadui jiyal:

汗じみた鞍敷をまだかけたことのないジャガル

Ejen Boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬 (に)

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

3: Sibar-tai ebesü-yi idegedüi jiyal

泥のついた草をまだ食べたことのないジャガル

Šälčiy-tai usu-yi uuuyadui jiyal

泥水をまだ飲んだことのないジャガル

Ejen Boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬 (に)

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

4: Bayan qoyulai-dayan belčiger-tei jiyal

豊かな谷間に（専用の）放牧地をもつジャガル

Bayan bulay-tayan umda-tai jiyal:

豊かな泉で水を飲むジャガル。

Ejen Boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭のジャガル（に）

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

5: Jegün sili-degen belčiger-tei jiyal

東の丘陵に放牧地をもつジャガル

Jülgetü bulay-tayan umda-tai jiyal:

若草のある泉で水を飲むジャガル。

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

……（中略）……

6: Boru toqui-du belčiger-tei jiyal

「褐色の湾曲地帯」に放牧地をもつジャガル

Boru tib-dü umda-tai jiyal

「褐色の丘」に水飲み場をもつジャガル

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal bayiji sai:

小さいジャガルがいたのだ。

7: Boyda-ban üjebel ürgüdeg jiyal

聖主をみたら驚く¹⁰⁾ ジャガル

Bolay-a-ban üjebel güiçedeg jiyal:

貂をみたら追いつくジャガル。

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

8: Ejen-iyen üjebel silgedeg jiyal

主君をみたら身震い¹¹⁾ するジャガル

Ijili-ben üjebel inçayaday jiyal:

仲間をみたらいななくジャガル。

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さなジャガルがいたのだ。

9: Següder-eče-ben ürgüdeg jiyal

自分の影にびっくりする¹²⁾ ジャガル

Sürüg-iyen üjebel güyüdeg jiyal:

自分の群れをみたら走っていくジャガル。

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

10: Toyusu-ban üjebel toyladay jiyal

自分の（たてた）ほこりをみて跳ねて遊ぶジャガル

Tulai-ban üjebel güiçedeg jiyal:

ウサギをみたら追いつくジャガル。

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

11: Elesü-ben üjebel körbedeg jiyal

沙漠をみたら寝転ぶ¹³⁾ ジャガル

Irbis-iyen üjebel güiçedeg jiyal:

豹をみたら追いつけるジャガル。

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

……（中略）……

12: Boru biljuuqai jirgikü-eče urida

茶色のスズメがさえずる前に

Boyda ejen degegsilekü-eče urida.

聖主が召しあがる前に

Ejen Boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal ni bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

13: Qatun qariyačai jirgilekü-eče urida

ツバメがさえずる前に

Qayan ejen-ü degegsilekü-yin urida.

主君ハーンが召しあがる前に

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal ni bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

14: Eng-ün kümün-ü degegsilekü-eče urida

庶民が食事する前に

Engger-ün tobči-ban tobčilaqu-ača urida

胸のボタンをかける前に

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

15: Jam-un kümün-ü degegsilekü-eče urida

旅人が食事する前に

Jayaman-u tobči-ban tobčilaqu-ača urida

襟のボタンをかける前に

Ejen boyda-yin qoyar jiyal

聖主の二頭の駿馬（に）

Bay-a jiyal bayijai sai:

小さいジャガルがいたのだ。

歌はまず「アルタイとハンガイは山々の高いところ」ということばではじまる点は興味深い。蓮見によると、一般的に西モンゴルの叙事詩はアルタイ山を賛えることから語りだされるという（蓮見 1993: 32, 132）。この一句はその形式を思わせる。歌はさらに「去勢馬は天の賜物」とであると定義し、聖主チンギス・ハーンには二頭の駿馬がおり、なかでもとくに小さいジャガルの存在を強調している。つづいて第2-3段落では、この二頭の駿馬は泥のついた草や泥水を飲まない天性の上品さをそなえ、冷たい馬銜や汗じみた鞍敷をつけられたことのない、初々しい駿馬であったとうたっている。第4-6段落は駿馬の専用の放牧地について述べている。健康的で体力が溢れ

ていることから、ものごとの動静に機敏に反応する。仲間のウマをみればいななき、主君チンギス・ハーンをみたら人懐っこく身震いをする。いざ主君とともに狩猟に出かけると、あっという間にウサギや貂、豹に追いつく（第7-11段落）。これらの描写は、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の冒頭の内容とまったく同じである。

現存する歌のなかには二頭の駿馬が「酷使」に耐えられず、出奔してしまう物語はない。アルタイ山地で自由な数年間を送る話も欠けている。ただし後半に突如として、チンギス・ハーンのもとへ回帰する内容が出てくる。これを第12-15段落で確認できる。聖主チンギス・ハーンが目覚めて服のボタンをかける前、食事をする前に一刻も早く姿をみせようと走りつづける二頭の駿馬。これらはすべて叙事詩の内容と一致する。詳しくは第4章のテキストを参照されたいが、第12-13段落のなかには、叙事詩とまったく同じ表現もみられる。

以上示した「聖主の二頭の駿馬」という「長い歌」の内容は、叙事詩の物語の冒頭および末尾と対応している¹⁴⁾。私は「聖主の二頭の駿馬」という歌は、本来は非常に長かったと推測しているが、現状では叙事詩のダイジェスト版のようなものになっている。

3.2 「聖主の二頭の駿馬」の伝承地域

「聖主の二頭の駿馬」という「長い歌」は、オルドス・モンゴル族の歌であることは、誰もが認める事実である。近年、内蒙古自治区からさまざまな歌のテキスト集が出版されているが、例外なく「聖主の二頭の駿馬」は、オルドス・モンゴル族の代表的な歌としてとりあげられている。たとえば、1979年初版印刷の『モンゴル民歌五百首』は、各部族（盟）の歌を収録している。そのうち「オルドス部分」に「アルタイ・ハンガイは山々の高いところ」（Altai qangyai yajar-un öndür）という歌がある（Naranbatu 他 1984 [79]: 639-641）。歌詞は一般的に「聖主の二頭の駿馬」とよばれる歌のとまったく同じである。

オルドス地域ほど盛んではないが、隣接のアラシャン地域、ウラト地域のモンゴル族も「聖主の二頭の駿馬」をうたう。以下では、この両地域における伝承について検討する。

3.2.1 アラシャン

アラシャン・モンゴル族は大きく「アラシャン人たち」（Alašančud）と「アラシャン・トルグート」に分けられる。「アラシャン人たち」と称する人びとは、ホシュー

トやウールトなどの部衆からなり、チンギス・ハーンの弟ハプト・ハサルの末裔であるといわれている。その大半はもともと今日の新疆ウイグル自治区のウルムチ周辺で遊牧していたが、1637年頃に東のアラシャンあたりへ移動してきた。一方、「アラシャン・トルグート」は、エジル（ボルガ河）から新疆のハラ・サイル、ハミあたりへ1730年頃に移ってきた人びとである（Bayatur 他 1988: 1-10）。「アラシャン人たち」を構成するホシュートとウールト、それにトルグートは、いずれもオイラト・モンゴルすなわち俗にいう「西モンゴル」の一部である。

オルドス・モンゴル族は、自分たちがアルタイやハンガイから現在の居住地、「褐色の湾曲地帯」に移ってきたという伝承をもつ。また、自分たちの祖先はアラク・ウーラ (Alay Ayula), アルタン・デブシ (Altan Tebsi) から来たと信じている。アラク・ウーラとはアラシャンの賀蘭山のモンゴル名である。北元時代には一時オルドス・モンゴル族の放牧地であった。清朝時代になってからも一部のオルドス・モンゴル族は、オルドスをとりかこむ黄河の北側でアラシャン・モンゴル人、ウラト・モンゴル人たちと混住していた。

伝承上の故郷がともにモンゴル高原の西、アルタイ山地や新疆北部にあるということ、言語の面でも互いに分かりやすいということが、オルドス・モンゴルとアラシャン・モンゴルとの精神構造をかぎりなく接近させているのであろう¹⁵⁾。

アラシャン地域のホシュート部、ウールト部のあいだに「アルタイ・ハンガイ」(Altai Qangyai) という歌がある。その歌詞はオルドス地域の「聖主の二頭の駿馬」とほぼ同じである。以下はその歌詞の一部である (Bayatur 他 1988: 46-49)。

Altai Qangyai yajar-un öndür

アルタイとハンガイは山々の高いところ

Ayta mori tngri-yin unay-a:

去勢馬は天からの賜物だ。

Ejen Činggis-un qoyar siry-a

主君チンギスの二頭の淡黄色馬 (に)

Bay-a siy siry-a ni ončatai siry-a:

やや小さい方が特別な淡黄色馬だ。

Küiten juujai jayulyay-a ügei

冷たい馬銜をまだはめたことがなく

Kölüsütei toqum toquy-a ügei:

汗じみた鞍敷をまだつけたことがない。

楊 『チンギス・ハーンの二頭の駿馬』について

(dakilta くりかえし)

…… (中略) ……

Tal-a-du yarbal taysiday sirya

平野に出ればいなく淡黄色馬

Tarbay-a üjebel güiçedeg sirya:

タルバガンをみたら追いつける淡黄色馬。

…… (以下略) ……

「聖主の二頭の駿馬」では登場するウマの毛色はジャガルであるのに対し、アラジャンの「アルタイ・ハンガイ」ではシャルガすなわち淡黄色馬になっている。

モンゴルでは古くから淡黄色馬を珍重する。たとえば、『モンゴル秘史』にはチンギス・ハーン一家の「淡黄色馬など八頭のウマ」に関する記述がある。泥棒に盗まれたウマを捜しにテムジンことのちのチンギス・ハーンは一人で旅に出かける。途中であった盟友の力もあって、無事馬群を奪いかえすことに成功する、という話である (Eldengtei & Ardajab 1986: 201–208)。ウマを神聖視するモンゴル人にとって、「駿馬の失踪」はきわめて重要な現実的な問題である。そのためか、「失踪した駿馬」を捜すという行動は、歌や叙事詩のモチーフにされることも多い。

オルドス地域にあるチンギス・ハーンの祭殿、八白宮のひとつに「手綱の白宮」(Jiloyu-yin čayan ordun) がある。この白宮はチンギス・ハーンの「八頭の淡黄色馬」の転生とされるウマを祭っている (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 268–276; 楊 1995: 39–40)。以上のように私が主張したいのは、歌のなかに淡黄色馬が登場しても、オルドス・モンゴル族の「聖主の二頭の駿馬」にあるジャガルとは矛盾するものではないということである¹⁶⁾。

3.2.2 ウラト

次にウラト・モンゴル族をみてみよう。

ウラト・モンゴル族はチンギス・ハーンの弟ハブト・ハサルの属民で、本来は内モンゴルの東北部クルンブル (ホロンバイル) 地域で遊牧していたが、清朝初期に西へ移動し、陰山山脈の西北、大ゴビの南部に定着して今日に至る (Falluu 他 1991: 3–4)。

ウラト・モンゴル族がオルドス・モンゴル族の隣人となって約300年たった。今や人びとの日常生活のなかで、オルドス民歌は欠かせない存在となった。伝承によると、

ウラト・モンゴル族の貴族たちはとくにオルドス・モンゴル族の女性を好んだという。民歌の伝播にオルドス地域からウラトへ嫁いでいった女性たちの果たした役割は、大きかったにちがいない¹⁷⁾。

私がウラト・モンゴル族出身の複数の知人に確かめたところ、ウラト・モンゴル族も「聖主の二頭の駿馬」を知っているという。しかも、かれらはみな「聖主の二頭の駿馬」は、オルドス・モンゴル族の歌であると認めている。ここでウラト・モンゴル族のあいだでうたわれている「聖主の二頭の駿馬」をみてみよう。『モンゴル民歌叢書—バヤンノール盟篇』にその歌詞がある (Falluu 他 1991: 737-739)。

Altai Qangyai yajar-un öndür

アルタイとハンガイは山々の高いところ

Ayta mori tngri-yin unay-a

去勢馬は天の賜物

Boru biljuuqai jirgikü-eče emün-e

茶色のスズメがさえずる前に

Boyda ejen degegsilekü-eče urida:

聖主が召しあがる前に (着こう)。

Ejen Boyda-yin qoyar jayal

聖主の二頭のジャガル (に)

Bay-a jayal bayiju toytan-a

小さいジャガルがいて (長く) とどまる¹⁸⁾

Ijili-ben üjebel ergeltei bile

仲間をみたらもどってくるのである

Boyda-ban sanabal bučaday bile:

聖主を思うと帰ってくるのである。

Suqai-tai yajar siryulan

紅柳のあるところにもぐり

Suli-tai yajar qajayarlan

ソリ草のあるところに馬銜をつけた

Ejen boyda-yin qoyar jayal

聖主の二頭の駿馬 (に)

Bay-a jayal ni bayiju bile:

小さいジャガルがいたのである。

Agi-tai yajar toytaltai bila

場 『チンギス・ハーンの二頭の駿馬』について

ヨモギのあるところにおちつく

Aduyu-tai yajar bayiltai bila

馬群のいるところにそろろう

Ünege üjebel güičedeg bisiü!

キツネをみたら追いつくではないか

Ünesü üjebel körbedeg bisiü!

灰塚をみたら寝ころがるではないか

Čöngküg üjebel sočiday bisiu!

(道に) 穴 (があるの) をみたら驚くではないか

Činu-a üjebel güičedeg bisiü!

オオカミをみたら追いつくではないか

…… (中略) ……

Següder-eče-ben ürgüdeg bisiü!

自分の影に驚くではないか

Sürüg-iyen üjebel üürsedeg bisiü!

自分の群れをみたら (低く) いなくなではないか

Ejen-iyen üjebel silgedeg bisiü!

主君をみたら身震いをするではないか

Ijili-ben üjebel inčayaday bisiu!

仲間をみたら (高らかに) いなくなではないか

このように、歌はまずチンギス・ハーンが「食事をとる前に帰ろう」という意味の歌詞からはじまっている。その前にあるべき出奔をうたった内容はみられない。全体としてやはり、本来はかなり長かったはずの歌の一部しかうたわれていないという印象を受ける。

アラシャンとウラト地域でうたわれている「アルタイとハンガイは山々の高いところ」という歌が、本質的にはオルドス・モンゴル族の「聖主の二頭の駿馬」であることは、以上のように歌詞の呈示によって立証されたといえよう。アラシャン、ウラトの両地域もいまや「聖主の二頭の駿馬」をうたう文化圏に入る。

3.3 叙事詩とその変形の問題

モンゴル国のツェレンソドナムが『モンゴル文学』(*Mongyol uran jokiyal*) のなかで、次のように指摘している。「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」はただ単に叙事詩の形で伝承されているのではなく、「ジェールゲネのある丘陵」(*Jegergen-e-tü-yin*

sili) という歌のようにいくつかの変形 (qubilburi) があるという (Čeringsodnam 1989: 414)。ここで、そのような変形にふれてみよう。

1997年7月、私はかつてのモンゴル帝国の都カラ・コルムを離れ、南のゴビ地帯を目指していた。行く先々で、私は老人たちにチンギス・ハーンの二頭の駿馬についての歌を知っているかとたずねた。カラ・コルム周辺では知る人はいなかった。南下をつづけ、ウブル・ハンガイ県南部バヤンゴル郡領内のゴビ地帯に入ったとき、酒に酔った二人の男に出あった。あまり期待もせずいつもの質問を試してみた。私の質問を聞いた二人は、急に正気に戻ったような表情でうたいだした。

Jegergen-e-tü-yin sili deger-e

ジェールゲネのある丘陵のうえに

Adaliqan qoyar jayal bayil-a.

同じ毛色の二頭のジャガルがいた。

Yeke jayal-ni yabuy-a geju qoryudaba

大きいジャガルが行こうと勧めたが、

Bay-a jayal-ni bayiy-a geju kelebe.

小さいジャガルは(行くのを)止めようといった。

うたいおわってもなお真面目な二人にインタビューした。かれらはこの歌を「ジェールゲネ¹⁹⁾のある丘陵」とよんでいた。「ジェールゲネのある丘陵」はチンギス・ハーンの二頭の駿馬をうたった「長い歌」で、真面目にうたわなければならない、と説明していた。年齢が60才というこの二人の男は、父母からその歌をなつたという。

モンゴル国ウブル・ハンガイ県南部、ゴビあたりでうたわれている「ジェールゲネのある丘陵」とほぼ同じ歌詞の歌を、アラシャン地域に住むトルグート・モンゴル族もうたう。歌のテキスト集ではその歌を「二頭の駿馬」(Qoyar jayal)としている。以下はその歌詞 (Bayatur 他 1988: 125-126) である。

Jegergenetü-yin sili-dü

ジェールゲネのある丘陵で

Jergečejü joysuysan qoyar jayal:

並んで立っている二頭の駿馬。

Küiten juujai jayulyay-a ügei

冷たい馬銜をまだはめられたことがなく

Köndei jilayan-du uyay-a ügei:

谷間や峡谷²⁰⁾ でつないがれたことがない。

Kölüsü-tei toqum toquy-a ügei

汗じみた鞍敷をまだつけられたことがなく

Kötül-ün časun-du uyay-a ügei:

雪のある山の斜面でつなされたことがない。

Ür-ün jiber-iyer bariy-a ügei

夜明けの寒いときに捕えられることがなく

Üdesi-yin serigün-dü talbiy-a ügei:

夕方の涼しいときに放たれることがない。

Tal-a-du yaruyad yabubal

平野に出かけていったときは

Tal-a-yin qoyar görügesü:

曠野の二頭の野獣（のようだ）。

Taniqu ügei kümün üjekü-dü

見知らぬ人がみたら

Ejen ügei qoyar jayal:

主君のない²¹⁾ 二頭の駿馬だ（といわれるだろう）。

Ayil-un yadayur yabubal

人家の前を通ったら

Adaliqan qoyar jayal:

まったく同じ（毛色）の二頭の駿馬だ（といわれるだろう）。

Aryal-un kümün üjebel

（草原で燃料）牛糞を拾う人がみたら

Aldayul qoyar jayal:

逃走中の二頭の駿馬（だといわれるだろう）。

Ene qoyar jayal bol

この二頭の駿馬というと

Ejen qayan-u külüg siü:

ハーン主君の駿馬なのである。

歌のなかに二頭の駿馬がくりかえし登場する。内容的には、二頭の駿馬の突出した気位をうたったあと、チンギス・ハーンのあとを離れて出奔中の姿やそのウマをみた人びとの反応を加えている。現在の歌詞は短いが、本来は長かったのかもしれない。

各地に伝えられている「聖主の二頭の駿馬」およびその他の変形を整理したのが表

表2 「聖主の二頭の駿馬」およびその他の変形

地域	歌の名称	
オルドス	1 : Ejen boyda-yin qoyar jayal 2 : Altai qangyai yajar-un öndür	
アラシャン	1 : Altai qangyai 2 : Qoyar jayal	①Altai qangyai には siry-a (淡黄色馬) が登場する。 ②Qoyar jayal は Jegergen-e-tü-yin sili と同じ歌詞。
ウラト	Altai qangyai yajar-un öndür	
ウブル・ハンガイ 県南部 ゴビ	Jegergen-e-tü-yin sili	

2である。叙事詩およびその変形についての私の考えは、以下のとおりである。

まず、オルドス地域で「聖主の二頭の駿馬」とよばれている「長い歌」は、現在のアラシャンやウラトでは「アルタイとハンガイは山々の高いところ」という名で知られている。歌詞の最初の一句を歌の題目のようにみることは、モンゴル人のあいだで定着している。アラシャン地域のトルグート・モンゴル族のあいだに伝わる「二頭の駿馬」という歌は、ウブル・ハンガイ県南部やゴビ地帯の「ジェールゲネのある丘陵」と同じ内容である。「聖主の二頭の駿馬」と「アルタイ・ハンガイは山々の高いところ」とを比べたところ、言語表現や物語の展開などの点で目立つ差異はないとみてよかろう。これに対し、「ジェールゲネのある丘陵」の冒頭の「ジェールゲネのある丘陵で、並んで立つ二頭の駿馬」という歌詞は、少なくとも現在の「聖主の二頭の駿馬」と「アルタイとハンガイは山々の高いところ」にはないユニークな歌詞である。

次に、叙事詩の変形である「ジェールゲネのある丘陵」という歌の伝承地域に注目したい。1997年秋にモンゴル国東部のヘンティ県、ドロヌート県あたりを調査した際、機会をみて確認したところ、チンギス・ハーンの二頭の駿馬についての歌を知っている人はいなかった²²⁾。モンゴル国の複数の知識人にたずねたところ、「ジェールゲネのある丘陵」は、同国西部のホブド県に居住するミンガト部、ジャハチン部の歌であるという情報が得られた。ジェールゲネという草は沙漠性草原のやや高いところに茂る。地理的にはオルドスやアラシャン、モンゴル国西部の沙漠、ゴビ地帯に生長する草である。これらの地域で、ジェールゲネが一面にはえひろがる高地に「ジェールゲネのある丘陵」という地名がつく。ジェールゲネが民謡に登場してもおかしくはない。「ジェールゲネのある丘陵」のような叙事詩の変形は、やはりモンゴル国南西部、西

楊 『チンギス・ハーンの二頭の駿馬』について

部からアラジャン、オルドスなどの地域にかけて伝承されていることはまちがいない。

「聖主の二頭の駿馬」はオルドス・モンゴル族の歌であり、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」とともに、古くからオルドス地域に伝承され今日まで維持されている。アラジャン地域の「二頭の駿馬」、ウブル・ハンガイ県南部やゴビ地帯の「ジェールゲネのある丘陵」は、ツェレンソドナムの指摘どおり、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の変形である。今や「聖主の二頭の駿馬」をうたう文化圏に入るウラト・モンゴル族であるが、ウラト・モンゴル族がうたう「アルタイとハンガイは山々の高いところ」は、かれらが東北から移動してきたあと、オルドス・モンゴル族から伝わったものであろう。

以上、口頭伝承の実態について述べてきた。次に、写本の内容をみてみよう。

4 写本の訳注

前章では「長い歌」としての「聖主の二頭の駿馬」のさまざまな変形を呈示し、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」と比較しながら、その分布地域を検討した。本章では、オルドス地域から入手した二種類の写本とモンゴル国からの写本ひとつをテキストとして呈示し、訳注を試みる。

4.1 公開する写本の来歴

本章では三種類の手写本を公開する。そのうちのひとつはオルドス出身の知識人オーノス氏の提供によるもので、私はこれを仮に「OO 本」すなわち「オルドスのオーノス氏の提供本」(Ordus-un Oyonos-un Debter)と命名する。もうひとつは同じくオルドスのガタキン・ハスウーラ (Qatagin Qasayula) が所蔵するビシューガルマ (Bisigüü Farm-a) 家の写本で、これを「QB 本」とよぶことにする。第三の写本は現在内モンゴル図書館に所蔵されているもので、本稿で私は B 本とする。2.2.2で述べたように、B 写本はモンゴル国で出版されたものを書きうつしたものであり、ここで詳述を省く。

OO 本：

オーノス氏 (1999年現在70才、写真1) は、オルドス地域ウーシン旗出身の知識人である。オーノスという個人名は、かれ自身が属する父系親族集団 (oboy) の名称に由来する。かれはみずからの出自集団名を個人名として採用したのである²³⁾。

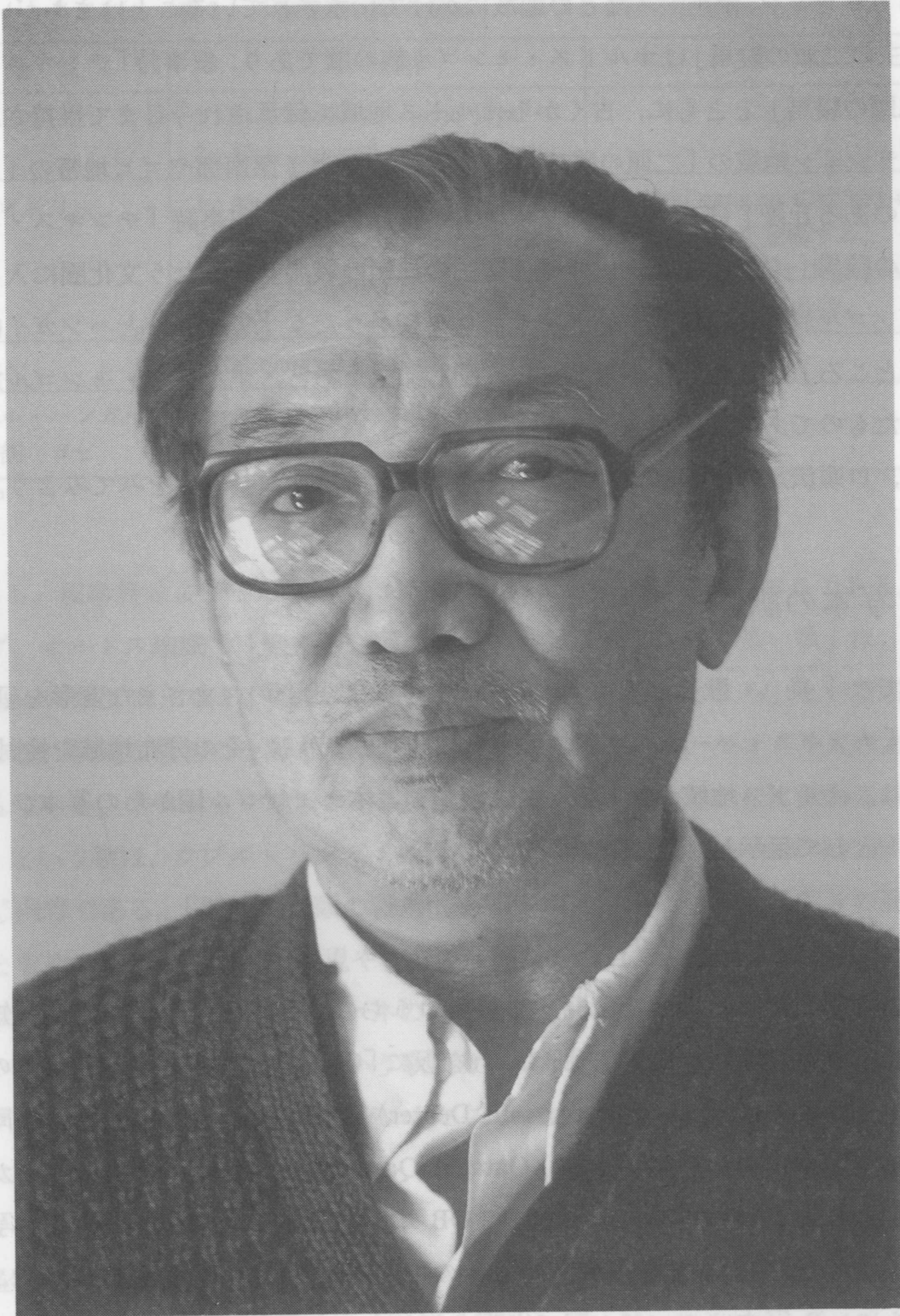


写真1 OO本の提供者オーノス氏

オーノス氏が私に提供した写本、すなわち OO 本は、かれが1950年代にオルドス地域で実地調査をしていたところに収集したものである。

OO 本は 12.0 cm×28.0 cm の左綴じの冊子本である。紙は中国製の麻紙で、糸も麻紙である。計22枚。表紙に「聖主の二頭の駿馬の物語」(Ejen boyda qoyar jayal-un üliġer bile) とある。表紙のうらには文字がない。写本の右上端に摩損があり、その

うち最初の2枚は、右上端の一字が半分くらい切れている。写本には鉛で線が引いてあり、筆で一頁に7行の文字が書いてある。

オーノス氏は、みずからが収集し、私に提供した写本は、非常に古い特徴をもつものだと主張した。その証拠として、一部の写本の冒頭にあるような *om suvasti šari* という仏教的なことばがまったくないことをあげている。またオーノス氏をはじめ、内モンゴルの複数の研究者たちはみな、OO本の書写は達筆であると認めた。

QB本：

QB本はオルドス地域ウーシン旗西部に住むガタギン部出身のハスウーラ氏（葛玉山 1999年現在63才，写真2）が私に提供したものである。ガタギンはウーシン旗の一大氏族集団で、ゲシクバトやアムルジャラガルなど多くの知識人を輩出した名門である（Qasbiligtu 1986; Qurčabayatur 1992; Heissig 1994: 591–614）。ハスウーラは地元で歌が上手なことで知られている。近年内モンゴルの新聞や雑誌で詩を発表し、詩人としても注目されつつある。

QB本は1966年以降、文化大革命のときに抄写したものである。ハスウーラによると、文化大革命がはじまった1966年、モンゴル族から没収された写本や書籍類は、人民公社本部に山積みになっていたという。これらの文化財はやがて共産党によって燃やされたが、危険をおそれずに人目をぬすんで少しずつもちだして、隠しとおした人もいたという。ハスウーラもそのなかのひとりである。かれは写本をもちだし、深夜に自宅で抄写してから、気づかれないようにオリジナルを元のところへ返していたという。

ハスウーラは 13.0 cm×19.0 cm の「烏審旗沙爾利格人民公社公用紙」（Üüsin qosiyun-u šarliy arad-un güngšë-yin alban-du kereglekü čayasu）という原稿用紙に万年筆で抄写している（図10，11）。一頁に12～14行の文字が書いてある。表紙に「聖主の二頭の駿馬の伝説」(Ejen boyda-yin qoyar jayal-un tuyuji orusiba.)とある他に、次のような6行の文字がある（図10）。

Far biçimel:

手写本。

Enekü yar biçimel bol: Ordus barayun yar-un

この手写本は、オルドス右翼

Emünetü qosiyun (odoki Üüsin qosiyun-u uridu bey-e siyang)-



写真2 QB本の提供者ガタギン・ハスウーラ氏

前旗 (すなわち現在のウーシン旗河南郷)

u Yeke Siber-teki Jirüken Čoyčus Qutuvtai Sečen Qung

のイケ・シベルのジュルケン・チョクチュス・ホトクタイ・セチェン・ホン・

Tayiji-yin üres bolqu Jidanbal-Bisiyarm-a Da

タイジの末裔であるジダンバル・ビシューガルマ・ダー・

烏审旗沙尔利格人民公社公用紙

13x8=104 第 年 月 日

Handwritten text in vertical columns, including the date '1960年10月1日' and the signature '楊'.

図10 QB本の表紙

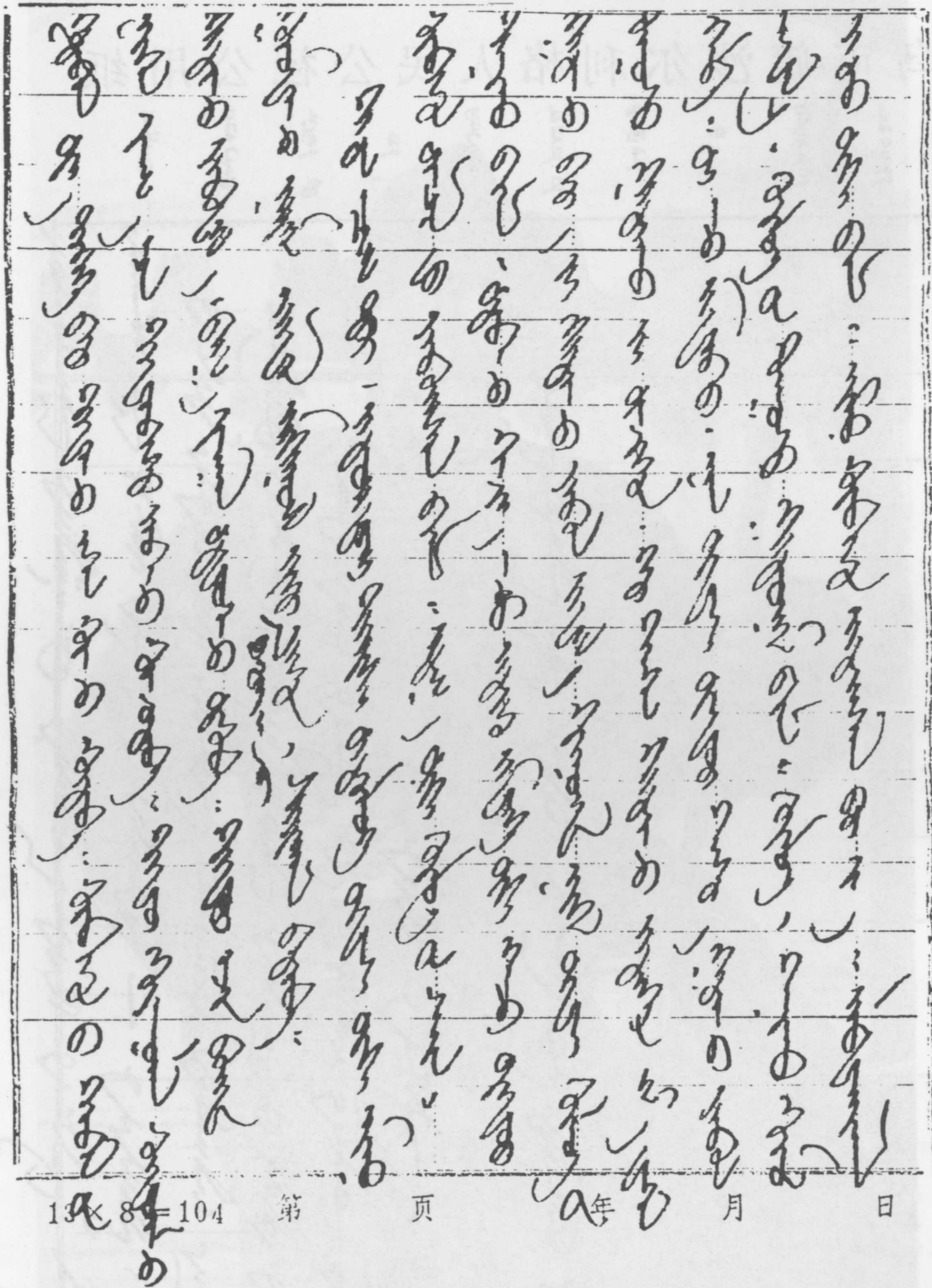


図11 QB本の第29頁

Tayiji-yin qadajalju bayiysan yar biçimel yum:

タイジが保存していた手写本である。

文中にあるオルドス右翼前旗とは、清朝時代から中華民国にかけてのウーシン旗の正式名称である。河南 (uridu bey-e) とは、シャルウスン・ゴルすなわち無定河以南

の地域を指す。中華人民共和国になってから、行政組織上河南郷に画定された。河南の南西にはイケ・シベルという平野が長城のふもとまで広がっている。かつてはオルドス随一の草原で、17世紀に書かれた『蒙古源流』の著者サガン・セチェン・ホン・タイジ（1604-?）の故郷として知られている。ジュルケン・チョクチュス・ホトクタイ・セチェン・ホン・タイジ（1540-1586）はその曾祖父にあたる。

ホトクタイ・セチェン・ホン・タイジの末裔であるビシューガルマ・ダー・タイジから他にどのような書籍や写本が共産党に没収されたかは、不明である。

転写・訳注凡例

以下、OO本、QB本とB写本を転写、訳注する際は次の原則をとる。

第一、OO本とQB本はオルドス地域より見づかり、オルドス・モンゴル人の手によって抄写がくりかえされてきたにちがいない。そのため、オルドス・モンゴル語口語表現が含まれている。この点については、文中の該当箇所を指摘する。

第二、三写本とも現代の正字法に一致しない点が多々ある。これらについてはそのオリジナルな特徴を損なわないようにするため、もとのままにしておいた。

第三、私は、今回公表する三種類の写本をそれぞれ異なる時期に入手した。その際、現地でそれぞれ以下の基準で初歩的な転写をおこない、整理した経緯がある。OO本は、表紙をのぞいて冒頭のある第一頁の表を1-aとし、うらを1-bとした。QB本には、オリジナルの右上端に数字番号がついているので、これを踏襲する。B写本は、初期の資料整理に用いられた通し番号を維持する。また後日、写真撮映のためにOO本の綴じ糸をはずしたところ、あらたにモンゴル語によるページ・ナンバーが見つかった。

第四、基本的に逐語訳を試みるが、文意がうまく通じない場合は（ ）を用いて補足する。「・」や「:」、 「::」は、オリジナルにあるモンゴル文の句読点で、日本文の句読点は訳注者による。

第五、現段階でOO本は、類例をみない独特な写本である。QB本は、ダムディンスレンの『モンゴル文学珠玉百篇』内のオルドスからの写本と似かよっており、訳注では両者を比較する。また、B写本を『モンゴル文学珠玉百篇』内にある、1916年にモンゴル国外務省から出版されたテキストと比較する。

4.2 OO 本 : Ejen boyda qoyar jayal-un üliġer bile

——聖主²⁴⁾の二頭の駿馬の物語——

1-a

- 1: Erten nigen čay-du ejen Činggis qayan-u adayun-dur anu er-e qoyar jayal
いにしえのあるとき主君チンギス・ハーンの馬群に雄の二頭のジャガル (色の)
- 2: Unay-a törübe gen-e tere qoyar unay-a-yi isüged isüged gegün-dür
仔ウマが生まれた²⁵⁾ という²⁶⁾。その二頭の仔ウマを九頭ずつの牝ウマに
- 3: Telejü kökügülün bayiju arayıqan ondarayulba gen-e. Ejen Boyda tere
哺乳させて²⁷⁾, やっと生き延びた²⁸⁾ という。聖主 (チンギス・ハーン) はその
- 4: Qoyar jayal-tayan emegel-iyen toquju. örgen-dür uyalaba gen-e. öcükten
二頭のジャガルに自分の鞍をつけ, 宮帳につないだ²⁹⁾ という。しばらく
- 5: Büküi atal-a tere qoyar jayal-yi unuju Altayıqan Köküiqan qoyar-tu
したらその二頭のジャガルに乗ってアルタイ・ハンとグクイ・ハイ³⁰⁾ 二つの山で
- 6: (Ang)talbiju arıyali uyalji neretü görügesün-i tökügerün yaruba arı-a
巻狩をもよおし, アルガリやウガールジ³¹⁾ という名の獣を捕まえ³²⁾ に出かけた。仕
方
- 7: (Ügei) barıgdun güicigdejü alayulba gen-e. taryumal dobuçuy unuysan
なくつかまったり, 追いつかれたりして殺されたという。丸々と太った (ウマ) に乗っ
た³³⁾

1-b

- 1: ...a-yin kümün nuıud nigen enü ese güiçebe gen-e. yamarmai-yin-u abaçin-i
(巻狩³⁴⁾) の人びとは一人も (二頭のジャガルに) 追いつけなかったという。(他の)
どんな狩人も
- 2:qoyar-yi çı ese güiçebe gen-e. ayta qoyar jayal-tu uyaraqı
(この³⁵⁾ 二頭 (のジャガル) に追いつけなかったという。去勢馬の二頭のジャガルに
悲しみ
- 3: Sedkel törüjü uyılalçıba uyılalçıba gen-e qarıju iregsen-ü qoyın-a
の念が生じ³⁶⁾, 泣きあった³⁷⁾ という。(巻狩から) 帰ってきたあと,
- 4: Bay-a Jayal anu Yeke Jayal aq-a-tayan kelebe. abayai minu çı bida
小さいジャガルは兄の大きいジャガルにいった。「お兄さん³⁸⁾, あなたと私
- 5: Qoyar yabuy-a geıü. asaraju unuyçi Erke Jegerden mori ajiyu
二人で行きましょう。いたわって乗るのは大事な褐色馬でしょう。
- 6: Alan bulan unuyçi çı bidaı qoyar bayın-a bışıü qayırlaju unuyçi Qara
殺されるほど³⁹⁾ 乗られるのは, あなたと私の二人ではないか。可愛がって乗るのは黒

7: Qulan bayin-a bayinam-a bišüü qatayuu seregün-dü unuyçi či bida qoyar

金色馬でしょう⁴⁰⁾。厳しいとき、寒いときに乗られるのはあなたと私の二人

2-a

1: Bayinam-a bišüü emegelelen unuyçi Erke Jegerde bayinam-a

ではないか。(ていねいに) 鞍をつけて⁴¹⁾ 乗るのは大事な褐色馬でしょう。

2: Eng-ün metü sanayçi či bida qoyar bayinam bišüü. qayirlan unuyçi Qara

何とも思わずに⁴²⁾ 乗られるのはあなたと私の二人ではないか。可愛がって⁴³⁾ 乗るのは黒

3: Quvalan bayinam bišüü. qaratan metü sanayçi či bida qoyar bišüü bayinam

金色馬でしょう。敵のように思われているのはあなたと私の二人ではないか⁴⁴⁾。

4: Asaran unuyçi ʁal Julan Boru mori bayinam bišüü alan bulan asançilayçi

いつくしんで乗るのは炎のような茸毛馬⁴⁵⁾ でしょう。殺されるほど(乗られる) つまらぬ者

5: Asançilayçi či bidan qoyar bayinam bišüü abai minu či bida qoyayulan

つまらぬ者⁴⁶⁾ (とされる) のはあなたと私の二人ではないか。お兄さん⁴⁷⁾ よ、あなたと私二人で

6: Yabuy-a gebe Altayıqan gegçi yajar bayinam bišüü. agi šabay ebesütei

行きましょう。アルタイ・ハンという地があります。白ヨモギやニガヨモギ⁴⁸⁾ の草がある

7: Genem bišüü. aru eber ügei usutai genem bišüü. aldayulun

といます。山陰にも山陽⁴⁹⁾ にも水があるといます。逃れて

2-b

1: Kürjü amaraju kebtay-e bida Köküiqan gegçi yajar bayinam bišüü köbten

行って休んで寝ましょう、私たち。グクイ・ハンという地があります。盆地

2: Köbten büri köke ebesütei genem bišüü ködege tal-a ügei kökernem

盆地ごとに⁵⁰⁾ 緑の草⁵¹⁾ があるといます。その(草)があたり一面に青々としている

3: Bišüü çögerem büri usutai genem güijü kürün kebtay-e. Qouni-yin ʁurban

といます。くぼ地ごとに水があるといます。走って行って寝ましょう。ホニン・グルバン・

4: Čabçiyur gegçi yajar bayinam bišüü quddug büri usutai genem.

ジャブチュールという地⁵²⁾ があるといます。井戸ごとに水があるといます。

5: Qoladaju kürjü kürbeju amaray-a bida abai minu qalayun edür bayinam

遠く離れて行って寝ころがって休みましょう、私たち。お兄さんよ、暑い日があるの

6: Bišüü qatatal-a çiletel-e uyanam bišüü qara sara toqum bišüü

ではないか。干あがって耐えられないほどつなぐではないか⁵³⁾。黒や黄色の鞍敷があ

るでしょう⁵⁴⁾。

7: Qayırqay çilayun-dur öngkürülñem bişüü küiten edür bayınam bişüü köke

(にもかかわらず) 砂利の上で転がせる⁵⁵⁾ ではないか。寒い日があるでしょう。(それでも) 青ざめた

3-a

1: Temür ümkülñem bişüü gürümel toqum toqunam bişüü kölesütei talbiju

(冷たい) 鉄 (の馬銜) をはめさせるではないか。絨毯⁵⁶⁾ の鞍敷をつけるでしょう。汗だらけのまま放して⁵⁷⁾

2: Küiten çasu ümkülñem bişüü yayakiy-a abai minu yabuy-a gebe boru jayal

冷たい雪を食べさせるではないか。どうしよう、お兄さん。行きましようよ」という。いとしいジャガル⁵⁸⁾ の

3: Degüü enü tere metü niyuju keleküi-dür Yeke Jayal aq-a anu Bay-a Jayal

弟があれこれとこっそりいうとき、兄の大きいジャガルが小さいジャガルの

4: Degüü-tegen kelebe ai inay boru jayal minu çi yayun tula ingkejü oyitunam

弟にいった。「ああ、愛する可憐なジャガルよ、お前はなぜこのように不満

5: Bile. er-e bayarlabaçu manglai ülü qayaranam ayta taryulaju sayari anu

なのだ。男は喜んで額が割れることはない。去勢馬は肥えても皮⁵⁹⁾ が

6: Ülü ijarnam ai inay boru jayal minu ay-a yayun tula ingkenem çi

ひび割れることはない。ああ、いとしいジャガルよ、何でこうなの、お前は。

7: Qadan-u ebesü qaydajıcı bolba qalairanam bolyaju bayiji idey-e butani ebesü

石の (あるところの) 草が乾いていれば⁶⁰⁾ 青々と⁶¹⁾ なってから食べよう。草むらの草に

3-b

1: Boytai çi bolba. bulyaram bayiju uuyala bida. ai inay boru jayal minu

ほこりがあっても、(ほこりを) 払いおとして食べよう、私たち。ああ、私のいとしいジャガルよ

2: Yayun genem. manai-yi üjigsen kümün geji kögeju eldekü bije dayin geçi

何ということをするのか。私たちをみた人は⁶²⁾ (他人のウマだといって) 追って (つかまえて) 酷使するのだ。戦いになったといって

3: Dayar eldekü bije ayiluysan geji angirlan mordaqu bije jerlig geju

みんな⁶³⁾ 酷使するのだ。命令だといって別れ別れに連れだされるのだ。野生 (のウマだといって)

4: Jebe-ber unayaqu bije ai inay boru jayal minu yayun genem. ejin geju

矢じりで倒されるだろう。ああ、私のいとしいジャガルよ、何ということをするのか。主君というと

5: Činggis Qayan-dur adali qayan oldaqu buyu eke geji Ermig Čayayčın gegün-dür

チンギス・ハーンと同じハーンは見つかるのか⁶⁴⁾。母親というエルメク・チャガークチンというウマ⁶⁵⁾と

6: Adali eji oldaqu berke eyin kü sanayul-a bayiçayay-a abai minu arban

同じ母親は見つけにくい。このように思えばやめよう。母親が十ヶ

7: Sar-a boltal-a gedesün-dür-iyen ürgügsen anggir šir-a uyuray-ıyan sayıqan

月間自分の胎内でやしない、濃厚な黄色い初乳をていねいに

4-a

1: Kökülügsen qotayur nirayun-ıyan çiletel-e ürgügsen qongyur šar-a uyuray-

吸わせ、くぼんだ背中⁶⁶⁾が疲れるまで背負い⁶⁷⁾、愛情たっぷりの⁶⁸⁾黄色い初乳

2: İyan sayıqan kökülügsen Ermig Čayayçin eji yuyan yayakiji martay-a genem

で大切に吸わせたエルメク・チャガークチン母をどうして忘れることができようか。

3: Ösgen törügülügsen Ulayan Buural ayai yuyan yayakiji martay-a genem

育て生ませたウラーン・ブーラル父⁶⁹⁾をどうやって忘れようというのだ。

4: Edüge qanılaysan olan nököd-ıyen yayakiji martay-a genem. ai inay boru jayal

これまで親交してきた多くの友人たちをどうやって忘れよう。ああ、いとしいジャガ
ル

5: Minu yayun geji ingkenem qorital-a ese toytuju öndür quva dobung-du

よ、どうしてこのように（不満なのだ。）（大きいジャガルが）止めても聞かず、高い
丘陵に

6: Ğarju qaran qaran yabuju üde bolqu-du yurban uliyasun modun-u següder-

登り、（小さいジャガルの後ろ姿を）みなが行くうちに、昼になるころ三本のポプラ
の陰

7: Dür següderlejü bayital-a dörben jüg-eçe dörben önggetü Altan Ğuryuldai

で涼しんでいると、四方（八方）から四色で金色の雉（という）

4-b

1: Šıbayun bosun jirgebe uridu yajar-un usun-ni unay-a day-a bütökü metü sayıqan bayınam

鳥がとんできてさえずりだした。「南の土地⁷⁰⁾の水は一才の仔ウマや二才の仔ウマ（の
投影が）映るほど清らかだ⁷¹⁾。

2: Qoyidu yajar-un usun-ni qoy kiged šalçiy-dur adali bayınam. basa uridu

北の土地の水はゴミや泥水と同じだよ」（という）。また「南の

3: Ğajar-un usun-ni nayur kiged dalai-tur adali bayınam. qoyidu yajar-un

土地の水は湖や海と同じだよ。北の土地の

4: Usun-ni qoyiy šabar-aça yaruysan šalçiy-tur adali bayınam

水は中洲の泥から出た泥水と同じだよ。

5: Uridu yajar-un ebesün-ni keçignen jilen-dür adali. alda kiged delim

南の土地の草はケチゲネ草の蔓と同じく、五尺も三尺も（長く）⁷²⁾

6: Sayıqan bui-j-a qoyidu yajar-un ebesün-ni keçignen ündüsün kiged yamay-a-u segül-dür
立派だよ。北の土地の草はケチゲネの根やヤギの尾⁷³⁾と

7: Adali bayinam basa uridu yajar-un ayta-yin yuy-a bolbasu teberen-dür
同じく（短い）よ」また「南の土地の去勢馬の太腿は抱え

5-a

1: Baytaşi ügei metü sayıqan bayinam. qoyidu yajar-un ayta-yin yuy-a gigüürjigenen
きれないほど（太く）立派だ。北の土地の去勢馬の太腿はバツタや⁷⁴⁾

2: Čirçay-a-u yuy-a-dur adali bayinam. gejü jirgebe. qan ejin-ü qoyar jayal-ni
コオロギの脚と同じく（細い）よ」とさえずった。ハーン主君の二頭のジャガルが

3: ʒajarlaqu yosun tegünçe bolba. basa šibayun bosun jirgebei.
牧地をかえた次第はそこからはじまった。さらにまた鳥がとびたちさえずった。

4: Boyda Ejn-ü qoyar jayal yajarlaqu yabuba. Altan ʒurɣuldai uliyasun modun-u
聖主の二頭のジャガルが牧地をかえていった。金色の雉がポプラの木の

5: Möçer deger-e ergin ergin jirgebe. ayta qoyar jayal yajarlaqu yosun tegün-eçe
梢のうえでとびかっはさえずった。去勢馬の二頭のジャガルが牧地をかえた経緯は
それから

6: Bolba. Köküıqan-u aru taki Köke Šibayun kürjü iren jirgebe. körüki qoyar jayal
はじまった。グクイ・ハン山の北にいる鳩がとんできてさえずった。いとしい⁷⁵⁾二頭
のジャガルが

7: ʒajarlaqu yosun tegünçe bolba tende šibayun dörben jüg-eçe jirgeküi-dür. tere qoyar
牧地をかえた経緯は、そこからはじまる。それらの鳥たちが四方からさえずるとき、
二頭の

5-b

1: Jayal mori čikin-iyen serteyijü segül-iyen sayadaɣlaju qabar-ıyan qoukıracıu činglen
bayıyad.

ジャガル馬は耳をそばだて、尾をさかだて、鼻を鳴らして聞いていた⁷⁶⁾。

2: Qayıratu qoyar jayal mori qarın-ni yajarlan yabuba. tere qoyar jayal türğines türğın
可愛い二頭のジャガル馬がなんと牧地をかえていった。かれら二頭のジャガルは速く
速く⁷⁷⁾

3: Yabuqui-dur tüngerçey-ün činegen čılayun-i ködelgen arɣun arɣun yabuqui-dur
走るときは、陰のう⁷⁸⁾ くらいの小石を蹴とばし、ゆっくりゆっくり⁷⁹⁾ 行くときは、

4: Ayay-a-yin činegen čılayun-i ködelgen yabuba tedüi Qon-a-yin ʒurban Čibçıyur-yi
お椀ほどの石を動かして行った。ホナン・グルバン・ジャプチュールを

5: Jorin yabuju kürjü bayıtal. aq-a anu Yeke Jayal Bay-a Jayal degüü yuyan toyusun-i
目指して行くうちに、兄の大きいジャガルは弟の小さいジャガルの（走ってたてた）
ほこりを

- 6: Qaraju bayiyad tesün yadan qoyin-a-aça kögen yabuju Köküiqan-u öber-tür güiçijü
みていて我慢できなくなり、あとを追っていった。グクイ・ハン山の山陽で追いついた
- 7: Ireküi degen qara kölüsün-iyen yaryaju qabar-iyen sartayiju arayıqan geju amin-iyen
とき、汗びっしょりになり⁸⁰⁾、鼻をひろげ、やっとのことで命を

6-a

- 1: Temeçijü güiçin irebe. tere söni Qayan Ejın noyirsayad jigüdelebe erten bosju
かけて追いついてきた。その夜、ハーン主君はお休みになり、夢をみた。朝起きて
- 2: Boyul Miçe degen jarliy bolba. erketü tngri-eçe işi-tei törügsen erke qoyar
侍臣のミチ⁸¹⁾に仰せられた。「偉大な天から正統性⁸²⁾をもって生まれた可愛い二頭の
- 3: Jayal minu neyilen yajarlaba geji jigüdelebe. bi qan tngri-eçe jiyayatai törügsen
ジャガルがつれだって牧地をかえた、という夢をみた。私は、上天よりおいつくしみ
により生まれた、
- 4: Qayıratu qoyar jayal minu qari bolun yajarlaba geji jigüdelebe bi. ai Boyul Miçe
いとしい二頭のジャガルが異郷へ出奔した、という夢をみた、私。ああ侍臣ミチ
- 5: Minu adayun-dur oruju üji ünén buyu qudal buyu ünén bügesü tabun öngge
よ、馬群に入ってみよ。本当かどうか（確かめよ）。（もし）本当だったら私の五色
- 6: Dörben qari-yin ulus-dur minu manayar tungqay ögju çuylayulju ir-e gemegsen-dür
四夷の国⁸³⁾に、明日命令を下して集めてこい」と命じた。
- 7: Tedüi Boyul Miçe- ber adayun-dur oruju üjibesü. qoyar jayal inu ügei
そこで侍臣ミチが馬群に入ってみると、二頭のジャガルはいなくなって

6-b

- 1: Ajiyuu Ermige Čayayçin gegüü anu eyin teyin qaraju qoyar nidün-eçe nilbusun
いた。牝ウマのエルメク・チャガークチンがあちらこちらをみながら両眼から涙を
- 2: Ğaryaju qoyar köken-eçe sün çoburyulju bayimui. tedüi Boyul Miçen erten manayar
流し、両乳房から乳をたれ流している。そこで侍臣ミチが朝早く⁸⁴⁾
- 3: Yabuju bartaji kürjü tabun öngge dörben qari-yin ulus-yi çuylayulju abçibai
行って威勢よく着いて五色四夷の国を招集して
- 4: Iregsen-ü qoyin-a. Qayan Ejın Ğal Jula Boru morin-dayan altan emegel toqum-iyen
きた。（その）あとハーン主君は炎のような葦毛馬に黄金の鞍と鞍敷を
- 5: Toquju. altan sayaday-iyen büselejü qalyabçitu çayan nomun-iyen tökügerün abju al
naçin
敷いて、黄金の矢筒を帯び、盾⁸⁵⁾と白い弓を用意してもち、赤い隼（や）
- 6: Qarçayai-ban bariyulju naiman şara noqai-ban kötülgeju. ayta qoyar jayal-iyen ereküi-
dür olan
鷹を腕にとめて、八頭の黄色い犬をつれて、二頭の去勢馬のジャガルをさがしに、多

くの

7: Yeke ulus-tayan jarliy bolba tere qoyar jayal-yi minu ken kümün olju

大国に命令が下された。「わしの二頭のジャガルを誰が見つけて

7-a

1: Güiçibesü büü qarbu dam dam-iyar tusju uytuju bari tere bariysan

追いついても射ってはならない。何重にもかこんで正面から捕らえよ。その捕らえた

2: Kümün-dü dörben qosiyun-u mal-ača tegegši qubiyaju öggüy-e gebe Köküiqan-i

人には四種類の家畜⁸⁶⁾ からそれぞれ同じ数を分けあたえよう」と仰せられた。(また)
「グクイ・ハン山を

3: Öber-iyer Altaiqan-i aru-bar abju iry-e gebe töb-ün kümün türgen yabu

南からアルタイ・ハン山を北から通ってこい⁸⁶⁾」といい、「中央の勢子は急いで行け、

4: Odui-yin kümün urid yabu. takim-a kümün büü tasuru büü yoçura gemen jarliy

先鋒の勢子は先に進め。両翼の勢子はすきまをあけるな！遅れるな！」と命令を

5: Öggüged Köküiqan öber-iyer Altaiqan-u aru-bar abulçin ireküi-dür

下した。(ハーンの軍勢が) グクイ・ハン山の南, アルタイ・ハンの北を席捲してくる
とき,

6: Yeke Jayal aq-a anu Bay-a Jayal degüü-degen kelebe. aba-yin kümün irebe geju

兄の大きいジャガルが弟の小さいジャガルにいった。「巻狩の人びとが来た」と

7: Dakin dakin keleküi-dür Bay-a Jayal kelebe. ai abai minu çi em-e kümün metü

何回もいうと、小さいジャガルが答えた。「ああ、お兄さん、あなたが女の人のような

7-b

1: Aqurqan sanayatai çinu yayubai çi bida qoyar-yi güiçikü bayituyai

あさはかな考え方⁸⁸⁾ をもっているとはどういうことですか。あなたと私に追いつくど
ころか、

2: Manai-yi barayan-i qaraquru mori maši çuqay ƒal Julan Boru mori yakinam çingkebeci

われわれの遠影すら眺められるウマもほんのわずかだ。炎のような茸毛馬に何ができ
るというのでしょうか。それでも

3: Yayubai yai ügei bolbasu abai minu töb-ün kümün-dür toyusun-iyar üjigüley-e

何ともないですよ。心配はいりません。お兄さん、中央の勢子にはほこりをみせてやり
ましょう。

4: Odui-yin kümün-dür barayan-iyar qarayday-a gebe Köküiqan-u öber-yi daban

先鋒の勢子には遠影をみせてやりましょう」といった。また、「グクイ・ハン山の南を
のぼって

5: ƒarqu-du ölü-e qaljin buyuu-yi ösgejin yaruy-a Altaiqan-i aru-bar

とおるときに頭の白い、灰色⁸⁹⁾ の鹿を蹴とばして行きましょう。アルタイ・ハン山の
北を

6: Buyuqui-du aryalı uyaljin-yi unayaju bayuy-a gebe tere kelegesen üge-ber

下りるときアルガリとウガルジを倒して行きましょう」といった。そういったとおりに

7: Ösgücin unayaju yarun içibe Qan Ejin Köküiqan-u öndür deger yarju

蹴とばし倒して出ていった。ハーン主君はグクイ・ハン山の頂上に登り

8-a

1: Bary-a-yi tasurtal-a qaraju ese güiçigsen-dür Boldui-yin Boru Tal-a

(二頭のジャガルの)姿が消えるまで眺めていた。追いつけなかったので、ボルドゥイ・イン・ボロタラ⁹⁰⁾ (という野)

2: Deger-e bayuju artu toqum-ıyan delgeju büse-ben küjigün-degen ülgüju

に駐営し、紋様(をほどこした)鞍敷を敷き、帯を(はずして)頸にかけて

3: Tngri eçige yajar eke-degen mörgübe qara bay-a-yin sayin-ıyar qayan

父なる天と母なる地に拜んだ⁹¹⁾。「幼少から秀でてハーンに

4: Ese bolulan bi. qan tngri-yin qayiran-ıyar qayan bolulan bi erketü tngri eçe

なったわけではないのだ、私は。上天のおいつくしみによりハーンになったのだ、私は。上天から

5: Jayayatai qayan bolulan bi emegel-ıyen yayakin egürju qariy-a gebe olan yeke

運命によってハーンになったのだ、私は⁹²⁾。鞍をどうやって背負って帰ればよいのだろう」といった。(また)「多くの人びと(からなる)大規模な

6: Aba bolunam biji yayun-tayan emegeley-e uçirtai yeke urulduy-a bolunam

巻狩のときに何に鞍をつけよう。わけあって大競馬になったおりに

7: Yayun-tayan jasan qaysayay-a küi yeke aba bolunam biji yayun- Tayan

どのウマの鞍をととのえ⁹³⁾、どのウマを訓練しよう⁹⁴⁾。五百戸⁹⁵⁾ からなる巻狩のときにどのウマに

8-b

1: Emegeleyebeı kündü yeke çereg bolunam yayun-tayan quyaylan bi qayiran

鞍をつけよう。重大な軍事行動のおりに何に鎧をつけよう、私は。(なんと)惜しい私の

2: Qoyar jayal meni geji qayilaba tedüi Qayan ger-tegen ögedülün qariba

二頭のジャガル」と悔やんだ。そこでハーンは天幕へもどっていった。

3: Qoyar jayal inu Qoni-yin Ğurban Ćibçiyur-dur kürju nutuylaba

二頭のジャガルはホニン・グルバン・ジャブチュールに着いて(そこを)故郷とした。

4: Ğurban jil bolqu-du Bay-a Jayal sayari meten taryulabai Yeke

三年たって、小さいジャガルは皮がひびわれるまで肥えたが、大きい

5: Jayal inu qataju jüsügen mori metü ese taryulaba çinkeji

ジャガルはやつれて細くさばかれた⁹⁶⁾馬のように(なって)肥えなかった。そうして

6: Bayital-a Bay-a Jayal degüü inü Yeke Jayal aq-a-tayan kelebe. ai abai

いと、弟の小さいジャガルは兄の大きいジャガルにいった。「ああ、お兄さん

7: Minu çi ebülün çay bolulan qoyar yaçar çini ayay-a-yin tedüi mösü

よ、あなたは冬になると両の頬にお椀ほどの氷が

9-a

1: Körüjü yabunam çi jun-u çay bolul-a qoyar yaçar çinu qalçayaraysan

できて暮らす⁹⁷⁾。あなたは（また）夏になると両の頬がばさばさに

2: Metü yabuqu çinu yayun bui ebesü bolbasu erügüü-ber. usu bolbasu

なるほど暮らすのはどうしてなのですか。草はあごで（噛み）、水は

3: Uruyul-bar adaliqan iden uugu atal-a ai abai çi arsutai

唇で（飲み）、同じように飲んで食べていたのに、ああ、お兄さんが皮も

4: Sirbüsütei ingkeji qataysan çinu yayun bi açitu abai minu çimagi

筋もこんなに痩せてしまったのはなぜなのですか。恩人のお兄さんよ、あなたを⁹⁸⁾

5: Ükügülümegçe arasu-yi çinu emüsümüi miq-a-yi çinu idemü bi

死なせたらその皮を着て、その肉を食おう、私⁹⁹⁾は。

6: Sanay-a-ban nada kelesügei gemeküi-dür Yeke Jayal inu kelebe ai inay

考えていることを私に話して下さい」といった。その際、大きいジャガルが語った。
ああ、いとしい

7: Boru jayal minu çi omuy-ıyan darusuyai ayusigen-ıyan qatayši

私の茸毛のジャガルよ、お前は血気をおさえなさい。怒りを和らげなさい¹⁰⁰⁾。

9-b

1: Inay boru jayal minu ösgeñ törgülügsen Ulayan Burul ayai yuyan

私のいとしい茸毛のジャガルよ、育てて生ませたウラーン・ブーラル¹⁰¹⁾ 父を

2: Sanaqul-a ergün törügülügsen Ermig Čayayçin eji yuyan geji sanaqulan

思えば、はぐくみ生ませたエルメク・チャガークチンの母を思えば、

3: Abai çinu bi ebesün-dür bolqul-a erügüü-ıyen kürgejü yadaba. usun-duni

兄の私は草にもあごをつけることができない。水に

4: Bolqulan uruyul-ıyan kurgejü yadaba bišiü ai inay boru jayal minu.

も唇をつけることができないのだ。ああ、いとしい茸毛のジャガルよ、

5: Olan yeke aba bolunam bile. ulus-un uridan jasaju qaysayaday bile

大勢からなる大規模な巻狩になるのではないか、他の仲間より先に馬具をつけてもら
い、訓練したのではないか。

6: Ulayan emegel toqum-ıyan toquju ulus Mongyol-un emün-e magşigüljü

赤い鞍と鞍敷をつけ、モンゴル国¹⁰²⁾ の先頭に威風堂々と立って

7: Ködeljü irenem bile. Köküiqan-i öber-ıyer bayun ireküi-dür. köke qaljin

出発したのではないか。グクイ・ハン山の南を下りてくるとき、灰青色で額に白斑の

ある

10-a

- 1: Uyalji-yi bayulyan ireged uytulun qarbutnam bile. köbjin yeke ulus
雄の野生ヒツジを追いおろしてきて、向かって射ったのではないか。大勢の人びとが
- 2: Mani-yi kürji-yin činegen čayan šidün men-i tataju yayıqaday bile. ebesün-ü
私たちの鍬ほどの白い歯を引きあけて（みて）驚嘆したものだ¹⁰³。草の
- 3: Sor idebeči usun-u tungyalay-yi uyuubači yayun tusa geyijü keleged uyilaqui-
（柔らかい）葉先¹⁰⁴を食べても、清水を飲んでも何の役にたつのであろう」といって
泣いた。
- 4: Dur Baya Jayal kelebe ayai minu či er-e kümün metü irčas geji ineyenji
そこで、小さいジャガルがいった。「お兄さんよ、あなたは男らしく（白い歯を見せて）
豪快に笑って¹⁰⁵」
- 5: Yabunam bije. em-e kümün metü irbis irbis geji uyilaqu činu yayu bi. geji
暮らすのだ。女みたいにめそめそと泣いて何ということですか」と
- 6: Kelebe Baya Jayal jöb qanduju ineyenji. buruyu qanduju uyilaju
いった。小さいジャガルは顔で笑い、心では泣き¹⁰⁶、
- 7: ebesü usun-i nigen qoyar tatalaju bayıyad. kelebe. ai abai minu či sayın
草や水を一口二口ちょっと食べてから（こう）いった。「ああ、お兄さんよ、あなたは
よく

10-b

- 1: Ebesün-i iden. usun-i sayın ayuju. sanay-a-ban amuraju. sayari meten taryulaysan-u
草を食べ、水をたくさん飲んで、心をおちつかせて、皮がひびわれるほど肥って
- 2: Qoyın-a yabuy-a gebe. Yeke Jayal inu jöb geju keleged ebesü usun-i iden
から行きましょう」という。大きいジャガルも「そのとおりだ」といって草や水を食
べて
- 3: Ayuju urbaju körbeju bey-e-ben amuraju uridaki metü taryulaba gen-e tedüi
飲んで、くりかえし寝ころがって体を休めて以前と同じように肥ったという。そこで
- 4: Bay-a Jayal inu kelebei. ai abai minu edüge yabuy-a gebe čingkejü
小さいジャガルがいった。「ああ、お兄さん今から出かけよう」という。そのように
- 5: Keleküi-dür. Yeke Jayal anu ergen ergen qatariba Bay-a Jayal inu süg süg
いったところ、大きいジャガルは何回も何回も小走りした¹⁰⁷。小さいジャガルはゆっ
くりゆっくり
- 6: Geju yabuba. tere jayur-a Baya Jayal kelebe ai abai minu yurban sarayın
と歩きだした。その途中小さいジャガルはいった。「ああ、お兄さん、三ヶ月の
- 7: Fajar bolbaji yurban qonuy-du kürüy-e bida. Boljimar sibayuu jirgeküi-yin
行程を三日三晩で着こう¹⁰⁸、われわれ。雀という鳥がさえずる

11-a

- 1: Urda. Boyda Ejin ögeden bolqu-yin urda kürüy-e bida qayıquy-a şıbayun jirgeküi-yin
前に¹⁰⁹⁾、聖主がお目覚めになる前に着こう、われわれ。あらゆる¹¹⁰⁾鳥たちがさえず
る
- 2: Urdan. Qan Ejin ögede bolqu-yin urdan kürüy-e: Altan Fıryuldai jirgeküi-yin urdan
前に、ハーン主君がお目覚めになる前に着こう。金色の雉がさえずる前に、
- 3: Ačitu ejin-iyen ögeden bolqu-yin urdan kürüy-e. ulayan naran yarqu-yin urdan
恩ある主君がお目覚めになる前に着こう。赤い太陽が昇る前に、
- 4: Unay-a day-a barilaqui-yin urda kürüy-e: öngen törügülügsen Ulayan Buurul ayai-
一才馬と二才馬を捕える前¹¹¹⁾に着こう。育て生ませたウラーン・ブーラルの父
- 5: Tayan ergün törügülügsen Ermig Čayayčın eji-degen olan qanilaysan nökur-degen
に、はぐくみ生んだエルメク・チャガークチンの母に、多くの親交していた友人に、
- 6: Basači üri şaralaqu-yin urdan kürüy-e geji keleged jirgečın degdejü qatarıyad
また草の実が黄色くなる¹¹²⁾前に着こう」といって、二頭とも並んではしゃぎながら
走った。
- 7: Furba qonuy-tu kürji irebe qoyar Jayal-yi kürjü iregsen söni
三日三晩かかって帰りついた。二頭のジャガルが帰ってきた夜、

11-b

- 1: Ejin Boyda qatun you-a la luy-a noyirsuysan qoyin-a: qoyar Jayal-yi irebe
聖主は妃のゴワ¹¹³⁾とともに、お休みになったあと、二頭のジャガルが帰ってきた、
- 2: Geji jigüdelebe: Qayan Ejin örlüğe erten manayar sereged. Boyul Mičın-dür
という夢をみた。ハーン主君は（翌）朝早く起きて侍臣のミチに
- 3: Jarliy boluysan. qan tngri-eče jiyayatai törügsen qoyar Jayal minu irebe
仰せられた。「上天より運命によって生まれた私の二頭のジャガルが帰ってきて
- 4: Geji qajiyarlaju bayınam gemen jigüdenlebe. erketü tngri-eče işitai törügsen
馬銜をつけているという夢をみた。偉大な天から正統をもって生まれた私の
- 5: Qoyar Jayal minu ergejü iregsen-i emegeleljü bayınam geji jigüdelebe ünen buyu
二頭のジャガルがもどってきたところ、鞍をつけている¹¹⁴⁾という夢をみた。まこと
か
- 6: Qudal buyu. erten manayar adayun-dur minu oruju üje gemen jarliy bolba
うそか、早くわしの馬群に入って確かめよ」との命令が出された。
- 7: Qan Ejin-ü jarliy-iyar Boyul Mičın adayun-dur oruju üjebesü Ermig
ハーン主君の命令にしたがって侍臣ミチは馬群に入ってみると、エルメク・

12-a

- 1: Čayayčın gegüü eke inü eyin teyin qaran qoyar Jayal yuyan iregsen-i üjijü
チャガークチン母があちらこちらをみまわし、二頭のジャガルが帰ってきたのをみて、

- 2: Qoyar köken-eçe sün çoburayulju qoyar nidün-eçe nilbusun-i asaqarayulju bayiba
両の乳房から乳を出し、両の眼から涙を（たくさん）流していた¹¹⁵⁾。
- 3: Qoyar Jayal inu Ermige Čayayčın gegün-ü enden tenden-i qarju sögürün (seigürün)
bayiba.
二頭のジャガルはエルメク・チャガークチン母のあちらこちらをみてこすったりして
甘えていた¹¹⁶⁾。
- 4: Boyul Mičin barin yadaju Ulayan Buyurul ečige Ermige Čayayčın eke ten-i eldejü
侍臣ミチは（二頭のジャガルを）捕まえられず、ウラーン・ブーラル父とエルメク・
チャガークチン母らを一緒に追って
- 5: Ireged. Qan Ejin-dür qoyar Jayal činü irebe geju morin-u deger-e barin
きた。ハーン主君に「二頭のジャガルが来たよ」と（乗っていた）ウマのうえか
ら¹¹⁷⁾ 意気揚々と
- 6: Bardamlaysayar ireküi-dür Qan Ejin sonusuyad nömügen debel-iyen yabun yabun
ほこらかに帰ってきたとき、ハーン主君は（それを）聞いて肩にかけていた長衣を歩
きながら
- 7: Qančulayad. qoyar Jayal-un emün-e-eçe uytuju yaruyad a-a sayin sayin
袖に手を通し、二頭のジャガルの前に迎えでた¹¹⁸⁾。「ああ、よかった、よかった。

12-b

- 1: Qoyar Jayal minu mendü sayin irebeü geji jarliy bolba. čingkeküdü. Yeke Jayal anu
kelebe
わしの二頭のジャガルは元気で帰ってきたか」と仰せられた。そう尋ねられると、大
きいジャガルがいった。
- 2: Qon-a-yin Furban Čibčiyur-du joriysan qoyar Jayal čı yayuu bile. yučin
ホナン・グルバン・ジャブチュールに行ってきた二頭のジャガルは何ともありません
よ¹¹⁹⁾。三十
- 3: Tümen ulus-ıyan ekelen sayuysan Qan Ejin minu mendü sayin bui- j-a Köküiqañ-du
万の国を統率するハーン主君こそご機嫌いかがでしょうか。グクイ・ハン山に
- 4: Joriysan qoyar Jayal yayuu bile. küi yeke ulus tümen-ıyan ekelen sayuysan Qan Ejin
行ってきた二頭のジャガルは何ともありませんよ。偉大な国々にを統治するハーン主
君
- 5: Minu mendü sayin bui j-a Altayıqañ-du joriysan qoyar Jayal-du yayuu bilan. arban
こそご機嫌よくお過ごしでしょうか。アルタイ・ハン山に行ってきた二頭のジャガル
は何ともありませんよ。十
- 6: Tümen ulus-ıyan ekelen sayuysan Qan Ejin minu mendü sayin bui-j-a gebe tedüi
mendü-yi
万の国を支配するハーン主君こそご機嫌よくお過ごしでしょうか」といった。このよ

うにご機嫌を

- 7: *Asayuy-san-dur Qan Ejin bayasaju. tan qoyar-yi minu kümün unubau geji asayubasu*
伺ったため、ハーン主君は喜んだ。「わしのお前ら二人を誰かが乗ったか¹²⁰⁾」とたずねると

13-a

- 1: *Bay-a Jayal kelebe Qon-a-yin Ğurban Čibčiyur qola bijiy-e yutul-tu*
小さいジャガルがいった。「ホナン・グルバン・ジャブチュールは遠いです。長靴をはいた
- 2: *Kümün man-i yayakin barin unuqu bile. Köküiqan gegči öndür bijiy-e. köl-tü*
人間¹²¹⁾が私たちをどうやって捕まえて乗りましょう。グクイ・ハン山は高いです。足の速い
- 3: *Kümün man-i yayakiju barin unuqu bile. Altayiqan gegči ayula bijiy-e. alatu*
人間¹²²⁾が私たちをどうやって捕まえて乗りましょう。アルタイ・ハンとは山です。脚力の強い
- 4: *Kümün man-i yayakiju barin unuqu bile. ačitu ejin činu arban tümen*
人間¹²³⁾が私たちをどうやって捕まえて乗りましょう。恩ある主君でさえ¹²⁴⁾十万人の
- 5: *Čerig aba-bar ese bariysan Jayal-ud-yi alatu kümün yayakiju unuqu bile*
軍隊の巻狩で捕まえられなかったジャガルたちを脚力のある人間¹²⁵⁾がどうやって乗りましょう。
- 6: *Olan aba-bar barin ese boluyad. oyurčuy kümün man-i yayakin barin unumui*
多くの勢子に捕まえられなかった(ジャガルを), 盗賊の連中¹²⁶⁾が私たちをどうやって捕まえて乗りましょう。
- 7: *Ebesü bolbasu erüğüü-ber usu bolbasu uruyul-bar adaliqan iden Atal-a ken-ber*
草を顎で, 水を唇で同じように食べて(飲んで)いました。誰が

13-b

- 1: *Taryulaysan ken ken ese taryulaysan-i ken meden-e geji keleged yodduli qarbum*
肥えて, 誰それが肥えなかったかを, 誰が知っているでしょう」といってかぶら矢¹²⁷⁾を射った(ほどの)
- 2: *Ğajar-a içijü segürün bayibi. čigeji bayiqu-du Qan Ejin qoyar Jayal-i minu*
距離に行き誇らかに立っていた。そうしているとき, ハーン主君は「わしの二頭のジャガルを
- 3: *Bariyad. emegel-yi minu toqu gebe. tedüi Yeke Jayal kelebe. bida qoyar-yi bariqu-du*
捕まえて, わしの鞍をつけよ」と仰せられた。そこで大きいジャガルはいった。「われわれ二人を捕まえるのは
- 4: *Yayuu bile geju keleged joysuju bayibai. qoyar Jayal basa kelebe. Qan Ejin man-i*
何のためでしょう」といって立っていた。二頭のジャガルはまたいった。「ハーン主君

が(もし)私ども(のこと)を

- 5: Sanaqul-a yurban jil quralayad yurban sar-a qaqsay-a gebe tedüi Qayan Ejin boyda
思っているならば、三年間休ませて三ヶ月節食させて下さい」といった。それから聖
なるハーン主君は
- 6: Yeke kenggergeben deledcü. yeke tümen ulus-ıyan quriyaba. bay-a kenggergeben
大きな太鼓をたたいて、大きい万戸の属民たち¹²⁸⁾を招集した。小さな太鼓を
- 7: Deledcü bay-a tümen ulus-ıyan quriyaba. qola yajar odtuysan
たたいて、小さい万戸の属民たちを集めた。「遠いところへ行った

14-a

- 1: Qoyar Jayal minu irebe. qotala isün küsel minu yeketen qanuba. yekes noyan-
わしの二頭のジャガルがもどってきた。わしの九つの望みがすべてかなった」(といっ
て)高官や貴族たち
- 2: Tayan yurban edür yeke qorim talbiba. čigeküdü čingkel qorim-ud belge-dü
に(と)三日間大きな祝宴を開いた。その際、喜ばしい祝宴の吉祥に
- 3: Tokildayulun Yeke Jayal-i seterleju ariyulaba. nayur dalai metü yeke qorim
あわせて大きいジャガルを神に奉獻し、浄めた¹²⁹⁾。湖や海のような大規模な宴を
- 4: Keyibe tedüi Boyda Ejin qoyar Jayal-ıyan qayirlaju yurban jil qurlayulju
もよおした。それから聖主は二頭のジャガルをいつくしみ、三年間休ませる(ため)
- 5: Talbiba. dakin barin abču yurban sar-a qaqsayayad. namurun terigün sar-a-du
(草原に)放った。ふたたび捕まえて三ヶ月間節食(訓練)させてから、秋の最初の
月¹³⁰⁾に
- 6: Yeke aba-tu mordaba. Altayıqan Köküıqan qoyar-du ayan aba talbiju
大規模な巻狩に出かけた。アルタイ・ハン山とグクイ・ハン山の両地に広く巻狩をも
よおし、
- 7: Aryali uyalji nertü görügesün-i tökügerün abun yaraba aru öber ügei
アルガリとウガールジという名の野獣を倒して通った。北と南(の別)なく

14-b

- 1: Aryali uyalji-yi unayaju tal-a ködege ügei tegši güiçijü alaba. yamaramai-yin
アルガリとウガールジを倒し、草原のいたるところ¹³¹⁾ですべてに追いついて殺した。
無数の
- 2: Abačın-dur yayıqamşıy bolba. ačitu Qan Ejin-i qoyar Jayal-un ner-e aldar
狩人たちに驚嘆された¹³²⁾。恩あるハーン主君の二頭のジャガルの名声は
- 3: Dayurisba.
広まった。

* * * * *

- 3: ……Bay-a Jayal-i odtuju yajarlaba geji Ejin bayan ayurlaysan-dur

……小さいジャガルが逃げて牧地をかえた、といて主君がやや怒った。

4: Tere čaytur urda Ejin Boyda-yin nigen keseg oγurčuy ulus-i oruyulju

そのとき、以前聖主はひとつの混沌とした国を征服

5: Abqui-dur külüg šinjigči Aruyti Tayiši-yin köbegün inü Altai Bayan-dur

統合した。その際、駿馬の鑑定士アルクタイ・タイシ¹³³⁾の息子をアルタイ・バヤン¹³⁴⁾に

6: Kürügesen ajiyuu tere köbegün Altai Bayan-i mingyan boru qonin-i

あずけてあった¹³⁵⁾。その少年はアルタイ・バヤンの一千頭の茶褐色のヒツジを

7: Adayulaju yabutal-a nigen üdeši Altai Bayan mal-iyān uytujn yabun

放牧していた。ある夕方、アルタイ・バヤンが自分の家畜をみよう¹³⁶⁾と出てきた

15-a

1: Atal-a qoni adayulaysan tere köbegün nigen qubaqai morin-u toluyai-yi tebirejü

ところ、ヒツジの番をしていたその少年がひとつの朽ちたウマの頭蓋骨を抱えて

2: Čimai-yi ken er-e külüg-yin toluyai genem. namai-yi ken Aruytai Tayiši-yin köbegün

「お前を誰が駿馬の頭だと分かるだろう。私を誰がアルクタイ・タイシの息子だ

3: Genem geju uyilaqui-dur Altai Bayan tegün-i üjiged ireji či ene deger-e

と分かるだろう」といいながら泣いていた。そこへアルタイ・バヤンが少年をみてやってきて「お前はどの（丘の）うえで¹³⁷⁾

4: Yayun keyijü bayinam qoni čini qamiy-a bai geju yančaba. tere köbegün kelebe

何をしているのだ。ヒツジはどこだ」とどなった。その少年はいった。



写真3 聖地オボに奉納された馬頭（モンゴル国ダリガンガ）

- 5: Ene morin qubaqai toluyai er-e julan külüg-yin toluyai bayinam gebe urda ečige
「このウマの朽ちた頭蓋骨（写真3），はオスの炎（のような）駿馬の頭です」といった。
た。（また）「以前私の父親
- 6: Minu külüg šinjigči bile. tegünber bi egüni üjiged uyilaju sayadaba bi
は駿馬の鑑定士でした。そのため私はこれを見て泣いていて遅れた，私は。
- 7: Qoni minu bayıqu bije geji kelegesen-dür Altai Bayan kelebe minu arban
（私が）番をしていたヒツジはいますよ」と返事したら，アルタイ・バヤンはいった。
「わしの十

15-b

- 1: Tümen adayun-dur külüg + bayınu + ügei bayınu boluqul-a ene morin-u qubaqai toluyai
čimadur
万頭のウマのなかに駿馬はいるか，いないか¹³⁸⁾。（もしかしていない）から朽ちたウ
マの頭蓋骨がお前に
- 2: Külüg bolju üjigdebeü či külüg taniqu bayinam manayar erten adayun-dur
駿馬となってみえたのか。お前に駿馬が分かるなら明日の朝早くわしの馬群に
- 3: Minu külüg bayınu ügei yuu. šinjıju ača gebe teyin boltuyai manayar
駿馬がいるかいないか，観察しろ」といった。「分かりました。明日
- 4: Adayun-ıyan quriyaju ire gebe tedüi manayar adayun-ıyan quriyad čı
馬群を集めてきてください」と（少年は）いった。そこで，翌日（アルタイ・バヤン
は）馬群を集め，「お前が
- 5: Šınji gebe. tedüi tere köbegün yurba dakin adayun-dur ergin oruju
みてみろ」といった。そして，その少年は三回馬群に入り，まわって
- 6: Üjiged egün-dür činu külüg ügei bayın-a. qarin-ni külüg-yin
みたあと，「この（馬群）に駿馬はいません。ただし，駿馬の
- 7: Bayasu bayınam geküi-dür tere Altai Bayan ayurlaju basa yancıju
糞¹³⁹⁾ならあります」というと，そのアルタイ・バヤンは怒ってまた（少年を）叩い
て¹⁴⁰⁾

16-a

- 1: Bayıtal-a ger-ün qoyın-a nıgen mori inčayaba tere köbegün mani-yi büü
いたら，天幕の北側に一頭のウマがいなかった。その少年は「私を叩か
- 2: Yancı gebe külüg-yin dayun yarunam bišüü geji keleged yarju üjikül-e
ないで」といった。「駿馬のいななきが聞こえたでしょう」といって，起きあがっ
て¹⁴¹⁾ みたら，
- 3: Ongyučun qobuy-a ačıysan qoyar dalun-u yool dumda-ban tayaratai
水槽と桶¹⁴²⁾（写真4）を（背中に）のせ，両の肩のまんなかに（鞍）きずのある，
- 4: Šuquda segül-tei qongyur alay mori-yi üjiged ene čuqum külüg geči

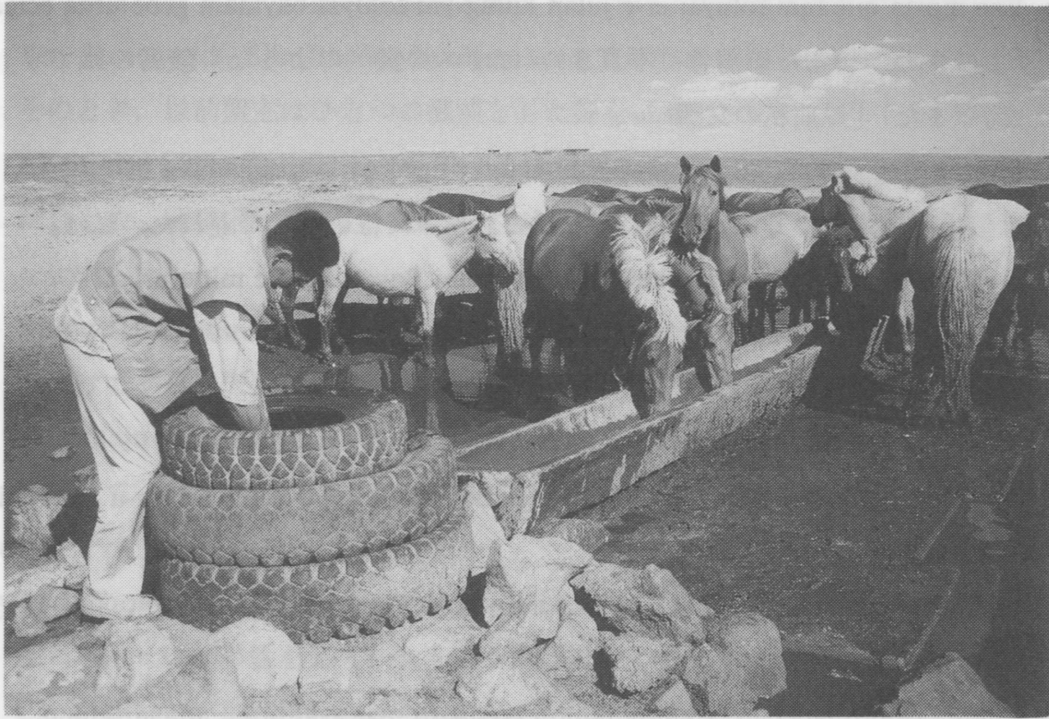


写真4 ゴビ地域の飲水装置（井戸と水槽）

ゆがんだ尾の、可憐なまだらのウマがみえた。(少年は)「この(ウマ)こそ本当の駿馬という

5: Mön gemeküi-dür tedüi Altai Bayan basa ayurlaju minu arban tümen

ものです」というと、アルタイ・バヤンはまた怒って「わしの十万頭の

6: Adayun-dur bolqul-a külüg ügei boluyad ongyuča qobuy-a

ウマに駿馬がいなくて、水槽と桶を

7: Ačıgsan qongyur alay mori čimadur külüg bolbau geči basa

のせて運ぶ¹⁴³⁾ みすばらしいまだらのウマがお前には駿馬にみえたか」といってまたもや

16-b

1: Yančiba čingküdü köbegün ügülerün ai abai namai-yi büü yanči ene alay

叩きだした。すると少年はいった。「ああ、おじさん、私を叩かないで下さい。このまだらの

2: Mori-yi yurban jil qurlayulaju talbibasu medegdekü. tegün-ü qoyin-a čimadur

ウマを三年間休ませて放って¹⁴⁴⁾ みればわかりますよ。そのあとあなたに

3: Er-e külüg-yin yabudal-yi üjegüljü öggüy-e gebe tere Altai Bayan tegün-ü

本当の駿馬の走りをみせてあげましょう」といった。そのアルタイ・バヤンは彼(少年)の

4: Üge-ber yurban jil qurlayulaju geneddegen nigen edür kijey-e či ene külüg

いったとおりに三年間休ませた。(そして)突然ある日、「いつお前はこの駿

- 5: Mori-i erdem-i nada üjigül gemegsen-dür köbegün ügülerün yurban dabqur olung
馬の才能をわしにみせるのか」と聞いた。少年はいった。「三重の腹帯、
- 6: Γurban dabqur quduray-a giked yurban uuda šarui. yurban uuda ejigi
三重の尻木¹⁴⁵⁾ と三袋¹⁴⁶⁾ の沙，三袋のエージギ¹⁴⁷⁾，
- 7: Qurud açiju aç-a gebe arban tümen adayu-ban aldal ügei qurayaju bai
ホルート¹⁴⁸⁾ を用意して下さい，また「十万頭のウマを（一頭も）欠かさずに集めて
きて待っていて下さい」

17-a

- 1: Gebe yurba ergijü ireküi-dür çi tende üje geju kelebe. tegün-ü üge-
といった。（また）「（馬群を）三回まわってきたとき，あなたはそこでみていて下さい」
といった。少年のことは
- 2: Ber Altai Bayan tere metü tökügerün öggüged köbegün tere morin-i
とおりにアルタイ・バヤンはそのように用意した。少年はその（まだらの）ウマに
- 3: Unuyad arban tümen adayun-i yurba dakin ergijü. yurban uuda siroi-
またがり，十万頭のウマの周りを三回走った。三袋の沙
- 4: Yi ergekü büri nige nigen-i qayalju toyusun-i yaryad köbegün ügülerün kümün-
をまわる度にひとつひとつを壊し¹⁴⁹⁾，沙ぼこりをたてた。（そこで）少年はいった。「人
- 5: I köbegün kögjibe. külüg-yin unay-a degjibe. ged yabuju odba tedüi
の子は勝った。駿馬の仔は育った¹⁵⁰⁾」といて逃げ去った。そこで
- 6: Altai Bayan ary-a- ban olun yadayad Γal Jula Boru mori yuyan bariju
アルタイ・バヤンは仕方がなく，炎のような茸毛のウマ¹⁵¹⁾ を捕えて
- 7: Unuyad içiji. açitu boyda ejin minu ayiladdun soyurq-a. er-e biši
乗って出発した¹⁵²⁾。「恩ある聖主に申しあげます。ただの男ではなく

17-b

- 1: Erdeni mori biši külüg geçigi alda ba. bi ary-a ügei bolqu-du ejin- degen
宝である（人材と），普通のウマではなく駿馬というものを失いました，私。仕方なく
主君に
- 2: Ayiladyan irlüge bi. minu gerte nigen olja-yin köbegün bayiysan bile
ご報告申しあげにきました，私。私の家に一人の捕虜だった少年がいました。
- 3: Tere qurudu kölüg šinjigçi bayiysan açiyuu nigen edür bi mal-iyän
彼は足の速い駿馬の鑑定士でした。ある日私は家畜を
- 4: Uyтуju yabun atal-a tere köbegün nigen morin-u qubaqai toluyai-yi teberejü
迎えに出かけたら，その少年がひとつの朽ちたウマの頭蓋骨を抱えて
- 5: Uyılan bayiqui-dur bi üjiged çi yayudgejü sayunam geji asayuysan-dur
泣いていたので，私はみて《お前は何をしているのか》と尋ねたところ，
- 6: Tere köbegün kelebe. eçige minu külüg šinjigçi bile. bi ene qubaqai toluyai-

その少年はいいました。《私の父親は駿馬の鑑定士でした。私はこの朽ちた頭蓋骨

- 7: Yi üjibesü er-e jula külüg-yin toluyai bayinam geji uyilaba gemen keleküi-dü
をみて、炎のような（本当の）駿馬の頭だたと（思って）泣きました」と申しましたので、

18-a

- 1: Tegün-i bi minu arban tümen adayun-dur külüg bayinu üji gebe tere
私は彼に《私の十万頭の馬群に駿馬がいるかみてみろ》といいました。彼は
- 2: Qorudu minu ongyuča qobuy-a açıgsan quluyur alay mori-yi külüg
群れ¹⁵³⁾のなかの水槽や桶をのせた、耳の小さいまだらのウマを駿馬
- 3: Mön gemen keleküi-dü tegün-ü üge-ber yayun-i kelesü tegüber bütügejü
にちがいないと申しました。彼のことばを信じて何といおうとそのとおりに用意して
- 4: Öggül-e tere köbegün qarın-ni külüg-yi minu unuyad yabuba. ejin
やったら、その少年はかえって私の駿馬に乗って逃げました。主君
- 5: Minu aray-a yayun bai. ayilad gebe. tedüi Boyda Ejin jarliy bolba
よ、どうすればよいでしょう」と報告した。そこで聖主は命令を出された。
- 6: Dzündüü sayıqan köbegün minu Bay-a Jayal-yi unuju yurban aldan degege
「わしのズンドゥ・サイハン息子は小さいジャガルに乗って、十五尺の鉤つきの槍を
- 7: Bariju morda gebe. çidabasu kümün külüg qoyar-yi dabqur-iyar bariju
もって出発せよ」と仰せられた。「できれば少年と駿馬両方を一緒に捕えて

18-b

- 1: Ir-e yadabasu kümün-i bariju ir-e gemeged Dzündüü sayıqan köbegün-i mordayulba.
tedüi tere yabuyad.
こい。できなかつたら少年（だけ）を捕えてこい」と命令し、ズンドゥ・サイハン
息子を送りだした。そこでズンドゥ・サイハン息子は出発して、
- 2: Furba qonuysan külüg-yi mön edür güiçibe. yurban üy-e debsijü
（すでに）三日前に出発していた駿馬にその日のうちに追いついた。三回前進して
- 3: Külüg-yin töngkeliy-eçe tatabasu ese güçükürbe köbegün-i debel-ün
駿馬の馬銜の鉄環から引っぱったが¹⁵⁴⁾、力が及ばなかった。（今度は）少年の長衣の
- 4: Jiq-a-aça tataju abju qoçaruba tedüi qoyayulan sundalaju
裾から引っぱって捕えることができた。そこで二人で（小さいジャガルに）乗って
- 5: Farji yabutal-a. Bay-a Jayal boltusju ükübe. tedüi Ejin Boyda
（帰途に）ついたら、小さいジャガルは疲れ果てて死んだ¹⁵⁵⁾。それを知った聖主は
- 6: Gumadaju naiman aldan mangnu-yiyar oriyaju yasun-i sayıqan bariba
悲しみにくれ、（長さ）四十尺のマンヌク緞子¹⁵⁶⁾で（遺体を巻いて）骨をていねいに
ととのえた¹⁵⁷⁾。
- 7: Tere çaytur Aruytai Tayisi örlüge üdeşi minu köbegün

そのとき、アルクタイ・タイシは朝晩「わしの息子に

19-a

- 1: Öljiitü. aray-a ügei külüg-yin sayin-i taniqu bile ergeji urbaju
幸運があるように。(息子は) 幸か不幸か¹⁵⁸⁾ 駿馬の真価が分かるのだ。ふたたび
- 2: Kejiy-e irekü-yi medekü medege ügei geji öndür deger-e yarju barayan-i
いつもどってくるかを知りようがない」といっては、高いところに登って(息子の) 遠影を
- 3: Qaraju yabun atal-a genedden nigen üdeşi külüg-yin toyusun yarqui-yi
眺めていたら、突然ある夕方に駿馬の沙ぼこり¹⁵⁹⁾ がたっているのを(みて)
- 4: Gerdegen qariju ireged em-e-degen kelebe. oyi çi medebeü ene üdeşi
天幕に帰ってきて妻に教えた。「おい、お前知っているか。今夕
- 5: Öndür deger-e yarju yabutal-a. külüg-yin toyusun yaronam bile.
山の上に登ってみたら、駿馬の沙ぼこりがたっていた。
- 6: külüg-yi taniqu kümün ügei. yerü minu köbegün aray-a ügei taniqu
駿馬を知る人はいない。ただわしの息子(だけ) 仕方なく知っている
- 7: Bile. labta ene minu köbegün mön be tere mön bolqul-a. tegün-i güiçikü
のだ。絶対これはわしの息子にちがいない。息子だったら、彼に追いつける

19-b

- 1: Mori ügei kerbe güiçikü bügesü Qara Qaljan mori yurban üy-e debegeküi-dür
ウマはいない。もし追いつけるとしたら、頭に白い斑点のある黒馬が三回全力疾走したら
- 2: Aray-a ügei güiçikü bile. geji keleged. Qara Qaljan morin-iyen jasan qaysayan
なんとか追いつくだろう」といった。そして自らの頭に白い斑点のある黒馬を訓練、節食させ、
- 3: Temürçi-yin Uran-i gerden odtuyad yurban alda temür degege
鍛冶の匠の天幕に¹⁶⁰⁾ 行き、(長さ) 十五尺の鉄の鉤つき槍を
- 4: Abuyad uytuju yabutal-a kümün ügei külüg kürjü irebe. eji
手にして¹⁶¹⁾ 迎えに出かけたら、人の乗っていない駿馬が走ってきた。「お母さん、
- 5: Abu minu köbegün ene külüg-eçe unaqu yosu ügei bile. degereki
お父さん¹⁶²⁾、わしの息子はこの駿馬から落ちるはずがない。上の
- 6: Tngri dooraki yajar eji ged dab geji külüg-yin töngkeliy-eçe degegeber
(父なる) 天¹⁶³⁾、下の母なる大地」といって、さっと駿馬の馬銜の鉄環から鉤つき槍で
- 7: Tatabasu gücü ese kürüged talbiju bey-e-ben amuraju qoyar
引っぱったが、力が及ばずに放った。体を休ませ、二

20-a

1: Üy-e ergigülüged toytayan yadaju talbin ilegebe tegünče

回遠まわりして止めよう¹⁶⁴⁾としたが、(駿馬は)止まらなかったなので、そのまま行かせた。それ

2: Qoyıŋsida külüg yadan-a törükü yosu ügei. Kitad-un

以来、駿馬は余所で生まれることはなく、漢族の

3: Ƣajar-a toytaqu yosun tegünče boluysan tere metü bui

地方でとどまるわけはそこからはじまった。そのようなことである。

4: Irügel badaran öljü qutuy oruŋi

祝詞が広がり、吉祥が深まるよう。

4.3 QB 本 : Ejen Boyda-yin qoyar Jayal-un tuyuji orusiba

——聖主の二頭の駿馬の伝説——

1

1: Erte nigen čay-tu ejen Činggis Qayan-u

いにしえのあるとき、主君チンギス・ハーンの

2: Bum sürüg-ün doturaki Buyural Ulayan-ača Ermeg

十万頭の馬群のなかのブーラル・ウラーン¹⁶⁵⁾から、エルメク・

3: Čayayčün gegüü-eče er-e qoyar Jayal törübe gen-e:

チャガークチン(という)牝ウマから二頭のジャガルが生まれたという。

4: Tungyalay mören-ü jaq-a-du. dobučay ayula-yin

清らかな大河のほとりで、なだらかな山の

5: Orgil deger-e teskim-e ebül-ün tabu yisü-yin küiten-dü

いただきで、厳しい冬のもっとも寒い¹⁶⁶⁾ときに¹⁶⁷⁾、

6: Doysin qor-a-yin edür unayalaysan qoyar Jayal gen-e:

猛烈な吹雪の日に生まれた二頭のジャガルであるという。

7: Unayan salai-ni qatayadui. taryuyqan dörben tuyurai

仔ウマがぬれたまま¹⁶⁸⁾乾かないうちに、柔らかい¹⁶⁹⁾四つの蹄

8: Anu aysiyadui-dur Ermeg Čayayčün eke-ben toyurin

がまだ乾いて固くならないうちに、エルメク・チャガークチン母(のまわりを)まわって

9: Toylaju yabuqui-dayan tünngerčeg-ün činegen

遊びだした。走るときには陰のうくらしいの

10: Čilayun-i tülkin unayaju. ayay-a-yin činegen čilayun-i

小石を動かし、お椀くらしいの小石を

11: Alus qola qayalan nayadču bayital-a. Ejen Činggis

遠いところまで蹴飛ばして遊んでいた。主君チンギス（・ハーン）が

12: Yeke aba talbiju yabuqui-dayan. Ulayan Buyural

大規模な巻狩をもよおし、出かけるときに、種雄ウマのウラーン・ブーラル

13: Ajary-a-yin Ermeg Čayayčın gegüü-yin er-e qoyar Jayal-un

と牝ウマのエルメク・チャガクチンから生まれた二頭の雄のジャガルが

14: Toylaju nayadun bayiqu-yi ajiyaran üjged

じゃれたり遊んだりしているところをじっくりみて

2

1: Yekede bayasju. sinjilen üjged sayin jayayatu külüg gemen

大いに喜んだ。（ハーンは）観察してから「好運の駿馬だ」と

2: Sayisiyaju. ečige tngri-yin minu qayirlaysan er-e qoyar Jayal

ほめた。（また）「父なる天から賜った二頭の雄のジャガルだ」

3: Gemen maytaju yisüged yisüged gegün-dür telelen kökügüljü ösgeged

と称えた。九頭ずつの牝ウマに授乳させて育てあげた。

4: Unaya anu duni uyaju. day-a anu duni dabtaju. soyolang čaytur

一才馬のときにつなぎ、二才馬のときに疾走させ¹⁷⁰⁾、五才馬のときには

5: Quayajaju jiysayan yurban sar-a qaysajaju. nigen edür Ejen

武装して整列したものだ。三ヶ月節食させて、ある日主君（チンギス・ハーン）が

6: Jarliy bolurun. ene qoyar Jayal mori-ban ene edür soriju

命令を下した。「この二頭のジャガル馬を今日試して

7: Üjey-e gemeged yeke čerig aba-ban ködelgen yabuqui-dur. köke činu-a

みよう」といって大勢の勢子たちを率いて出発した。そのとき蒼き狼¹⁷¹⁾の

8: Nigen bölüg dayariyduysan-i ködelgel ügei čöm dayarin unayaju yarba:

一群に出あい、（一匹も）逃すことなくことごとく倒してやった。

9: Aryali uyalja-yi angnan kögegebesü. ary-a ügei güiçigdejü alayulba:

アルガリやウガールジは狩りたてられ、仕方なく追いつかれて殺された。

10: Yamarmai-yin abačın nigen qoyar ču ese güiçibe gen-e:

あらゆる勢子たちのなかで一人二人だに（二頭のジャガルに）及ぶものはいなかった。

11: Ende qoyar Jayal-dur uyaraq sedkel törüjü. ukilaqu

ここで二頭のジャガルに悲しみの念が生じた。泣いて

12: Nilbusun yaryaba: qariju iregsen-ü qoyin-a. Bay-a Jayal

涙を流した。帰ってきたあと、弟の小さいジャガルは

3

1: Degüü inü. Yeke Jayal aq-a-dayan kelebe: abuyai minu. či

兄の大きいジャガルにいった。「お兄さん、あなた

2: Bida qoyar yabuy-a. asaraju unuqu anu Erke Jigerde bisiü:

と私二人で行きましょう。いたわって乗るのは大事な褐色馬ではないか。

3: Alan bulan unuqu anu ċi bida qoyar bayinam: qayirlaju unuqu

殺されるほど乗られるのはあなたと私の二人でしょう。可愛がって乗る

4: Anu Qar-a Qula bayisiu: qatayu sirügün-dü unuqu anu

のは黒金色馬でしょう¹⁷²⁾。敵しいとき、寒いときに乗られるのは

5: Ći bida qoyar bayinam: emegen-iyen metü sanayċi Erke Jigerde

あなたと私の二人でしょう。自分の妻のように思われているのは大事な褐色馬

6: Bisiü: eng-ün metü sanayċi anu ċi bida qoyar bayinam:

ではないか。何とも思われていないのはあなたと私の二人でしょう。

7: Qatun-iyen metü sanayċi Qar-a Qulan anu bisiü.

自分の妃のように思われているのは黒金色馬ではないか。

8: Qaratan metü sanayċi anu ċi bida qoyar bayinam:

敵のように思われているのは、あなたと私の二人でしょう。

9: Abuqai-ban metü sanayċi Al Jula Boru mori bisiü:

お嬢さんのように思われているのは赤い炎のような茸毛馬ではないか。

10: Alan Bulan asanċilayċi anu ċi bida qoyar bayinam:

殺されるほどつまらぬ者（とされる）のはあなたと私の二人でしょう。

11: Abuyai minu ċi bida qoyar yabuy-a: Altai Qan gegċi yajar bayinam

お兄さんよ、あなたと私二人で行きましょう。アルタイ・ハンという地があります。

12: Agi sibay ebesü-tei genem: aru öbür ügei usu-tai genem:

白ヨモギやニガヨモギの草があるといいます。山陰にも山陽にも水があるといいます。

4

1: Aldayulun kürjü amaraju kebtay-e:

逃れて行って休んで寝ましょう。

2: Köküi Qan gegċi yajar bayinam köbte büri ebesü-tei genem:

グクイ・ハンという地があります。盆地ごとに草があるといいます。

3: Kögürem büri ebesü usu-tai genem: güyüjü kürjü urbaju körbejü kebtay-e:

草原一面に草と水¹⁷³⁾があるといいます。走って行って寝ころがって休みましょう。

4: Qouqai-yin Ğurban Ćabċiyur gegċi yajar genem.

ホーハイン・グルバン・ジャブチュールという地があるそうです。

5: Ğorbi büri ebesü-tei genem.

谷ごとに草があるといいます。

6: Ğotuγur büri qujir-tai genem:

窪地ごとに塩があるといいます。

7: Qoladju kürjü urban körben amaray-a:

遠く離れて行って寝ころがって休みましょう。

- 8: Ai abai minü aldayulju kürüy-e:
ああ、お兄さんよ、逃げて行きましょう。
- 9: Amraju kebtey-e. bosju idey-e:
ゆっくり寝ましょう。起きて食べましょう。
- 10: Qalayun edür barinam bisiü. qatatal-a čiletel-e uyanam bisiü:
暑い日に捕えられるのではないか。干あがって耐えられないほどつなぐではないか。
- 11: Qar-a sir-a toqum toqunam bisiü. qayir čilayu emkügülünem bisiü:
黒や黄色の鞍敷をつけるのではないか。砂利や小石を食わせるのではないか。
- 12: Abuyqai minu yabuy-a:
お兄さんよ、行きましょう。

5

- 1: Küiten edür barinam bisiü. köke temür emkügülünem bisiü:
寒い日に捕えられるのではないか。青ざめた鉄（の馬銜）をはめさせるのではないか。
- 2: Gürümel toqum toqunam bisiü: küiten času emkügülünem bisiü:
絨毯の鞍敷をつけるのではないか。冷たい雪を食わせるのではないか。
- 3: Yayakiy-a abuyai minu. yabuy-a gebe: degüü Boru Jayal tere
どうしよう、お兄さん。行きましょうよ」といった。いとしい弟のジャガルがその
- 4: Metü niyuju kelekü-dür. Yeke Jayal aq-a degüü Bay-a
ようにこっそりいうと、兄の大きいジャガルが弟の小さい
- 5: Jayal-dayan kelebe: ai inay Boru Jayal minu: či yayu geju
ジャガルにいった。「ああ、愛する可憐なジャガルよ、お前はなぜ
- 6: Ingkejü oyitunam bile: er-e kümün bayarlabacı manglai ülü qayarnam
このように不満なのだ。男は喜んで額が割れることなない
- 7: Gel-e: ayta mori taryulabacı sayari ülü ijarnam gel-e:
という。去勢馬は肥えても皮がひび割れることはないという。
- 8: Ai inay boru Jayal minu yayun genem:
ああ、いとしいジャガルよ、何てことをいうの。
- 9: Qadan-u ebesü qaydatai ču bolba: qalayuram bayiju idey-e:
岩の草に小石がまざっていても、注意して¹⁷⁴⁾ 食べよう。
- 10: Butan-u ebesü boytai ču bolba: bolyuram bayiju idey-e:
草むらの草にほこりがあっても、払いおとして食べよう。
- 11: Ai inay boru Jayal minu yayun genem: man-i üjegsen kümün
ああ、いとしい可憐なジャガルよ、なぜこんなことをいうのか。私たちをみた人は
- 12: Kümün-ü geju kögegen üldekü bije: dayisun-u geju dayayar üldekü
他人のウマだといって追いはらうだろう。敵のウマだといってみんなで追う
- 13: Bijе:

だろう。

6

- 1: Jirliġ geġü jebe-ber unayaqu bije: Ai inay boru Jayal
野生のウマだといって矢じりで倒すだろう。ああ、私のいとしいジャガル
- 2: Minu yayun genem:
よ、何てことをいうのだ。
- 3: Ejen geġü Ćinggis Qayan-dur adali ejen oldaqu buyu.
主君というとはチンギス・ハーンと同じ主君は見つかるのか。
- 4: Eji geġü Ermeg Ćayayĉin gegün-dür adali eji oldaqu buyu:
母親というとはエルメク・チャガークチンと同じ母親は見つかるのか。
- 5: Eyin-kü sanaqul-a bayiyasi abai minu: arban sar-a boltal-a
このように思えばやめよう。母親が十ヶ月間
- 6: Gedesün-degen ergügsen. angir šir-a uyuray-ıyan sayın
自分の胎内でやしない濃厚な黄色い初乳をていねいに
- 7: Kökügülgösen qotuyur niruyun-ıyan ĉiletel-e ergügsen.
吸わせ¹⁷⁵⁾、くぼんだ背中が疲れるまで背負い、
- 8: Qongyur šir-a uyuray-ıyan sayın kökügülgösen Ermeg Ćayayĉin
愛情たっぷりの黄色い初乳を大切に飲ませたエルメク・チャガークチン
- 9: Eji yügen yayakıju martay-a genem: ösgen törügülgösen
母をどうして忘れることができようか。育て生ませた
- 10: Ulayan Buyural ayai yuyan yayakıju martay-a genem:
ウラーン・ブーラル父をどうやって忘れようというのだ。
- 11: Edüġe qanılayısan olan nöküđ-ıyen yayakıju martay-a genem.
これまでつきあってきた多くの友人たちをどうやって忘れようというのだ。
- 12: Ai inay Boru Jayal minu yayun ingkinam geġü qorital-a.
ああ、いとしいジャガルよ、どうしてこう（不満）なのだ？」と（大きいジャガルが）
止めても

7

- 1: Ese toytaju öndür quva dobun deġer-e yarju. qaran qaran yabuju.
聞かず（に行った）。高い丘陵の上に登り、（小さいジャガルの後ろ姿を）みながら行くうちに
- 2: Üde bolqu-du yurban ulıyasun modun-u següder-tü següderleġü
昼になるころ、三本のポプラの木の陰で涼しんで
- 3: Bayıqu-du: dörben jüg-eĉe inü dörben önggetü Altan Ģuryulđai
いると、四方（八方）から四色で金色の雉（などの）
- 4: Sibayud bosun jırgebe: urdu yajar-un ebesü inü unay-a

鳥たち¹⁷⁶⁾が飛んできてさえずった。「南の土地の草は一才馬や

5: Day-a čimkükü metü sayıqan bayınam: qoyidu yajar-un ebesü inü

二才馬がつまんで食べられるくらい¹⁷⁷⁾高いよ。北の土地の草は

6: Qoni qury-a čimkikü metü bayınam: urdu yajar-un usu anu nayur

ヒツジや仔ヒツジ¹⁷⁸⁾が(やっと)食べられるくらい低い¹⁷⁹⁾。南の土地の水は湖や

7: Dalai-dur adali bayınam: qoyidu yajar-un usu anu qoyiy-un sibar

海と同じだよ。北の土地の水は中洲の泥や

8: Šalčiy-tur adali bayınam: basa urdu yajar-un er-e-yin gejiqe inü

泥水と同じだよ」といった。また「南の土地の男の髪は

9: Alda kiged delim sayıqan bayınam: qoyidu yajar-un er-e gejiqe

五尺も三尺も(あって)立派だ¹⁸⁰⁾。北の土地の男の¹⁸¹⁾髪は

10: Inü imayan-u segül-tei adali bayınam: basa urdu yajar-un

ヤギの尾と同じくらい(短い)」といった。また「南の土地の

11: Ayta-yin yuy-a. teberijü baytasi ügei metü sayıqan bayınam:

去勢馬の太腿は、抱えきれないほど(太く)立派だ。

12: Qoyidu yajar-un ayta-yin yuy-a gegürjegen-e čarçayan-u yuy-a-dur

北の土地の去勢馬の太腿はバツタやコオロギの脚と

8

1: Adali bayınam geju jirgebe:

同じだよ」とさえずった。

2: Qarçayai sibayun qadan deger-e sayun jirgebe:

(今度は)鷹(という)鳥が岩の上にとまって鳴いた。

3: Qayan Ejen-ü qoyar Jayal yajarlaqu yosun tegün-eče bolba:

ハーン主君の二頭のジャガルが牧地をかえた次第はそこからはじまった。

4: Boysiry-a sibayun bosun jirgebe:

スズメ¹⁸²⁾(という)鳥がとびたちさえずった。

5: Boyda Ejen-ü qoyar Jayal yajarlaqu yosun tegün-eče bolba:

聖主の二頭のジャガルが牧地をかえた次第はそこからはじまった。

6: Altan Ğuryuldai sibayu uliyasun modun-u möcir deger-e iren jirgebe:

金色の雉(という)鳥がポプラの木の梢の上に飛んできてさえずった。

7: Ayta qoyar Jayal yajarlaqu yosun tegün-eče bolba:

去勢馬の二頭のジャガルが牧地をかえた経緯はそこからはじまった。

8: Köküi Qan-u aru daki Köküge sibayu iren jirgebe:

グクイ・ハン山の北にいるホトトギス(という)鳥が飛んできてさえずった。

9: Kögerüküi qoyar Jayal qola yajarlaqu yosun tegün-eče bolba:

いとしい二頭のジャガルが遠く牧地をかえたことはそこからはじまった。

10: Tedeger sibayun-i dörben jüg-eče jirgeküi-dür. tere qoyar Jayal

それらの鳥が四方からさえずるとき、二頭のジャガル

11: Mori qoyar čiki-ben serteyjü. segül-iyen saysayilyaju. qamar-

馬は両の耳をそばだて、尾をさかだて、鼻

12: Iyan qoukirju čingnan bayiyad qayiratu Bay-a Jayal yajarlan

を鳴らして聞いていた。可愛い小さいジャガルが牧地を

13: yabuba:

かえていった。

9

1: Tere Jayal mori:

そのジャガル馬は

2: Türgen tügen yabuqui-dur

速く速く行くときは

3: Tünggerčeg-ün činegen čilayun-i ködelgen.

陰のうくらの石を蹴とばし、

4: Aryar aryar yabuqui-dur

ゆっくりゆっくり行くときは

5: Ayay-a-yin činegen čilayun-i čokilan yabuba:

お椀くらの石を動かして行った。

6: Tedüi Qouqai-yin Ğurban Čabčiyur-i jorin yabuju kürjü

ホーハイン・グルバン・ジャブチュールを目指して行く

7: Bayital-a. Yeke Jayal aq-a anu degüü Bay-a Jayal-un toyusun-i

うちに、兄の大きいジャガルは弟の小さいジャガルのほこりを

8: Qaraju bayiyad ese tesün. qoyin-a-ača kürjü irekü-degen qar-a

眺めていて我慢できなくなり、あとを追うようにして走った。(大きいジャガルは)

9: Kölüsü-ben yaryaju. qamar-iyen sartayiju. arayıqan geju.

汗びっしょりになり、鼻をひろげ、やっとのことで

10: Ami temečekü metü güičečü irebe:

命をかけるように追いついてきた。

11: Tere söni Qayan Ejen noyirsuysan-u-ban qoyin-a jigüdülebe:

その夜、ハーン主君はお休みになってから夢をみた。

12: Erte bosju Boyul Mečen-degen jarliy bolba:

朝起きて侍臣のメチンに仰せられた。

10

1: Erketü ečige tngri-eče esitei törügsen erke qoyar Jayal minu

「偉大な父なる天から正統性をもって生まれた可愛い二頭のジャガルが

2: Neyilün yajarlaba geju jigüdülebe bi:

つれだって牧地をかえた、という夢をみた、私。

3: Qayan tngri ečige-eče jayayatai törügšen

父なる天帝のおいつくしみにより生まれた、

4: Qayiratu qoyar Jayal minu.

私のいとしい二頭のジャガルが

5: Qari bolun yajarlaba geju jigüdülebe bi:

異郷へ出奔した、という夢をみた、私。

6: Ai. Boyul Mečen minu aduyun-dur oruju üje. ünen buyu qudal buyu:

ああ、侍臣メチンよ、馬群へ行ってみよ。本当かうそか（確かめよ）。

7: Ünen bögesü tabun öngge dörben qari-yin ulus-tur minu erte

（もし）本当だったら私の五色四夷の国に朝

8: Manayar tungqay ögčü čuyulju ir-e gebe:

早く命令を発して集めてこい」と命じた。

9: Tedüi Boyul Mečen aduyun-dur oruju üjibesü. qoyar Jayal

そこで侍臣メチンが馬群に入ってみると、二頭のジャガルは

10: Ügei açuyu: Ermeg Čayayčün gegün inü eyisi teyisi qaraju.

いなくなっていた。牝ウマのエルメク・チャガークチンがあちらこちらをみながら

11: Qoyar nidün-eče-ben nilbusu yaryaju. qoyar kökün-eče-ben sün čoburiyulju

両眼から涙を流し、両乳房から乳をたれ流して

12: Bayiba: tedüi Boyul Mečen erte manayar yabuju. tabun öngge

いる。そこで侍臣メチンが朝早く出発して五色

11

1: Dörben qari-yin ulus-iyän čuyulju abčiraba: iregsen-ü qoyin-a:

四夷の国ぐにを招集してきた¹⁸³。（集めて）きたあと、

2: Ačitu Qayan Ejen

恩あるハーン主君は

3: Al Jula Boru morin-dayan

赤い炎のような茸毛馬に

4: Altan emegel toqum-iyen toquju.

黄金の鞍と鞍敷を敷いて

5: Altan sayaday-iyän büseljü.

黄金の矢筒を帯び、（そのなかに）

6: Alanggir čayan nomun-iyän dürüjü.

松の木¹⁸⁴（で作った）白い弓を挿し、

7: Al načün qarčayai-ban bariyulju.

赤い隼や鷹を腕にとめて

8: Ama çayan šir-a noqai-ban kötülgejü.

口の白い黄色い犬をつれ、

9: Ayta qoyar Jayal-iyän eriküi-dür.

二頭のジャガルをさがそうと（するとき）、

10: Aba-yin yeke ulus-tayan jarliy bolba:

すべての勢子に命令が下された。

11: Ter-e qoyar Jayal-i minu ken kümün güičebesü büü qarbu:

「わしの二頭のジャガルに誰が追いついても射ってはならない。

12: dam dam-iyar tusju uytuju bari:

何重にもかこんで正面から捕えよ。

12

1: Tere bariysan kümün-dü dörben qosiyu mal-aça tegsi qubiyaju

捕えた者には四種類の家畜からそれぞれ同じ数を分け

2: Öggüy-e gebe: Köküi Qan-u öbür-iyer çubun yabuju Altai Qan-u

あたえよう」という。また「グクイ・ハン山を南から流れるように行き、アルタイ・ハン山の

3: Aru-bar abuljiy-a: töb-ün kümün türgen yabu: odui-yin kümün urid yabu:

北で狩りをしよう¹⁸⁵。中央の勢子は急いで行け。先鋒の勢子は先に進め。

4: Takim-un kümün tasuran büü qoçur geju jarliy öggüged. Köküi Qan-

両翼の勢子たち（の列）は割れて遅れてはならない」と命令した。グクイ・ハン山

5: U öbür-iyer Altai Qan-u aru-bar abulçiju ireküi-dür. Yeke Jayal

の南、アルタイ・ハン山の北を席捲してくるとき、兄の大きいジャガル

6: Aq-a anu Bay-a Jayal degüü-degen aba-yin kümün irebe geju dakin

が弟の小さいジャガルに「巻狩の人が来た」と何回も

7: Dakin kelekü-dür Bay-a Jayal kelebe: ai abuyai minu çi em-e kümün

何回もいうと、小さいジャガルが答えた。「ああ、お兄さん、あなたが女の人

8: Metü oqurqan sanay-a-tai çinu yayu bui: çi bida qoyayula-yi

のようなあさはかな考え方をもっているとはどういうことですか。あなたと私の二人に

9: Güiçikü bayituyai man-u bar-a-yi qaraqı mori tende bui biliü:

追いつくどころか、われわれの遠影も眺められるウマが彼らのところにいますか。

10: Bar-a-yi mini qaraqı bolqul-a Al Jula Boru mori yayakinam bolba:

遠影を眺めるぐらいなら、赤い炎のような茸毛馬に何ができるというのでしょうか。

11: Tegebecü yayun bui: yay ügei yabuy-a abai minu: töb-ün kümün-dü

それでも何ともないですよ。心配しないで行きましょう、お兄さん。中央の勢子には

12: Toyusun-iyān üjegdey-e. odui-yin kümün-dü bar-a-ban qarayday-a gebe:

ほこりをみせてやりましょう。先鋒の勢子には遠影をみせてやりましょう」といった。

13

1: Köküi Qan-u öbür-i daban yarqu-dur.

(また)「グクイ・ハン山の南を登ってとおるときに

2: Köke qaljan buyu-yi isgüjin unayaju bayuy-a:

額に白斑のある青い鹿を蹴り倒して行きましょう。

3: Altai Qan-u aru bayuqu-dur

アルタイ・ハン山の北¹⁸⁶⁾を下りるときに

4: Aryali uyalja-yi giskilejü bayuy-a:

アルガリとウガールジを踏み倒して行きましょう」といった。

5: Tere kelegesen üge-ber isgüjin unayaju yarun oçiba:

そういったとおりに蹴とばし倒して出ていった。

6: Qayan. Köküi Qan-u öndür deger-e yarju. bar-a-yi tasurtal-a

ハーンはグクイ・ハン山の頂上に登り、(二頭のジャガルの)姿が消えるまで

7: Qaraju bayıyad. ese güičegsen-dü Boldu-yin Boru tal-a deger-e

眺めていた。追いつけなかったので、ボルドゥイン・ボロ・タラ(という野)

8: Bayuju. toqum-iyān delgejü. büse-ben küjügün-degen elgüjü.....

に駐営し、鞍敷を敷き、帯を(はずして)頸にかけて¹⁸⁷⁾.....

9:(欠落) tngri-yin qayir-a-bar qayan bolba bi. yağçayar-ban yajakıju

「.....天のおいつくしみによりハーンになったのだ、私は。一人でどうやって¹⁸⁸⁾

10: Egeldürjü qariy-a: ermegei sayin-iyar qayan ese boluluy-a bi.

(馬具を)背負って帰ればよいのだらう。勇猛な力でハーンになったわけではないのだ、私は。

11: Erketü tngri eçige-yin jayayan-iyar qayan bolba bi:

父なる上天から運命によってハーンになったのだ、私は。

12: Emegel-iyen yajakıju egürjü qariy-a bi.

鞍をどうやって背負って帰ればよいのだらう。

14

1: Olan yeke aba bolunam bije.....(欠落) yayun-iyān jiysayan

大勢で大規模な巻狩になったら¹⁸⁹⁾、どのウマを整列させ、

2: Qaysayay-a: küi yeke aba bolunam bije yayun-iyān emegelley-e bi:

(どのウマを)訓練しよう。五百戸からなる巻狩のとき、どのウマに鞍をつけよう、私は。

3: Kündü yeke çerig bolunam buja yayun-iyān quaylay-a bi.

重大な軍事行動のおりに¹⁹⁰⁾何に鎧をつけよう、私は。

- 4: Qaratan dayisun bolqul-a yayun-iyān ununam:
 狂暴な敵があらわれたらどのウマに乗ろう。
- 5: Qayiran qoyar Jayal minu geǰü qayilaba:
 (何と) 惜しい私の二頭のジャガル」と悔やんだ。
- 6: Tedüi güiçegsen ügei Ejen Boyda ger-tegen ögede bolju qariba:
 とうとう追いつけなかったので、聖主は天幕へともどっていった。
- 7: Qoyar Jayal Qouqai-yin Ğurban Ćabčiyur-tu nutuylaba:
 二頭のジャガルはホーハイン・グルバン・ジャブチュール¹⁹¹⁾に(着いてそこを)故郷とした。
- 8: Ğurban jil bolqu-du Bay-a Jayal sayari meten tarǰulba. Yeke Jayal
 三年たって小さいジャガルは皮がひび割れるまで肥えたが、大きいジャガル
- 9: Anu qataju jüsügsen morin metü yabubai: čingkiǰü bayital-a.
 は、やつれて細くさばかれたウマ¹⁹²⁾のように過ごした。そうしていると、
- 10: Bay-a Jayal degüü inü Yeke Jayal aq-a-dayan kelebe:
 弟の小さいジャガルが兄の大きいジャガルにいった。
- 11: Ai abuyai minu čī ebül-ün čay bolqul-a qoyar qačar-tur čīnu
 「ああ、お兄さんよ、あなたは冬になると両の頬に
- 12: Ayay-a-yin činege mösü körüǰü yabunam: jun-u čay bolqul-a qoyar
 お腕ほどの氷ができて暮らす。夏になると両の
- 15
- 1: Qačar čīnu qalčayayiraysan metü yabuqu čīnu yayun bui:
 頬ががさがさになるほど暮らすのはどうしてなのですか。
- 2: Ebesün-i bolbasu ereü-ber iden. usun-i bolbasu uruǰul-iyar adaliqan
 草はあごで(噛んで)食べ、水は唇で同じように
- 3: Uuyuju atal-a. ai abuyai minu čī arusu-tai sirbüsü-tei
 飲んでいたのに。ああ、お兄さん、あなたは皮も筋肉も
- 4: Ingkiji qataysan čīnu yayun bui: ačitu abai minu. čīmayi üküǰülǰü
 こんなに¹⁹³⁾ 痩せてしまったのはなぜなのですか。恩人のお兄さんよ、あなたを死なせたら
- 5: Arusu-yi čīni emüsbüü bi. miq-a-yi čīni idebeü bi: abai minu
 その皮を着よう、私。その肉を食おう、私。お兄さんよ、
- 6: Sanay-a-ban nada kelegesi gemeküi-dür. Yeke Jayal anu kelebe::
 考えていることを私に話して下さい」といった。そこで大きいジャガルが語った。
- 7: Ai inay boru Jayal minu: čī omuy-iyān daruǰadui. ayusgi-ban
 「ああ、いとしい葦毛のジャガルよ、お前は血気を抑えないで、怒りも
- 8: Qatayadui čīnu yayun bui: inay boru Jayal minu ösgen

和らげないでどうということなのだ。いとしい茸毛のジャガルよ、育てて

9: Törügülügsen Ermeg Čayačın eji yügen sanaqul-a. abuyai činu bi

生ませたエルメク・チャガークチン母を思えば、兄の私は

10: Ebesün-dür ereü-ben kürgejü yadaba: usun-dur uruyul-iyān

草にもあごをつけることができない。水にも唇を

11: Kürgejü yadaba: ai inay boru Jayal minu:

つけることができないのだ。ああ、いとしい茸毛のジャガルよ、

16

1: Olan yeke aba bolunam bile.

大勢からなる大規模な巻狩になるのではないか、(そのときには)

2: Ulus-un urid jiysayaju qaysayaday bile

仲間たちより先に整列し、訓練してもらえたのではないか。

3: Ulayan emegel toqum-iyān toquju.

赤い鞍と鞍敷をつけてもらい、

4: Ulus Mongyol-un emün-e erkimsigülün ködüljü irenem bile:

モンゴル国の先頭に(立って)、羨望されながら出発したのではないか。

5: Köküi Qan-u öber-iyer bayun ireküi-dür

グクイ・ハン山の南を下りてくるとき、

6: Köke qaljan uyalja-yi bayulyān ireged uytulun qarbumam bile

額に白い斑点がある青いウガールジを追いおろして、向かって射ったのではないか。

7: Köbčün ulus mini

大勢の人びとが

8: Kürje-yin činegen šidü-yi minu tataju yayiqaday bile:

私たちの鉄ほどの歯¹⁹⁴⁾を引きあけて驚嘆したものだ。

9: Ebesün-ü üjigür-i idebecü. usun-u tungyalay-i uuyubaču yayun-u

草の(柔らかい)葉先¹⁹⁵⁾を食べても、清水を飲んでも、何の

10: Tusa gejü keleged ukilaqui-dur Bay-a Jayal kelebe:

役に立つのであろう」といって泣いた。そこで小さいジャガルがいった。

11: Ai abuyai čī er-e kümün metü erbis erbis gejü iniyejü yabuqu bui j-a:

「ああ、お兄さんよ、あなたは男らしく豪快に¹⁹⁶⁾笑って暮らすのだ。

12: Em-e kümün metü irbes irbes gejü ukilaqu anu yayun gejü keleged.

女みたいにめそめそと泣いて何ということですか」といった。

17

1: Bay-a Jayal anu jöb qandun iniyejü. buruyu qandun ukilaju.

小さいジャガルは顔で笑い、心のなかで泣いた。

2: Genedde uyaraqū sedkil törüjü genegeren ebesü-yi nige qoyar qajalan

突然心が打たれ、悲しくなって草を一口、二口噛んで

3: Bayiyad kelebe: ai abuyai minu. ċi sayin ebesü-yi ide. sayin

からいった。「ああ、お兄さんよ、あなたがよく草を食べ、よく

4: Usu-yi uuyu. sanay-a-ban amaraju sayari meten taryuluysan

水を飲んで、心をおちつかせて皮がひび割れるほど肥って

5: Qoyin-a yabuy-a gebe:

から行きましょう」という。

6: Yeke Jayal anu jöb geju keleged. ebesü usu-yi iden uuyuju

大きいジャガルは「そのとおりだ」といって、草や水を食べて飲んで、

7: Urban körben bey-e-ben amaraju uridaki metü taryuluysan-u

くりかえし寝転がって体を休めて、以前のように肥った

8: Qoyin-a Bay-a Jayal kelebe: ai abuyai minu: yabuy-a edüge qariy-a gebe:

あと、小さいジャガルがいった。「ああ、お兄さん、行きましょう。今から帰りましょ
う」という。

9: Tegeju kelekü-dü Yeke Jayal anu bayarlan qatariba: Bay-a Jayal

そういったところ、大きいジャガルは喜び、小走りした。小さいジャガル

10: Anu süg süg geju yabuba: öber-ün yajar-tayan qariqu bolqu-

はゆっくりゆっくり歩きだした。自分たちの故郷に帰ることになり、

11: Dur Bay-a Jayal anu kelebe: ai abuyai minu: yurban sar-a-yin

小さいジャガルは（また）いった。「ああ、お兄さん、三ヶ月の

12: Fajar-i yurban qonuy-tu kürüy-e

道のり¹⁹⁷⁾を三日三晩で着きましょう。

18

1: Boljumur sibayu jirgiküi-yin uridun

スズメという鳥がさえずる前に

2: Boyda Ejen ögede bolqu-yin urida kürüy-e:

聖主がお目覚めになる前に着こう。

3: Qayirayun-a sibayu jirgiküi-yin urida

雲雀という鳥がさえずる前に、

4: Qayan Ejen ögede bolqu-yin urida kürüy-e:

ハーン主君がお目覚めになる前に着こう。

5: Altan Furyuldai jirgiküi-yin urida.

金色の雉がさえずる前に

6: Ačitu Ejen-iyen ögedelekü-yin urida kürüy-e

恩ある主君を起こす前に着こう。

7: Ulayan nara yarqu-yin urida.

- 赤い太陽が昇る前に
- 8: Unay-a day-a barilaqui-yin urida.
一才馬や二才馬を捕える前に
- 9: Ösgen törügülügsen Ulayan Buyural ayai-dayan
育て生ませた父のウラーン・ブーラルに、
- 10: Ergün törügülügsen Ermeg Čayayčın eji-degen
はぐくみ生んだ母のエルメク・チャガークチンに
- 11: Edüi olan qanilaysan nököd-tegen
多くの親交していた友人に（会うために）、
- 12: Ür siralaqu-yin urida kürüy-e gemen keleged jergečın
草の実が黄色くなる前に着こう」といって、二頭が並んで
- 13: Qatariyad. yurba qonuy-tu kürjü irebe:
走った。三日三晩で帰りついた。
- 19
- 1: Qoyar Jayal kürcü iregsen-ü söni Boyda Ejen qoyar Jayal-i
二頭のジャガルが帰ってきた夜、聖主は「二頭のジャガルが
- 2: Irebe geju jigüdülebe: Qayan Ejen erte manayar seriged Boyul
帰ってきた」という夢をみた¹⁹⁸⁾。ハーン主君は朝早く起きて侍臣の
- 3: Mečen-degen jarliy bolba: qayan tngri-eče jayayatai törügsen
メチンに仰せられた。「天帝より運命によって生まれた
- 4: Qoyar Jayal minu qariju iregsen-i qajayarlaju bayinam geju
私の二頭のジャガルが帰ってきたところ、馬銜をつけているという
- 5: Jigüdülebe: erketü tngri-eče esi-tei törügsen qoyar Jayal minu
夢をみた。偉大な天から正統性をもって生まれた私の二頭のジャガルが
- 6: Ergijü iregsen-i emegelleju bayinam geju jigüdülebe: ünen buyu
もどってきたところ、鞍をつけているという夢をみた。まことか
- 7: Qudal buyu: erte manayar aduyun-dur oruju üje geju jarliy bolba:
うそか、早くわしの馬群に入って確かめよ」とおっしゃった。
- 8: Qayan Ejen-ü jarliy-iyar Boyul Mečen aduyun-dur oruju üjebesü.
ハーン主君の命令にしたがって侍臣メチンが馬群に入ってみると、
- 9: Ermeg Čayayčın gegün eke inü eyin teyin qaran. qoyar Jayal yuyan
エルメク・チャガークチン母があちらこちらを見まわし、二頭のジャガルが
- 10: Iregsen-i üjeju. qoyar kökün-eče sün čoburiyulju. qoyar nidün-
帰ってきたのをみて、両の乳房から乳を出し、両の眼
- 11: Eče-ben nilbusu asqarayulju bayiba: qoyar Jayal anu Ermeg
から涙を（たくさん）流していた。二頭のジャガルはエルメク・

12: Čayačcin gegün-ü ende tende-eče inü qaraju sögürün bayiba:

チャガークチン母のあちらこちらをみて、こすったりして甘えていた。

20

1: Boyul Mečen barin yadaju. Ulayan Buyural ečige. Ermeg

侍臣メチンは（二頭のジャガルを）捕まえられず、ウラーン・ブーラル父とエルメク・

2: Čayačcin eke-tei inü eldejü ireged ejen-dür qoyar Jayal

チャガークチン母らを一緒に（ハーンの宮帳まで）追ってきた。「二頭のジャガルが

3: Irebe geju morin-u deger-eče barkiraysayar ireküi-dür.

来ました」とウマの上から叫びながら走ってきたとき、

4: Qayan ejen sonusuyad nömügen debel-iyen yabun yabun qančuyilayad

ハーン主君は（それを）聴いて肩にかけていた長衣を歩きながら袖に手を通し、

5: Qoyar Jayal-un emün-e-eče uytuju yaruyad. e qoyar Jayal

二頭のジャガルの前に迎えてた。「ああ、わしの二頭のジャガル

6: Minu. mendü irebeü geju jarliy bolba: čingiküi-dü.

よ、元気で帰ってきたか」と仰せられた。そうたずねられると

7: Yeke Jayal anu kelebe: Qouqai-yin Furban Čabčiyur-tu

大きいジャガルがいった。「ホーハイン・グルバン・ジャブチュールに

8: Joriysan qoyar Jayal-du ču yayun bile: yučin tümen

行ってきた二頭のジャガルは何ともありませんよ。三十万の

9: Ulus-iyen ejelen sayuysan ejen minu mendü bui-j-a:

国を統率する主君こそご機嫌いかがでしょうか。

10: Köküi Qan-dur joriysan qoyar Jayal-du ču yayun bile:

グクイ・ハン山に行ってきた二頭のジャガルは何ともありませんよ。

11: Küi yeke ulus tümen-iyen ejelen sayuysan Qayan Ejen

偉大な国ぐにを統治するハーン主君

12: Minu qarin ču mendü bui-j-a: Altai Qan-dur joriysan

こそご機嫌よくお過ごしでしょうか。アルタイ・ハン山に行ってきた

21

1: Qoyar Jayal-du ču yayun bile: arban tümen ulus-iyen

二頭のジャガルは何ともありませんよ。十万の国を

2: Ejelen sayuysan qayan minu qarin ču mendü bui-j-a gebe:

支配するハーン（主君）こそご機嫌良くお過ごしでしょうか」といった。

3: Tedüi mendü-yi asayuysan-dur Qayan Ejen bayasju ta qoyar-i

このようにご機嫌を伺うと、ハーン主君は喜んだ。「わしのお前ら二人を

4: Minu kümün unubau geju asayubasu. Bay-a Jayal kelebe:

誰かが乗ったか」とたずねると、小さいジャガルがいった。

5: Qouqai-yin Furban Čabčiyur qola bije: yutultu kümün man-i

ホーハイン・グルバン・ジャブチュールは遠いです。長靴をはいた人間が私たちが

6: Yayakiju unuqu bile: Köküi Qan gegči öndür bije: köl-dü

どうやって乗りましょう。グクイ・ハン山は高いです。脚力の強い¹⁹⁹⁾

7: Kümün man-i yayakiju unuqu bile: Altai Qan gegči öndür bije:

人間が私たちがどうやって乗りましょう。アルタイ・ハン山は高いです。

8: Albatu kümün man-i yayakiju barinam bile:

平民の連中が私たちがどうやって捕まえるのでしょうか。

9: Arban tümen čerig-ün aba-bar ese bariysan man-i

十万人の軍隊の巻狩で捕まらなかった私たちが

10: Alatu kümün yayakiju bariju unuqu bile:

(強い) 股をもつ人間がどうやって捕まえて乗りましょう。

11: Olan yeke aba-bar barin ese boluyad.

多くの勢子にも捕まらなかった (ジャガルを),

12: Oyurčay kümün man-i yayakiju unuqu bile:

盗賊の連中が私たちがどうやって乗りましょう。

22

1: Ebesü bolbasu ereü-ber. usu bolbasu uruyul-iyar adaliqan

草をあごで、水を唇で同じように

2: Iden uuyun atal-a. ken tarayulaysan. ken ese tarayulaysan-i

食べて飲んでいた。誰が肥えて誰が肥えなかったかを

3: Ken medenem geju yoduli qarbum yajar sögürün bayiba:

誰が知っているでしょう」といって、かぶら矢を射った (ほどの) ところに行って誇らかに立っていた。

4: Čingkiyi bayiqu-du Qayan Ejen qoyar Jayal-i minu bari:

そうしているとき、ハーン主君は「わしの二頭のジャガルを捕まえて、

5: Emegel-i minu toqu gebe: tedüi-dü Yeke Jayal kelebe: bida qoyar-i

鞍をつけよ」と仰せられた。そこで、大きいジャガルはいった。「われわれ二人を

6: Bariqu-du yayu bile geju keleged joysuju bayiba: joysuju

捕まえるのは何のためでしょう」といって立っていた。立った

7: Bayiyad bariysan-u qoyin-a Baya Jayal kelebe. Qayan Ejen man-i

まま捕まったあと、小さいジャガルはいった。「ハーン主君が (もし) 私どもを

8: Sanaqul-a naiman jil qurlayad. naiman sar-a qaysay-a: esebesü

思っているならば、八年間休ませて、八ヶ月間節食させて下さい。あるいは

9: Furban jil qurlayad. yurban sar-a qaysay-a gebe:

三年間休ませて、三ヶ月間節食させて下さい」といった。

10: Tedüi Qayan Ejen yeke kenggerge-ben deldjü. yeke tümen ulus-iyän

それからハーン主君は大きな太鼓をたたいて、大きい万戸の属民たちを

11: Quriyaba: bay-a kenggerge-ben deldjü. bay-a tümen ulus-iyän quriyaba

招集した。小さな太鼓をたたいて、小さい万戸の属民たちを集めた。

12: Qola yajar oduysan qoyar Jayal minu irebe: qotala yisün küsel

「遠いところへ行ったわしの二頭のジャガルがもどってきた。わしの九つの望みが

23

1: Minu qanaba. gemen qoyar Jayal-un iregsen-ü uçir-tu noyad yekes-

すべてかなった」といって、二頭のジャガルがもどってきたため、高官や貴族たち

2: Tegen yurban edür yeke qurim talbiba: Yeke Jayal-i seterlejü ungyulaba:

に三日間²⁰⁰大きな祝宴を開いた。(その際)大きいジャガルを神に奉献した。

3: Bay-a Jayal-i edüjü yajarlaba geju Ejen baqan ayurlaysan ajuyu:

小さいジャガルが出奔を企てたといっって、主君は少々怒った。

4: Nayur dalai metü qurim kibe: tedüi Boyda qoyar Jayal-iyän

湖や海のような(大規模な)宴をもよおした。それから聖主は二頭のジャガルを

5: Qayirlaba: naiman jil qurlayulba: naiman sar-a qaysayayad. namur-un

いつくしみ、八年間休ませた。八ヶ月間節食(訓練)させてから、秋の

6: Terigün sar-a-du aba-du mordabal. Altai Qan. Köküi Qan qoyar-tu

最初の月に巻狩に出かけた。アルタイ・ハン山とグクイ・ハン山の両地で

7: Aba talbiba:

巻狩をもよおした。

8: Aryali Uyalja neretü görügesün-i tökügerün yarba:

アルガリとウガールジという名の野獣を倒して通った。

9: Aru öbür ügei aryali uyalja-yi unayaba:

北と南(の別)なくアルガリとウガールジを倒した。

10: Arban tümen kümün yayıqan maytaba:

十万もの人びとが驚き、褒めたたえた。

11: Aliba abaçin-dur yayıqamsiy bolba:

すべての狩人たちに驚嘆された。

12: Açitu ejen-ü qoyar Jayal-un aldar ner-e dayurisba:

恩ある主君の二頭のジャガルの名声は広まった。

24

1: Urida Ejen Boyda nigen keseg oyurçay ulus-i oruyulju abuçui-dur.

以前聖主がひとつの混沌とした国を征服したとき、

2: Külüg sinjigçi Aruytai Tayisi-yin köbegün-i arban tümen aduyu-tu

駿馬の鑑定士アルクタイ・タイシの息子を十万頭のウマをもつ

3: Alaytai Bayan-dur öggügsen ajuyu:

アラクタイ・バヤンにあずけてあった。

4: Ter-e köbegün Alaytai Bayan-u mingyan boru qoni-yi aduyulju

その少年はアラクタイ・バヤンの一千頭の茶褐色のヒツジを放牧

5: Yabutal-a. nigen üdesi Alaytai Bayan mal-iyān uytuju yaruyad:

していた。ある夕方、アラクタイ・バヤンが自分の家畜を迎えて

6: Öciqul-a. qoni aduyuluysan tere köbegün. nigen morin-u qubaqai

行ってみると²⁰¹⁾ ヒツジの番をしていたその少年がひとつのウマの朽ちた、

7: Toluyai-yi te birejü. egün-i ken al jula külüg-ün toluyai genem:

頭蓋骨を抱えて、「これを誰が赤い炎のような駿馬の頭だと分かるだろう。

8: Namai ken Aruytai Tayisi-yin köbegün genem geju ukilaju bayiqu-dur.

誰が僕をアルクタイ・タイシの息子だと分かるだろう」といいながら泣いていた。そこへ

9: Alaytai Bayan tegün-i üjged. çi ende yayu kijü sayunam:

アラクタイ・バヤンが彼をみて、「お前はここで何をしているのだ。

10: Qoni çinu ali yajar bui geju jançiqu-dur. tere köbegün kelebe:

ヒツジはどこだ²⁰²⁾」と行ってたたいた。その少年はいった。

11: Ene qubaqai toluyai al jula külüg-ün toluyai bayinam gebe:

「この朽ちた頭蓋骨は赤い炎のような駿馬の頭です」といった。

12: Urida eçige minu külüg sinjigçi bile: bi egün-i üjged uyilaju sayuba:

(また)「以前、私の父親は駿馬の鑑定士でした。私はこれをみて泣いていたのです²⁰³⁾。

25

1: Qoni minu bayiqu bije geju kelegsēn-dür Alaytai Bayan kelebe:

ヒツジはいますよ」と返事したら、アラクタイ・バヤンはいった。

2: Minu arban tümen aduyun-dur külüg ügei boluyad. ene qubaqai

「わしの十万頭のウマのなかに駿馬がいなく、この朽ちた

3: Toluyai çim-a-du külüg bolbau: çi külüg taniqu bayinam:

頭蓋骨がお前に駿馬となって(みえた)か。お前に駿馬が分かるなら、

4: Manayar erte aduyun-dur minu sinjijü külüg açā gebe:

明日の朝早くわしの馬群を観察し、駿馬を見つけろ²⁰⁴⁾」といった。

5: Manayar erte aduyun-iyān quriyaju ir-e gebe: tedüi aduyu-ban

(少年は)「明日の朝早く馬群を集めてきて下さい」といった。そこで(アラクタイ・バヤンが)馬群を

6: Quriyayad çi sinji gebe:

集めて、「お前がみてみろ」といった。

- 7: Tedüi-dür tere köbegün yurba dakin aduyun-dur oruju
そしてその少年は三回馬群に入って
- 8: Üjeged egün-dür külüg ügei. külüg-ün bayasu bayinam gebe:
みたあと、「この（馬群）に駿馬はいません。駿馬の糞ならあります」といった。
- 9: Tedüi Alaytai Bayan ayurlaju jançiju bayital-a ger-ün qoyin-a nigen
それを聞いたアラクタイ・バヤンは怒って、（少年を）たたいていたら、天幕の北側で一頭の
- 10: Mori inçayaba: tere köbegün namayi büü jança gebe: külüg-ün dayun
ウマがいななきた。その少年は「私をたたかないで」といった。「駿馬のいななきが
- 11: Farunam bisiü geju keleged oçiqul-a. ongyuča qobuyu açiysan
聞こえたでしょう」というので、行って（みると）、水槽と桶を（背中に）のせ、
- 12: Fool dumda tayari-tai yodung segül-tei quluyur alay mori-yi üjeged.
背中に（鞍）きずのある、尾がはげていて、耳の欠けた²⁰⁵⁾まだらのウマがみえた。

26

- 1: Külüg ene mön geju keleged oçiqu-du. Alaytai Bayan basa
「駿馬はこれです」といって近づこうとしたら、アラクタイ・バヤンはまた
- 2: Ayurlaju. minu arban tümen aduyun-dur külüg ügei boluyad.
怒って、「わしの十万頭のウマに駿馬がいなくて、
- 3: Minu ongyuča qobuyu açiysan quluyur alay mori çim-a-du
わしの水槽と桶を乗せる、耳の欠けたまだらのウマがお前には
- 4: Külüg bolbau geju. basa jançiqu-dur köbegün ni ai abuyai
駿馬にみえたか」といってまたもやたたきだした。すると少年は「ああ、おじさん
- 5: Namayi büü jançi: ene alay mori-yi yurban jil qurlayulju mede gebe:
私をたたかないで下さい。このまだらのウマを三年間休ませれば分かります」といった。
- 6: Tegün-ü qoyin-a bi çimadu er-e külüg-i üjegüljü öggüy-e gebe:
（また）「そのあと私はあなたに²⁰⁶⁾本当の駿馬をみせてあげましょう」といった。
- 7: Tedüi Alaytai Bayan tegün-ü üge-ber yurban jil qurlayulba:
その後、アラクタイ・バヤンはその少年のいったとおりに三年間（まだらのウマを）休ませた。
- 8: Ja. ene mori külüg-i nada-du üjegül gemegsen-dür. köbegün ügülerün.
「ではこのウマが駿馬であることをわしに見せろ」というと、少年は答えた。
- 9: Furban dabqur olung. yurban dabqur qudary-a. yurban uyuda siroi.
「三重の腹帯、三重の尻木、三袋の沙と
- 10: Furban uyuda egejegei qurud açi gebe: arban tümen aduyu-ban

三袋のエージギ，ホルートを用意して下さい。十万頭のウマを²⁰⁷⁾

11: Quriyaju bai gebe: yurba ergijü ireküi-dür. tende üjeju bei.

集めてきて下さい」といった。(また)「(馬群を) 三回まわってきたとき，そこでみて下さい」

12: Gejü kelebe: tegün-ü üge-ber Alaytai Bayan cöm tegüsgejü ögbe:

といった。少年のことばどおりにアラクタイ・バヤンはすべてを用意してやった。

27

1: Tere köbegün morin-i ni unuyad arban tümen aduyun-i yurba

その少年は(まだらの)ウマにまたがり，十万頭のウマの周りを三

2: Dakin ergijü üjegend yurban oyuda siroi-yi ergiküi büri-dü

回走った。三袋の沙をまわる度に

3: Nige nige-yi qayalju toyusun-i yaryayad. köbegün ügülerün.

ひとつひとつを壊して，沙ぼこりをたてた。(そこで)少年はいった。

4: Kümün-ü köbegün kögjibe. külüg-ün unay-a degjirebe ged yabuju odba:

「人の子は勝った。駿馬の仔は育った²⁰⁸⁾」といて逃げ去った。

5: Tedüi Alaytai Bayan ary-a-ban olun yadaju. Al Jula Boru

そこで，アラクタイ・バヤンは仕方なく，赤い炎のような茸毛の

6: Morin-iyän unun očju açitu Ejen Boyda minu ayiladun soyurq-a:

ウマに乗って出発した。「恩ある聖主に申し上げます。

7: Er-e bisi erdeni. mori bisi külüg-i aldaba bi. ary-a ügei ejen-

ただの男ではなく，宝である(人材と)，普通のウマではなく駿馬を失いました，私。
仕方なく主君

8: Degen ayiladqan irelüge bi: minu ger-teki nigen olja-yin

にご報告申し上げにきました，私。私の家に一人の捕虜の

9: Köbegün bile: tere qurdun külüg sinjigçi ajuyu: nigen

少年がいました。彼は足の速い駿馬の鑑定士でした。ある

10: Edür mal-iyän emün-e-eçe uytuju yärun üjekül-e. tere

日，家畜を正面から迎いに²⁰⁹⁾出かけてみたら，その

11: Köbegün nige mori-u qubaqai toluyai teberijü ukilan bayiqu-yi bi

少年がひとつのウマの²¹⁰⁾朽ちた頭蓋骨を抱えて泣いていたのを私が

12: Üjegend. çi yayu kijü sayunam. geju asayusän-dur tere kelebe.

みて，《お前は何をしているのか》とたずねたところ，彼はいいました。

28

1: Eçige minu külüg taniyçi bile: ene qubaqai toluyai-yi üjebesü.

《私の父親は駿馬の分かる人でした。この朽ちた頭蓋骨をみて，

2: Al jula külüg-ün toluyai bayinam geju keleküi-dür tegün-i bi

赤い炎のような駿馬の頭だ》と申しましたので、彼に私は

- 3: Arban tümen aduyun-dur minu külüg ügei bayinu üje gebe. tere
《私の十万頭の馬群に駿馬がいるかいないかみてみろ》といいました。その
- 4: Köbegün minu ongyuča qobuyu aciysan alay boru mori-yi minu
少年は私の水槽と桶をのせた、まだらの葦毛馬²¹¹⁾を
- 5: Külüg mön geju kelebe: bida tegün-ü üge-ber yayun-i kelebesü.
駿馬にちがいないと申しました。私たち²¹²⁾は彼のことばを信じて、何といおうと
- 6: Tegün-dür bötügeju ögköl-e. tere köbegün qarın qarın külüg-i
彼に用意してやったら、その少年は何と²¹³⁾私の駿馬に
- 7: Minu unuju yabuba: ejen minu arɣ-a yayu bui ayılad gebe:
乗って逃げてしまいました。主君よ、どうすればよいでしょう」と報告した。
- 8: Tedüi Ejen jarlıy bolba: sungduu sayıqan köbegün minu Bay-a
そこで主君は命令を出された。「わしのスゥンドゥ・サイハン²¹⁴⁾息子は小さい
- 9: Jayal-i unuju ɣurban alda degege bariju morda gebe: çidabasu
ジャガルに乗って、十五尺の鉤つきの槍をもって出発せよ」と仰せられた。「できれば
- 10: Kümün külüg qoyar-i dabqur-ıyar bariju abçir-a: yadabasu
少年と駿馬両方を一緒に捕えてこい。できなかつたら
- 11: Kümün-i bariju abçir-a gemeged sungduu sayıqan köbegün-i mordayulba:
少年（だけ）を捕えてこい」と命令し、スゥンドゥ・サイハン息子を送りだした。
- 12: Tedüi ɣurba qonuy yabuysan külüg-i mön edür güiçeb:
スゥンドゥ・サイハン息子は三日前に逃げた駿馬に一日で追いついた。

29

- 1: ɣurban üy-e degege-ber tataju ese gücü kürbe: köbegün-ü debel-ün
三節²¹⁵⁾の鉤つき槍で引っぱったが、力が及ばなかった。(また)少年の長衣の
- 2: Nigen jaq-a-aça tatabasu abju güçürbe: tedüi qoyayulan sundalaju
片端から引っぱったら、捕えることができた。そこで二人で(小さいジャガルに)乗っ
て
- 3: Qariju yabutal-a. Bay-a Jayal ortusju ükübe: tedüi Ejen Boyda
帰途についたら、小さいジャガルは疲れすぎて死んだ。それを知った聖主は
- 4: ɣumudaju naiman alda mangnuɣ-ıyar tegün-ü yasun-i sayıqan bariba:
悲しみにくれ、(長さ)四十尺のマンスク緞子で小さいジャガル²¹⁶⁾の(遺体を巻いて)
骨をていねいととのえた。
- 5: Tere çay-tur. Aruytai Tayisi örlüge üdesi ügei minu
そのとき、アルクタイ・タイシは朝晩「わしの
- 6: Köbegün oljan-du yabuysan bile: arɣ-a ügei külüg-ün sayın-i
息子は捕虜になっている。幸か不幸か駿馬の真価が

- 7: Taniqu bile. urbaju kejiy-e çü irekü medege ügei geju öndür
分かるのだ。ふたたびいつもどってくるか、何の消息もない」といっては高い²¹⁷⁾ (と
ころに)
- 8: Farju bar-a-yi qaraju yabun atal-a genedde nigen üdesi külüg-ün
登って、(息子の) 遠影²¹⁸⁾ を眺めていたら、突然ある夕方に駿馬の
- 9: Toyusu yarqu-yi üjged. ger-tegen qariju ireged em-e-degen
沙ぼこりがたっているのをみて、天幕に帰ってきて妻に
- 10: Kelebe: oi çü medebeü. ene üdesi öndür deger-e yarju yabun
教えた。「おい、お前知っているか。今夕山の上に登って
- 11: Atal-a. külüg-ün toyusu yarunam bile: külüg-i taniqu kümün
みたら、駿馬の沙ぼこりがたっていた。駿馬を知る人は
- 12: Yerü ügei bile: minu köbegün iregsen bui-j-a: labtayiqan
いないはずだ。わしの息子がもどってきたのだろうか。絶対
- 30
- 1: Minu köbegün mön: tere mön bolqul-a tegün-ü külüg-i güiçekü
わしの息子にちがいない。それが息子だったら、彼の駿馬に追いつく
- 2: Mori ügei: kerbe güiçekü bügesü Qar-a Qaljan mori buyu gemen
ウマはいない。もし追いつくとしたら、頭に白い斑点のある黒馬だろう」といって
- 3: Jiysayan qaysayayad. Temürçi Uran-u ger-tü otuyad. yurban
(黒馬を) 節食訓練させた。(さらに) 鍛冶の匠の天幕に赴き、(長さ) 十五尺
- 4: Alda temür degesü abuyad uytuju bayital-a. kümün ügei külüg
の鉄索を(つくってもらい、それを) もって²¹⁹⁾ 迎えに出たら、人が乗っていない駿
馬が
- 5: Kürjü irebe: eji ebeü. minu köbegün ene külüg-eçe unaqu
走ってきた。「お母さんよ、わしの息子はこの駿馬から落ちる
- 6: Yosü ügei bile: degereki tngri abuyçibau douraki
はずがない。(息子を) 上の蒼天がとったのか(それとも) 下の
- 7: Fajar abubau. geju dab gijü külüg-ün töngkülig-i degege-ber
大地が連れていったのか²²⁰⁾」といっ、さっと駿馬の馬銜の鉄環を鉤つき槍で
- 8: Tatabasu. gücün ese kürüged talbiju. bey-e-ben amaraju.
引っぱったが、力が及ばずに放った。体を休ませ、
- 9: Qoyar üy-e ergiged. gücün ese kürüged talbiju. bey-e-ben amaraju.
二回まわって(また挑戦したが、やはり) 力及ばずに放った。体を休ませ、
- 10: Qoyar ergiged toytayan yadayad talbiju ilegebe:
(さらに) 二回まわっても(駿馬は) 止まらなかったなので、そのまま行かせた。
- 11: Tegün-eçe qoyisida. külüg yadan-a törükü Kitad yajar toytaqu

それ以来、駿馬は余所で生まれ、漢族の地方でとどまる

12: Yosu tegün-eče bolba:

わけはそこからはじまった。

4.4 B 写本：内蒙古図書館所蔵モンゴル国本

Činggis-un qoyar Jayal-un tuyuji orusiba

——チンギスの二頭の駿馬の伝説——

Om sayin amuyulang boltuyai:

1

1: Om suvasti širi. erte urida čay-tur sutu boyda Činggis Qayan-u

ウムスワスティシリ。いにしえのとき英明聖主チンギス・ハーンの

2: Ermeg Čayayči gegün inü ere qoyar Jayal unay-a törügsen ajuyu.

エルメク・チャガークチ（という）牝ウマが雄の二頭のジャガルを生んだ。

3: Tere on-dur arban gegün-e telejü ary-a kijü on-dur oruyulba gele.

その年、十頭の牝ウマに哺乳させるなど工夫して生き延びたという。

4: Ejen-degen day-a aqu-yin čay-dur unuyulju üriyen aqui čay-dur

主君に二才馬のときに乗ってもらい、三才から五才のときに

5: Quaylaju. tere qoyar Jayal-i unuju. Altai Qan-i arulan abalaju

武装した。（主君は）その二頭のジャガルに乗り、アルタイ・ハン山の北で巻狩をし、

2

1: Köküi Qan-i köbcilen abalaju. Yeke Jayal-yi unuju Altai Qan-i

グクイ・ハン山で弓矢で巻狩をした。大きいジャガルに乗ってアルタイ・ハン山で

2: Abalan talbiba. aryali uyulja alaju. ary-a ügei bardaju ireküi-dür

巻狩をした²²¹⁾。アルガリとウガールジを殺し、せっかく意気揚々と凱旋してきたのに、

3: Arban tümen aba-yin kümün nigeken-ber ese yayiqaba, Bay-a Jayal-yi

十万人の勢子たちは誰一人として驚嘆しなかった。小さいジャガルに

4: Unuju Köküi Qan-i köbcilen talbiju küilen köke činu-a-yi gitun

乗ってグクイ・ハン山で弓矢で巻狩をおこない、灰青色の狼を刺し

5: Alaba. ebesün-ü orui-bar örbeljegülün ireküi-dür kedün tümen aba-yin

殺した。草のうえを疾走してきたときに、何万人もの勢子たちは

3

1: Kümün nigeken-ber ese yayiqaba Kentei Qan-i kerün abalan kedün tümen

誰一人として称賛しなかった。ヘンティ・ハン山をまわって巻狩したとき、何万もの

2: Amitan-i güicijü yabuqui-dur ken cü kümün kereglen ese yayiqaba:

野獣に追いついたにもかかわらず、誰も使役するだけで一向に褒めなかった。

3: Onun Qatun-u oi tala-yi abalaju olan amitan-i güičijü oyir-a

オノン河と黄河²²²)の森や平地で巻狩をし、数多くの野獣を捕り、近く(の者も)

4: Qola bügüde-dür adilai bolbaču olan bügüde ese yayiqaba: tere

遠く(の者も)すべての人びとに同じくらい(野獣をとらせた)のに、人びとはまったく感心しなかった。

5: Degere uyaraqu sedkel törüjü. day-a čaytur minu dabtaysan

そこで(二頭の駿馬に)悲しみの念が生じた。「二才馬のときに訓練した

4

1: Bolji üriyen čaytur minu erügsen boluji kijalang čaytur minu kinaysan

ものだ。三才のとき土地を掘ることができて²²³、四才のときに審査を受けた

2: Bolji. soyolang čaytur minu soriysan bolji gemen Bay-a Jayal anu Yeke

ものだ。五才馬のときに試されたものだ」と小さいジャガルが大きい

3: Jayal-dayan kelebe. a abayai minu yabuy-a. Altai Qan-i abalaqui-dur arban

ジャガルにいった。「ああ、お兄さんよ、行きましょう。アルタイ・ハン山で巻狩をしたとき、十

4: Tümen ulus ese medebe. ai qayiran duran minu Köküi Qan-i abalaqui-dur

万人の人びとは知らなかった²²⁴。ああ、何と悔しいことでしょう。グクイ・ハン山で巻狩したとき、

5: Küi olan ulus ese maytaba. Köbčin qayiran sanayan minu Kentei Qan-i

五百戸もの人びとは褒めなかった。何と大きな片思いでしょう。ヘンティ・ハン山で

5

1: Abalaqui-dur kedün tümen ulus ese medegsen qayiran duran minu. ene

巻狩をしたとき、何万もの人びとは誰も知らなかった²²⁵。何と悔しいことでしょう。これ

2: Bugüde-yi meni ülü medekü yayun bolba. a abayai minu yerü yabuy-a

だけの功績を知らないなんて、どういうことでしょう。ああ、お兄さんよ、今行きましょう。

3: Man-u oduysan-u qoyin-a Qan Ejen minu nigen qoyar duradbasu

われわれが行ったあと、ハーン主君が私たちのことを一、二度口にすれば

4: Ner-e-yin aldar bisi buyu. a abayai mini. Altai gegči yajar-a agi

(私たちの)名声もまた広がるでしょう。ああ、お兄さんよ、アルタイ(山)というところには白ヨモギ

5: Šabay ebesü-tei genem ayalan kürčü amurču kebtay-e. abayai minu

や苦ヨモギ(などの)草があるという。旅して行って休んで寝ましょう。お兄さんよ、

6

- 1: **Köküi Qan gegçi yajar-a göbeg şabay ebesün-tei genem kögürüm çögerem**
 グクイ・ハン山というところには、丘ごとに苦ヨモギ（などの）草があるといひます。
 盆地や谷ごとに
- 2: **Nayur-tai genem bile ködelün kürçü kölbereçü bariju kebtey-e. abayai minu**
 湖²²⁶⁾があるといひます。動いて行って寝ころがったりして休みましょ²²⁷⁾う。お兄さんよ、
- 3: **Büri yabuy-a Kentei Qan gegçi yajar-a gem ügei taryu-tai genem kei qui**
 早く行きましょ²²⁷⁾う。ヘンティ・ハン山というところは、外敵もなく豊かだといひます。
 風や竜巻
- 4: **Bolun kürçü keçiyelen kebtey-e abayai minu üdter yabuy-a. Onun**
 になって行って静かに休みましょ²²⁷⁾う。お兄さんよ、すぐに行きましょ²²⁷⁾う。オノン河や
- 5: **Qatun gegçi yajar-a urtu sayıqan usu-tai genem bile. Oi tala**
 黄河というところには長く清らかな流れがあるといひます。森や平地が

7

- 1: **Olan genem üdelen kürçü umtuy-a ügei kebtey-e. abayai minu**
 多いといひます。一緒に着いておちついて休みましょ²²⁷⁾う。お兄さんよ、
- 2: **Büri yabuy-a. a abayai minu. aq-a metü sanayçi Alçul Boru ni**
 早く行きましょ²²⁷⁾う。ああ、お兄さんよ。（自分の）兄貴のように思われているのは若い
 葦毛馬
- 3: **Bui-j-a: köbegün metü sanayçi kögsin sirγ-a ni bui-j-a. küičin**
 でしょう。息子のように思われているのは年老いた白黄色馬でしょう。辛く
- 4: **Sirügün ayasılayçi çi bida qoyar bui-j-a qatun-ıyan metü sanayçi ni**
 荒く使われているのはあなたと私の二人でしょう。自分の妃のように思われているのは
- 5: **Qara Qula ni bui-j-a qari dayisun metü sanayçi abayai çi bida qoyar**
 黒金色馬でしょう。敵のように思われているのはお兄さんと私の二人

8

- 1: **Ni bui-j-a. büri yabuy-a küiten edür barin köndelen köke temür**
 でしょう。今行きましょ²²⁷⁾う。寒い日に捕えられて口いっぱい²²⁸⁾に青ざめた鉄（の馬
 銜）
- 2: **Ümküjü yakiju ay-a. abayai büri yabuy-a qalayun edür barin qatatalan**
 をつけられてどんな目にあつたか²²⁹⁾。お兄さん、すぐ行きましょ²²⁷⁾う。暑い日に捕えら
 れて、干上がるほど
- 3: **Uyan qalayun naran-dur şaran. qayir sirui ümkügülün yakiju ay-a**
 つながれ、灼熱の太陽に照らされて、小石や沙を食べさせられてひどい目にあつた。
- 4: **Abayai büri yabuy-a Bay-a Jayal inu Yeke Jayal-dayan yajar yajarlay-a**

お兄さん、今行きましょう」と、小さいジャガルは大きいジャガルに牧地をかえよう

5: **Gejü kelebe abai boru duyurum minu yayu genem çi ejin gejü**

といった。「ああ、いとしい小駿馬²³⁰⁾よ、何をいうのだ、お前は。主君といえば

9

1: **Ejen-dür adali ejen oldaqu buyu. eke gejü Ermeg Čayayçi eji-dür adali eke**

聖主（チンギス）と同じ主君はいるか。母親といえばエルメク・チャガークチと同じ母親は

2: **Oldaqu buyu. yerü er-e kümün bayarlaqu gejü manglai ülü qayaraqı gele**

いるか。男は喜んで額が割れることはないという。

3: **Ayta morin taryulaju arasun ülü qayaraqı gele abai boru duyurum minu.**

去勢馬は肥えても皮がひび割れることはないという。いとしい小駿馬よ、

4: **Yayu genem çi a abayai minu. sayin kümün-dür nöbür olan bisiü**

何ということをするのだ、お前は。ああ、弟よ、よい人には友人がたくさんいるのではないか。

5: **Sayin morin-dur ejin olan bisiü. ünür kümün-dür nöbür olan bisiü.**

よいウマには主人が多いのではないか。真心をもつ人には友人がたくさんいるのではないか。

10

1: **Önüçin kümün-dür noyan olan bisiü sanay-a-tu kümün-dür sejeg olan**

孤児には領主が多いのではないか。考え深い人には疑うことも多い

2: **Bisiü sayin morin-dur yajar oyir-a bisiü. abayai minu yabuy-a. abai**

ではないか」（と大きいジャガルはいった。それを聞いた小さいジャガルは）「よいウマは目的地に近い（という）ではないか。お兄さん行きましょう」といった。「弟よ、

3: **Boru duyurum minu. ey-e-tei kümün-dür nöbür olan gele üülügsen**

いとしい小駿馬よ、人なつっこい人²³¹⁾には友人が多いという。逃げる²³²⁾

4: **Morin-dur ury-a olan gele ey-e ügei kümün-dür östen olan gele**

ウマにはウマ捕り竿が多いという。気むずかしい人には敵が多いという。

5: **Eçegsen morin-dur dasıyur olan gele. kümün-ü gejü köbçin bügüde-**

疲れたウマには鞭が多い²³³⁾という。（逃げたら）他人のウマだといってすべての人に

11

1: **Deger üldem-j-e: dayisun-i gejü dayayar üldem-j-e jerlig gejü**

追いはられるだろう²³⁴⁾。敵のウマだといってみんなに撃退されるだろう。野生のウマだといって

2: **Jebe-yin üjegür-e unayam-j-a abai boru duyurum minu yayu genem çi**

矢じりの先で倒されるだろう。いとしい小駿馬よ、何をいうのだ、お前は。

3: **Qadan-u ebesü qayda idey-e butan-u ebesü boytai idey-e: ösgen**

石の（あるところの）枯れ草を食べよう。草むらの草はほこりと一緒に食べよう²³⁵⁾。
育てて

- 4: Törügülegsen Öle Buyurul ayai yuyan yayakiju martay-a genem çi ergün
 生ませたウレー・ブーラル父をどうやって忘れようというのだ、お前は。はぐくみ
- 5: Törüggen Ermeg Čayayçi eji yuyan yayakiju martay-a genem çi arban qoyar
 生んだエルメク・チャガークチ母をどうやって忘れようというのだ、お前は。十二ヶ月

12

- 1: Sara niruyu-ban čiletele ergüggen anggir šara uyuray-ıyan kökügülüggen
 月間も背中が疲れるまで背負い、濃厚な黄色い初乳を飲ませ²³⁶⁾、
- 2: Ačitu çayan sün-ıyen kökügülüggen amaray eke yügen yayakiju
 貴重な白い乳を飲ませた、愛する母親をどうやって
- 3: Martay-a genem çi ebei boru duşurum minu yayu genem çi omuy-ıyan
 忘れようというのだ、お前は。いとしい小駿馬よ、何をいうのだ、お前は。血気を
- 4: Daruy-a edüi-dur ayusgin-ıyan čirday-a edüi yayakinam bolbau çi minu
 おさえなさい。怒りを和らげなさい²³⁷⁾。これでどうなるというのだ、お前は。
- 5: Qayırlan qatayalaysan Qan Ejen minu qanılan ösügen qayıran qanı olan
 可愛がって訓練してくれたハーン主君、一緒に遊んで育った多くの友人たち、

13

- 1: Ede böğüde-yi yayakin orkin yajarlay-a genem çi öd ügei ösge
 かれらを残してどうやって逃げようというのだ、お前は。変な心を抱いても²³⁸⁾
- 2: Quriyabası tus ügei gele bayıy-a genem kelebe: sayın kümün-dür
 何の役にもたないという。止めなさい」といった。（しかし）「よい人には
- 3: Nökür olan gele. sayın morin-dur yajar oyır-a gele büri yabuy-a
 友人が多いという。よいウマには目的地に近いという。今行こう」
- 4: Gejü Bay-a Jayal yayçayar yabusu gemen sanaju Yeke Jayal-ıyan
 と、小さいジャガルは一人で行こうと思い、大きいジャガルを
- 5: Orkiju. Ğurban Čabçuyur-un jüg-tür yabuba aq-a minu
 残して、グルバン・ジャブチュールの方向へ行った。「兄さんは

14

- 1: Nekekü bolbau gemen sanaju türgeñ jayur-a-ban altan ulıyasun-u
 追ってくるだろう」と思って、途中にある金色のポプラの
- 2: Següder-tür küliyejü bayın atala: dörben jüg-tür inü dörben
 陰で（大きいジャガルを）待っていた。四方八方から四
- 3: Öngge-yin sibayun nıgen egesig-ıyer dongyudba: Bay-a Jayal çikin-ıyen
 色の鳥たちが一斉にさえずりだした。小さいジャガルは耳を
- 4: Serteyijü segül-ıyen ergüjü çingnan bayıba Altan Ğuryuldaı sibayun

そばだて尾をさかだてて聞いていた。金色の雉が

5: Altan uliyasun-u deger-e sayun jirgebe: aq-a degüü qoyar Jayal

金色のポプラのうえにとまってさえずった。「兄弟二人して、二頭のジャガルが

15

1: Salun yajarlaba geju jirgebe dakin ayilyulan jirgebe Köküge

離れて逃げた」とくりかえしもったいぶった口調でさえずった。(また) ホトトギス

2: Neretü sibayun dongyudba kögerüki Bay-a Jayal urban yajarlaba geju

という鳥がさえずった。「かわいそうな小さい²³⁹⁾ ジャガルが離反して牧地をかえた」と

3: Jirgebe Boyšačay-a sibayun bosud jirgebe: Boyda Ejen-ü qayiran

さえずった。(今度は) スズメ²⁴⁰⁾ が飛びたってさえずった。「聖主のいとしい

4: Qoyar Jayal salun yajarlaba geju jirgebe Qayiryun-a sibayun

二頭のジャガルが離れて牧地をかえた」とさえずった。ハイルグナという鳥が

5: Qadan-u deger-e sayun jirgebe. Qan Ejen-ü qayiran qoyar Jayal qayucün

石のうえにとまってさえずった。「ハーン主君のいとしい二頭のジャガルが(主君に背いて)

16

1: ʒajarlaba geju jirgebe. tere dörben öngge-yin sibayun-u dayun-i

牧地をかえた」とさえずった。それらの四色の鳥たちの鳴き声を

2: Sonusuyad Bay-a Jayal tesül ügei yabuba türgen türgen yabuqui-dur

聞いて、小さいジャガル²⁴¹⁾ は我慢できなくなって去っていった。急いで急いで行くときは

3: Tüngerčeg-ün činegen čilayun ködelgeju aryar aryar yabuqui-dur

陰のうぐらいの石を蹴とばし、ゆっくりゆっくり行くときは

4: Ayay-a-yin činegen čilayun ködelgeju ʒurban Čabčiyur-i jorisu

お椀ほどの石を動かして、グルバン・ジャプチュールを目指した。(しばらくして)

5: Abayai minu nekekü bolbau gemen sanaju Köke Öndür-ün öbür-tür

「お兄さんは追ってくるだろう」と思ってギョク・ウンドゥル(山)の南で

17

1: Ebesü tatalju bayiba. Yeke Jayal anu örlüge naran-dur nekejü

草を(一口二口)食べて待っていた。大きいジャガルは朝太陽が昇るときに出発し、

2: Üd-ün naran-dür qamar-ıyan qabčiju qara kölösün-ıyen asqaraju ami-ban

正午の(暑い)太陽の下で鼻をひくひくさせながら、汗びっしょりになって、命を

3: Temečijü güiçijü irebe. a boru duyurum minu kümün geju köbcin

かけて追いついてきた。「ああ、いとしい小駿馬よ、他人のウマだといってみんなに

4: Üldejü dayin geju dayayar kögeküi jerleg geju jebe-yin üjegür-e

追いかけられたり、敵のウマだといって全員に追いはられる²⁴²⁾ものだ。野生のウマだといって矢じりの先で

5: Unayaqu bui-j-a geju Yeke Jayal anu Bay-a-dayan kelebe. qoyar Jayal-un

倒されるだろう」と、大きいジャガルは小さい（ジャガル）にいった。二頭のジャガルが

18

1: Oduysan-u qoyin-a nigen söni sutu Boyda Ejen jegüdün jügüdülbe

逃げさったあと、ある晩英明聖主は夢をみた。

2: Erketü tngri eçige-eçe jayay-a-tai Ermeg Čayayçi gegün-eçe törügsen er-e

「偉大な父なる天から運命により、牝ウマのエルメク・チャガークチから生まれた雄の

3: Qoyar Jayal minu neyilün yajarlaba genem be boyda erketü tngri-eçe jayay-a-tai

二頭のジャガルがつれだつて²⁴³⁾ 牧地をかえたという。聖なる天よりおいつくしみによつて

4: Buyan-tu Čayayçi-a gegün-eçe törügsen bayuralta ügei qayiran qoyar Jayal minu

幸ある牝ウマのチャガークチから生まれた、欠点のないとしい二頭のジャガルが

5: Buruyulan yajarlaba genem qan erketü tngri-eçe jayay-a-tai qas Čayayçi

離れて牧地をかえたという。天帝より運命により、玉の如き牝ウマのチャガークチ

19

1: Gegün-eçe törügsen qayiran qoyar Jayal minu yarun yajarlaba genem be

から生まれた、いとしい二頭のジャガルが出ていって牧地をかえたという。

2: Qajayar-ıyan egüldüreju yabuyan yabunam geju jegüdülebe bi ene jegüdün

馬銜を肩にかけて²⁴⁴⁾ 歩いているとの夢をみた、私は。この夢は

3: Minu ünen buyu qudal buyu geju sibegçin-e jarliy bolba aduyun-dur

本当なのかうそなのか（確かめなさい）」と女官に仰せられた。（また）「馬群に

4: Oruju üje qudal bolbasu dayun ügei ir-e ünen bolbasu dörben qari

入つてみなさい。うそだったら声を出さないで（静かに）もどきなさい。本当だつたらわしの四夷

5: Yisün öngge-yin ulus-i minu çuyalayulju ire gemen jarliy bolba boyul

九色の国ぐにを招集してこい」と命令が下された。侍臣

20

1: Beçin aduyun-dur orubasu Öle Buyurul ajary-a anu örbüljin

ベチンが馬群に入つてみると、種雄馬のウレー・ブーラルがさびし

2: Sörbüljin eyin teyin qaraju ungyulduju bayiqu aji. Ermeg Čayayçi gegün

そうにあちらこちらをみながら、いなないていた。牝ウマのエルメク・チャガークチ

3: Eke inü eyin teyin qaraju nidün-eçe nilbusun yaryaju bayiqu-yi üjebe

母は、あちらこちらをみながら、眼から涙を流していたのをみた。

4: Boyul Bečin yayaraju dörben qari yisün öngge-yin manayar erte

侍臣ベチンは慌てて四夷九色の（国ぐに²⁴⁵）を朝早く

5: Čuyalayulju irebe sutu Boyda Alčul Boru morin-iyän unuju altan

招集してきた。英明聖主は若い茸毛馬にまたがり、黄金の

21

1: Quyr abču jel čayan nimuban dürüjü Aryasun quyrčü-yi küdejü

胡琴²⁴⁶をもち、羽のついた白い矢を（矢筒に）挿し、アルガスン・ホールチ²⁴⁷を先鋒

2: Gejü alčün qarčayai yuyan bariju eke-degen ergikü bolbau gemen sanaju

とし、隼や鷹²⁴⁸を腕にのせて、母親をみたらもどってくるのではないかと思い、

3: Ermeg Čayayči gegün-i kötülebe. tedüi morilan yabuqui-dayan qayan

牝ウマのエルメク・チャガークチを連れていった。一同が出発していくときにハーン

4: Noyan sutu Boyda jarliy bolba Köküi Qan-u öbür-iyer čubuy-a

主君、英明聖主は命令を出された。「グクイ・ハン山の南を流れるように通ろう。

5: Altai Qan-i aru-bar abalay-a. odu-yin kümün urid yabu takilčuur-un

アルタイ・ハン山の北で巻狩をおこなおう。先鋒の勢子は先に進め、両翼²⁴⁹の

22

1: Kümün tasural ügei yabu tere qoyar Jayal-i minu ken güičegsen kümün

勢子はすきまをあけずに行け。わしの二頭のジャガルに誰が追いつこうと、

2: Büü qarbu bariju üje bariysan kümün-dür dörben qosiyu mal-iyän

射ってはならない。捕えてみよう。捕えた者には四種の家畜から（それぞれ）

3: Tegsiken qubiyacu bi gemen jarliy bolba tedüi qoyar Jayal qoyidu nekegsen

同じ数を分けあたえよう」と仰せられた。そこで二頭のジャガルは後ろを追ってきた

4: Aba-yin baray-a-yi qaraju üjeged Yeke Jayal anu Bay-a Jayal-dayan

勢子たちの遠影をみて、大きいジャガルは小さいジャガルに

5: Kelebe. duyurum minu. bi ese kelebeü. kümün-ü geju köbcin üldekü

いった。「小駿馬よ、私いったではないか。《他人のウマ²⁵⁰だといって大勢に追いか
けられる

23

1: Bui-j-a jerlig geju jebe-yin üjegür-e unayaqu bui-j-a geju ese kelelü bi

ものでしょう。野生のウマだといって、矢じりの先で倒されるでしょう》といったで
はないか、私は。

2: Ene bisüü gebe Bay-a Jayal anu kelebe. a abayai minu er-e

ほら、そのとおりになったではないか」といった。（今度は）小さいジャガルがいった。

「ああ、お兄さん、男

3: Kümün kelegsän üge-degen kürekü bisüü ayta morin joriysan yajar-tayan

はいったことを実行するものでしょう。雄ウマは目指すところまで

4: Kürekü bisiü yabuy-a yayakiysan em-e metü oqurqan sanay-a-tai bile çi

走るものでしょう。行きましょう。どうして女みたいに考え方が狭いのでしょうか。お兄さんは。

5: Mani güiçekü morin-aça bolqu barayan-i mani qaraqı buyu gebe Altai Qan-u

われわれに追いつくウマがいますか、われわれの遠影をすら眺められない」といった。
「アルタイ・ハン山の

24

1: Aru oruqu-dur aryalı uyalja-yi alayulun bayuy-a Köküi Qan-i öberlen

北に入るときは、アルガリとウガールジを殺して行こう。グクイ・ハン山の南を

2: Yabuqui-dur köke alay buyu-yi giskilen yaruy-a töb-ün kümün-dür

通るときは、青まだらの鹿を踏みつぶして行きましょう。中央の勢子には

3: Toyusun-ıyan üjegdey-e büri Ğurban Ćabçiyur-i joriy-a gebe

沙ぼこりをみせてやりましょう。今からグルバン・ジャプチュールを目指しましょう」といった。

4: Yeke Jayal yirügen-ıyen ködelbe Bay-a Jayal şoysin ködelbe Bay-a

大きいジャガルは急いで走りだした。小さいジャガルはゆっくり歩きだした²⁵¹。小さい

5: Jayal Yeke Jayal-dayan kelebe. abayai minu aq-a metü sanayçi Alçul

ジャガルは大きいジャガルにいった。「お兄さん、(自分の) 兄貴のように思われている若い

25

1: Boru morin yayakinam bolba geju kelebe tedüi degere bariysan ügei

茸毛馬に何ができよう」といった。二頭のジャガルは追手に捕まることなく、

2: Ğurban Ćabçiyur yajar-i jorin güibe. Yeke Jayal anu qoyar sanayan-i

グルバン・ジャプチュールを目指して走った²⁵²。大きいジャガル (の頭のなかには) 二つの思い

3: Sanaju. qayıran Qan Ejen minu. qayıran qan Ćayayçin eke minu.

があった。なんと懐かしいハーン主君、なんと懐かしい母チャガークチ²⁵³よ、

4: Geju nidün-eçe nilbusun yaryaju örü örü elige-ben ömüreju:

と思い、眼から涙を流し、心が痛み、深く悲しみながら

5: Ebüdüg-ıyen sögüdju yabuba sutu Boyda Ejen inü Köke Öndür

ひざまずいて歩いた²⁵⁴。英明聖主は、ギョク・ウンドゥル山の

26

1: Degere yarju barayan-i inu qaraju sinalun uyarabai. Bolduy-un Boru

うえに登り、(二頭のジャガルの) 遠影を眺めているうちに悲しくなった。ボルドゥク

ン・ボロ・

2: Toluyai-dur yarju Qayan Ejin anu Qayilaba. er-e-yin sayin-iyar ejin

トロガイ山に登り、ハーン主君は涙ぐんだ。「男として秀でてハーンに

3: Ese boluluy-a bi. erketü tngri ečige-yin jayayan-iyar ejin boluluy-a bi.

なったのではないのだ、私は。父なる上天の運命によってハーンになったのだ、私は。

4: Čayačcin gegün-eče törügßen qayiran er-e qoyar Jayal minu neyilün yajarlabau čï

牝ウマのチャガークチン²⁵⁵⁾から生まれた、二頭のいとしい雄のジャガルがつれだつて牧地をかえた。お前ら。

5: Ebei minu emegel-iyen bariju yayakin qariy-a: ergijü irekü bolbau čï

朕はどうやって鞍をもってかえろ。また帰ってくるだろうか、お前らは。

27

1: Ebei minu buliyan abju ejin ese boluluy-a bi boyda tngri ečige-yin

朕は戦いに勝ってハーンになったわけではない。聖なる上天の

2: Jayayan-iyar ejin boluluy-a bi buyan-tu Čayačcin gegün-eče törügßen

運命によってハーンになったのだ、私は。幸ある牝ウマのチャガークチンから生まれた

3: Qayiran er-e qoyar Jayal minu buruyulan yajarlabau čï ebei minu qayiralan

いとしい、雄の二頭のジャガルが（朕を）離れて逃げたのか、お前ら。朕は誰かの恩恵

4: Abču ejin ese boluluy-a bi qayan tngri ečige-yin qayir-a-bar ejen

を受けてハーンになったわけではない。父なる天帝のおいつくしみによってハーンに

5: Boluluy-a bi qas Čayačcin gegün-eče törügßen qayiran qoyar Jayal minu

なったのだ。玉の如き牝ウマのチャガークチンから生まれた、いとしい二頭の雄のジャガルが

28

1: Qayačan yajarlabau čï ebei minu qariju irekü bolbau čï ebei minu

離れて牧地をかえたのか、お前らは。帰ってくるのだろうか、お前らは。朕は、

2: Učir-tai yeke urulduyan bolqu-du yayun-iyar qaysayay-a učir-tu yeke

わけあって大演習をおこなうとき、どのウマを訓練しよう。わけあって大規模な

3: Aba-ban bolqu-du yayun-iyar unuy-a. qayiran qoyar Jayal minu qari olan

卷狩²⁵⁶⁾になったとき、どのウマに乗ろう。なんと惜しい二頭のジャガル。大勢の

4: Dayisun bolqu-du yayun-iyar quyaylay-a. qayiran qoyar Jayal minu gemeged tedüi

敵が襲ってきたとき、どのウマに乗って戦おう。なんと惜しい二頭のジャガルだ」といった。その後

5: Sutu Boyda Ejen ordu qarši-dur-iyar qariju irebe qoyar Jayal Furban

英明聖主は宮帳にもどっていった。二頭のジャガルはグルバン・

29

- 1: Čabčiyur-dur jorin kürjü dörben on nutuylaba Bay-a Jayal anu arasu-ban
ジャプチュールに着いて、四年間住んだ。小さいジャガルは皮が
- 2: Ijartala taryulba Yeke Jayal anu jun jusayasan morin metü qatayirduyad ebül
ひび割れるほど肥った。大きいジャガルは夏も肥らずに²⁵⁷⁾ やせこけた。冬に
- 3: Bolqui-dur yačar-dur inu ayay-a-yin činegen mösün körübe oi yasiyun-dur
なると、顔にはお椀ほどの氷ができた。(大きいジャガルが苦しんでいるのをみて) 記憶がよみがえり、
- 4: Uyaraq sedgel-yi inü medeged Bay-a Jayal anu asayuba. a abayai minu
悲しみの念が生じた小さいジャガルは聞いた。「ああ、お兄さんよ、
- 5: Ebesün-i ereü-ber idedeg atala. usun uruyul-iyar uuyun atala abayai
草をあごでかんで、水を²⁵⁸⁾ 唇で飲んでいたので、お兄さんが

30

- 1: Arasu-tai sirbüsü-tei qataqu činu yayun bui gemen asayuba Yeke Jayal
皮も筋もやせるのはなぜですか」と聞いた。大きいジャガルは
- 2: Kelebe abai boru duyurum minu yayun geju ülü medenem či qayiralan
いった。「いとしい小駿馬よ、なぜなのか知らないのか、お前は。可愛がられて
- 3: Ösgeksen Qan Ejen-iyen qanilan učiraysan qayiran nököd-iyen qayiran törügšen
育てたハーン主君を、親しく遊んだ多くの友人たちを、大事に生んで育てた
- 4: Eke yügen sanaqula. qayirtu yajardur turγuban qomuyultu yajar-dur
母親を思いたすと、なれた土地でも足を(踏み入れることができず) 馬糞のあるところでも
- 5: Ereü-ben kürgeju yadaba ösün törügšen eke yügen sanaqula ebesün-dür
あごをつけることができない²⁵⁹⁾。生んで育ててくれた母親を思いたすと、草には

31

- 1: Ereü-ben usun-a uruyul-iyen kürgeju yadaba abai boru duyurum minu
あごを、水には唇をつけることができない。いとしい小駿馬よ、
- 2: Yayakiju ülü medenem či abai minu gebe tere čay-dur Bay-a Jayal anu
どうして知らないのか、お前は。私の弟よ」といった。そのとき小さいジャガルは
- 3: Jöb qaraju iniyen buruyu qaraju uyilan Yeke Jayal-tayan kelebe a abayai
顔で笑い、心では泣いて大きいジャガルにいった。「ああ、お兄さん
- 4: Minu arasu sirbüsü-tei činu qatayan alaju arasun-i činu emüsmü bi
よ、皮も筋もやせてしまって。あなたを殺して皮を着よう、
- 5: Miqan-i činu idemü açitu abayai minu odu qariy-a gemen kelebe Yeke Jayal
肉を食べよう、私。恩あるお兄さんよ、そろそろ帰ろう」といった。大きいジャガルは

32

- 1: Γurba dakin silgeged nigen qoyar ebesün tatalan bayiba yirügen-iyen Yeke
三回身震いをし、一口二口草をちぎって食べていた。さっそく大きい
- 2: Jayal ködelbe Bay-a Jayal ködelbe γurban sarayin γajar γurban γurba
ジャガルは走りだした。小さいジャガルも動きだした²⁶⁰。「三ヶ月の行程を九
- 3: Qonuy-dur kürüy-e gebe. tere qoyar Jayal-un kürjü irekü-yin söni düli-dür
泊で着こう」と（小さいジャガルが）いった。二頭のジャガルが帰ってきた日の夜遅く
- 4: Sutu Boyda Ejen inü nigen jegüdün jegüdülebe. erketü tngri eçige-eçe
英明聖主はあるひとつの夢をみた。「父なる上天より
- 5: Jayay-a-tai Ermeg Čayayčün gegün-eçe törügsen er-e qoyar Jayal minu neyilün
運命によって、牝ウマのエルメク・チャガークチンから生まれた、雄の二頭のジャガルがつれだって

33

- 1: Γajarlaju bile ergijü irekü bolbau emegel-iyen toquju bayinam geju
出奔したのだ。もう帰ってきていて、鞍をつけているという
- 2: Jegüdelebe bi gebe ene jegüdün minu ünün buyu qudal buyu.
夢をみた、私は。この夢は本当からそか、
- 3: Boyul Bečün-i aduyun-dur oruju üje geju. Qayan Ejin sutu
侍臣ベチンが馬群に入ってみなさい」と仰せられた。英明
- 4: Boyda-yin jarliy-iyar aduyun-dur orubasu qoyar Jayal qariju
聖主の命令にしたがって馬群に入ってみると、二頭のジャガルは
- 5: Iregsen ajuγu. Öle Buyurul ajary-a anu üürsen bayiju egüride
帰ってきていた。種雄のウレー・ブーラルは低くいなき、「もう永遠に

34

- 1: Qayačaba geju bile bi. edüge edür irebesü de gemen bayarlan bayiju
別れたかと思っていた、私は。今日帰ってきたのか²⁶¹」とうれしそうに
- 2: Ebsiyen bayiba. Ermeg Čayayčün gegün eke inü qoyar nidün-eçe
あくびをしていた。牝ウマのエルメク・チャガークチン母が、両の眼から
- 3: Nilbusun γaryaju uyilan bayarlaju bayiqu-yi üjebe er-e qoyar Jayal anu
涙を流して泣いているのがみえた。二頭の雄のジャガルが
- 4: Eke yügen ende tende-eçe inü qaraju bayiqu-yi üjebe boyul
母親のあちらこちらをみて眺めているのもみえた。侍臣
- 5: Bečün üjeced qoyar Jayal-yi barin gebe qoyar Jayal ese bariydaba
ベチンはそれをみて、二頭のジャガルを捕えようとしたが、二頭のジャガルは捕まらなかった。

35

- 1: Qoyar Jayal irejü Öle Buyurul ajary-a-tai abču irebe gejü
「二頭のジャガルは帰ってきていた。種雄のウレー・ブーラルと一緒に追ってきた」と
- 2: Qayan Ejin sutu Boyda-dur ayiladqaba. sutu Boyda Qayan Ejin inü
英明聖主のハーンに報告した。英明聖主は
- 3: Nigen qančui-ban türgen emüsün yarba a qoyar Jayal minu. mendü buyu
片方の袖に急いで手を通しながら（天幕を）出た。「ああ、わしの二頭のジャガルは無事
- 4: Da gebe Bay-a Jayal anu on tusum-a-yin tedüi yajar-a bayiju
か」とたずねた。小さいジャガルは矢が飛んだ²⁶²⁾ほどのところに立って
- 5: Kelebe Furban Čabčiyur joriysan qoyin-a qoyar Jayal-dur yayu bui
いった。「グルバン・ジャプチュールに行ったあとの二頭のジャガルは何ともありませんよ。

36

- 1: Ƙučin tümen ulus-yi ejilen sayuysan Qayan Ejin minu qarın mendü buyu
三十万の国を統率するハーン主君こそご機嫌いかがでしょう
- 2: Da Altai Qan-i joriysan aliy-a mayu qoyar Jayal -dur yayu bile arban
か。アルタイ・ハン山に行ってきた、たちの悪い二頭のジャガルは何ともないですよ。
十
- 3: Tümen ulus-yi ejilen sayuysan Qayan Ejin minu qarın mendü buyu či
万の国を支配するハーン主君こそご機嫌いかがでしょうか²⁶³⁾。
- 4: Köküi Qan-i joriysan kögerken ayali-tu qoyar Jayal-dur yayu bile
グクイ・ハンに行ってきた、浮かれた性格をもつ二頭のジャガルは何ともないですよ。
- 5: Küi olan ulus-i ejilen sayuysan Qayan Ejin minu qarın mendü buyu či
多くの国ぐにを統治するハーン主君こそご機嫌いかがでしょうか」

37

- 1: Gebe sutu Boyda jarliy bolju a qoyar Jayal minu da yayun-u tula
といった。英明聖主は（また）仰せられた。「ああ、二頭のジャガルよ、何のために
- 2: Yambar uçir-tai yajarlaba da gejü asayuba Yeke Jayal dayun ese
どう理由で牧地をかえたのか」と聞いた。大きいジャガルはだまって
- 3: Farba Bay-a anu sutu Boyda Ejin-dür-iyen kelebe a Qayan Ejin minu
いた。小さい（ジャガル²⁶⁴⁾は英明聖主にいった。「ああ、ハーン主君よ
- 4: Qoyar Jayal-i qayiralaqu bolusi day-a čaydur minu dabtaqu bile da
二頭のジャガルを可愛がるならば、二才馬のときには訓練し、
- 5: Üriy-e čay-tu minu erin sanaqu bile da kijalang čay-tur minu kınan
三才馬のときに捜し求め²⁶⁵⁾、四才馬のときには乗って評価²⁶⁶⁾

38

1: Unuqu bile da soyulang çay-tur sorin unuqu bile da Altai

すべきでしょう。五才馬のときには演習で乗るべきでしょう。アルタイ・

2: Qan-i abalaqui çay-tur aryali uyalja-yi güiçen alaba arban tümen

ハン山で巻狩をしたとき、アルガリやウガールジに追いついて殺した。(しかし) 十万もの

3: Aba-yin kümün ülü medebe Köküi Qan-i köbçilen abalaqui çaytu

勢子たちは誰も知らなかった²⁶⁷⁾。グクイ・ハン山で弓矢で巻狩をしたとき、

4: Küilen köke çinu-a-yi güiçin alaba kedün tümen kümün çinu ülü

灰青色の狼に追いついて殺したのに、何万もの人びとは誰も

5: Medebe Kenti Qan-i kerün abalaqui çaydur kedün tümen kümün çinu

知らなかった。ヘンティ・ハン山をまわって巻狩したとき、何万もの人びとは誰も

39

1: Ese maytaba. Onun Qatun-u oi tala-yi abalaqui-dur oyir-a qola

褒めなかった。オノン河と黄河の森や平地で巻狩したとき、遠くも近くも

2: Adali bolbaçu olan tümen çinu ese maytaba teyimü-eçe tulada

同じだと思って(走ったあとも)、誰ひとりとして褒めなかった。そうしたことから²⁶⁸⁾

3: Fajarlaba bida ayimay sibayun dongyudula kümün-ü köbegün yajar-tayan

牧地をかえたのだ、われわれは。群がる鳥たちはさえずった。人の子は《住めば

4: Sayuba külüg-ün köbegün yajar-iyän sanaba Qayan Ejün sutu boyda

都》という。駿馬の仔は生まれ故郷を思うものだ。ああ、聖なるハーン主君

5: Minu gebe tengkeküi-dür Yeke Jayal kelebe boru duyurum bayiy-a

よ」といった。そうしたところで、(今度は) 大きいジャガルがいった。「いとしい小駿馬よ、つつしみなさい」

40

1: Gebe Qayan Ejün minü namayi unu gebe tere üge-yi jöbsiyejü Bay-a

といい、「ハーン主君よ、私に乗って下さい」と申し入れた。(ハーン主君は) 彼らのことばにしたがい、小さい

2: Jayal anu naiman jil qurlaba naiman jil qaysayaba. namur-un terigün saradu

ジャガルを八年間休ませ、八年間節食訓練させた。秋の最初の月に

3: Aba-dur morday-a geju. aba mordan Altai Qan-i arulan abalaba

巻狩に出かけようと、一斉に出発した。アルタイ・ハン山の北で巻狩をおこない、

4: Arban tümen kümün maytan yayiqaba Köküi Qan-i köbçilen abalaba

十万もの勢子たちは褒めたたえた。グクイ・ハン山で弓矢で巻狩をおこない、

5: Kedün olan amitan-i güiçin alaba keleküi aba-yin kümün yayiqan

何種類もの動物に追いつき殺した。語りあっていた狩人たちは驚き、

41

- 1: Maytaba Kenti Qan-i kerün abalaba kedün olan amitan-i güičen
褒めたたえた。ヘンティ・ハン山をまわって巻狩をおこない、何種類もの動物に追いつき、
- 2: Alaba keleküi aba-yin kümün yayıqan maytaba Onun Qatun mören-ü
殺した。語る狩人たちは驚嘆し、褒めたたえた。オノン河と黄河の
- 3: Oi tala-yi abalaba olan tümen amitan-i gitun kemjiy-e ügei
森や平地で巻狩をおこない、無数の獣を刺し²⁶⁹⁾殺した。限りなく
- 4: Ğayıqan maytaba qoyar Jayal-un sanay-a sedkel inü amurqan jiryaba
褒めたたえられた。二頭のジャガルの気持ちも（これによって）おちついた。
- 5: Sutu Boyda Ćinggis Qayan Bay-a Jayal-dur gkib tataju seterlebe
英明聖主チンギス・ハーンは小さいジャガルに鮮やかな絹布を飾り、神に奉納した

42

- 1: Gele gkib tataqu-yin yosun Bay-a Jayal-ača bolba gele Ejin
という。(ウマに) 絹布を飾って(神に奉納する) しきたりは小さいジャガルからはじまったものだ。聖
- 2: Boyda Ćinggis Qayan-u er-e qoyar Jayal-un tuyuji tegüsbe:
主チンギス・ハーンの雄の二頭のジャガルの伝説は終わった。
- 3: △Mongyol ulus-un sudur biçig-ün küriyeleng-eče olan-a ergügdegsen-ü
モンゴル国の史籍研究所から共戴
- 4: Arban qoyar on-dur: nige mingyan tabun jayun qubi-yi keblegülün
十二年に。一千五百部を出版させ
- 5: Ğaryabai neyislel küriyen-deki Orus Mongyol-un keblel-un yajar-a darumallabai
た。首都クレーにあるロシア・モンゴル出版社から印刷された。
- 6: ün-e 90 mönggü:
定価90圓²⁷⁰⁾。

5 叙事詩の物語の成立および「ウルトゥイン・ドー長い歌」との関係

叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」は、以前から研究者たちに注目されてきた。叙事詩が成立した年代およびその思想など、内モンゴルではいまだに論争の的となっている。今までの諸学説には、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」を「聖主の二頭の駿馬」という「ウルトゥイン・ドー長い歌」と比較した研究はほとんどなかった。本章では従来の論点を検討したうえで、私自身の仮説をうちだしたい。

5.1 叙事詩の物語の成立

叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の物語の成立年代について議論した研究者たちはほとんど例外なく、年代記と関連づけている。年代記との接点は、叙事詩の後半にみられる駿馬の鑑定士アルクタイ・タイシ (Aruytai Tayisi) という人物名である。研究者たちはこの人名を年代記に登場する、14世紀末から15世紀前半にかけて活躍する、モンゴルのアルクタイ・タイシと結びつけている。そのため、ここでまず年代記が描くアルクタイ・タイシの人物像を整理する必要がある。

5.1.1 年代記が語るもの

モンゴルには数多くの年代記がある。ここではオルドス・モンゴルのサガン・セチェン・ホン・タイジが17世紀に書きあげた『蒙古源流』を基本資料とし²⁷¹⁾、アルクタイ・タイシに関する記述を要約する。

ときは14世紀末。モンゴルは万里の長城以南の中原から撤退し、モンゴル高原にもどっていた北元時代。政治権力の中枢には依然としてチンギス・ハーンの直系子孫たちがいたとはいえ、往時の雄図大略は面影もなく、ひたすら権力闘争にあけくれる日々であった。

そうしたなかで、エルベクという人物がハーン位に即いたのは1393年のことであった。巻狩をしていた冬のある日、エルベク・ハーンはけがを負わせたウサギの血が雪のうえに散っているのをみた。白銀と鮮血のコントラストを目にしたハーンは、「雪の如き白く、血の如き赤い顔の美人はいるか」と周囲にたずねた。近くにいたオイラト部のホーハイ・ダユ (Qouqai Dayu) は、「ハーンの弟の夫人はまさにそのような美人です」と進言した。エルベク・ハーンはさっそくホーハイ・ダユを弟のところへ派遣し、その容姿を一目みたいと要求した。

弟の夫人は「天と地がまじわる理はない。ハーンが弟の嫁をみる理はない」といって、断る²⁷²⁾。それでもエルベク・ハーンはあきらめられず、弟を殺し、その夫人を奪った。

その後、ホーハイ・ダユはハーンに会いにくるが、留守であった。宮帳の外でハーンの帰りを待っていたところ、殺された弟の嫁で今やハーン妃となった夫人から宮帳に入るようにと誘われた。ホーハイ・ダユを迎え入れた妃は、「低い身分を高くしてくれた恩人だ」といって、強い酒を勧め、ホーハイ・ダユはついに酔った。妃はホーハイ・ダユを宮帳内に寝かせたあと、自らの顔を傷つけ、髪を乱してからハーンをよ

んだ。ホーハイ・ダユは妃に無礼をはたらいた罪で殺された。

しばらくしてエルベク・ハーンはホーハイ・ダユを誤殺したことに気づいた。ハーンは懐柔政策としてホーハイ・ダユの息子バトラ (Batula) に自分の娘セムル公主 (Semür Günji) をやり、チンサン (čingsang 丞相) の称号を与え、オイラト部を統率させた。

ホーハイ・ダユはもともとオイラト部のウケチ・ハスハ (Ükeçi Qasq-a) の部下であった。そのため、ウケチ・ハスハはホーハイ・ダユの息子バトラを自分の「属民」(qaraču) とよんでいた。バトラがエルベク・ハーンによってチンサン (丞相) に任命されたことに、ウケチ・ハスハが喜ぶはずがなかった。ウケチ・ハスハは、ハーンが弟の夫人を奪うという不義をはたらいたとの理由で、エルベク・ハーンを殺した。1399年のことであった。オイラト部の勢力はますます助長してきた。

長い背景説明になったが、いよいよ問題のアルクタイ・タイシが登場する。

おそらくオイラト部がモンゴルを攻略していたこの時期であろう、バトラ・チンサンはひとりの少年を捕虜にしていた。モンゴルのアスト部 (Asud) のウクテレク (Ögtelegü) である。バトラ・チンサンは少年にアルク (Aruy, かご, 写真5) を背負わせ、牛糞を拾わせるなどして酷使した。そのため少年の本名は忘れられ、いつのまにかアルクタイ (かごもち) とよばれるようになった。

バトラ・チンサンもまもなく領主ウケチ・ハスハによって殺される。年代記に記録

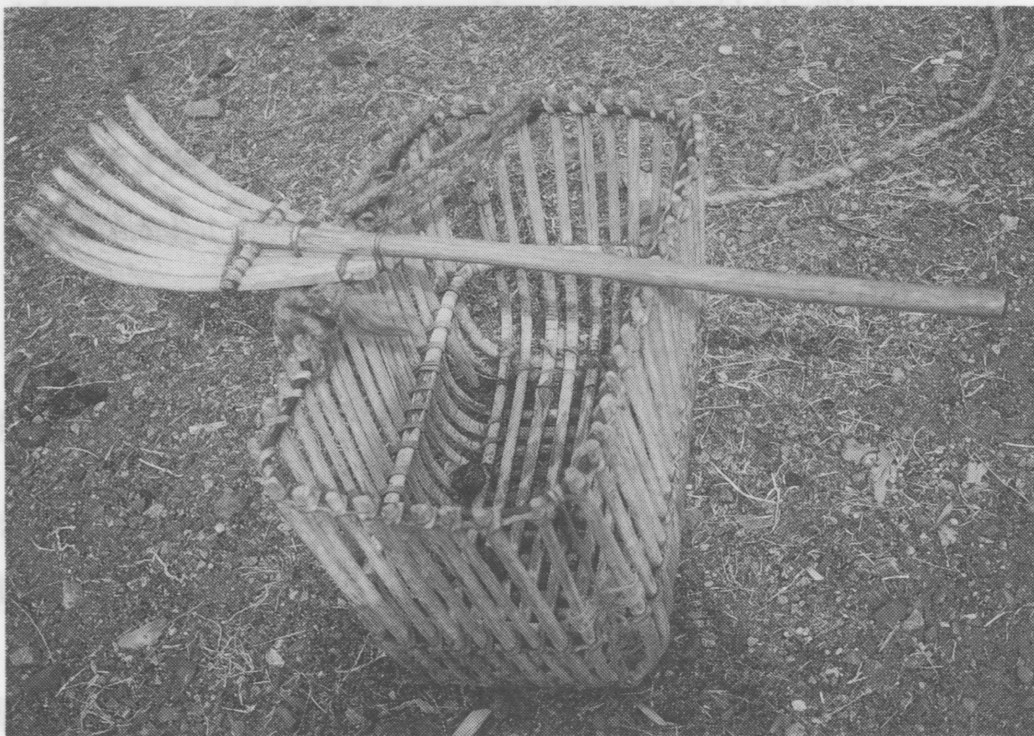


写真5 牛糞拾いに使用する籠アルク

はないが、アルクタイ少年ももちろんウケチ・ハスハの属民となる。ある日オイラト部が集会 (čiyulyan) を開き、大事を協議した。集会のあと帰りいく人びとをみて、アルクタイ少年は「集会で何を話したのか」とたずねたが、牛糞拾いの少年を誰も相手にしなかった。「かごのなかの牛糞を火に入れることになった。かごもちの少年をタイシ (太師) にすることになった」 (aruytai aryal-yi yal ergükü bolba, aruytai köbegün-i tayiši bolyaqa bolba) といってあざけり笑った。かごのなかの牛糞は火に燃やされる運命である。かごもちの少年もタイシなんかになれやしない、という皮肉である。しかし、少年はこれを聞いてかごを肩から降ろし、「今のは天の命令だ、あなたたちのいったことばではない」といって天に拜んだ。

ウケチ・ハスハが死んだあとその息子が権力を握り、バトラ・チンサンの夫人であったセムル公主をめとる。アルクタイはひきつづき酷使されていたが、のちにセムル公主の力でオイラト部を離れ、モンゴルに帰還する。

かごもちの少年アルクタイはその後、1410年にモンゴルのアダイ・ハーンのもとでタイシ (太師) に任命され、天命が実現する。さっそくオイラト征服に着手し、戦いの後、バトラ・チンサンの息子を捕虜にした。

アルクタイ・タイシは以前バトラ・チンサンに酷使されていたことを思いだし、バトラ・チンサンの息子を鍋 (toyan)²⁷³⁾ の下に入れて抑留し、ヒツジの番をさせた。そのため、バトラ・チンサンの息子はトカンとよばれるようになった²⁷⁴⁾。

トカンはその後オイラト部に送り返される。『ロ・アルタン・トプチ』には、オイラト部に帰還したトカンがモンゴルのことを「種雄ウマのいない馬群、雄ヒツジのいないヒツジ群」と表現したとある (Čoyiji 1983: 566)。オイラト部の首領となったトカンはモンゴルとの戦いをはじめた。

以上、年代記に登場するアルクタイ・タイシについて述べてきた。つぎにアルクタイ・タイシをヒントに、叙事詩の物語の成立年代を推定する諸説を検討する。

5.1.2 物語の成立年代

テキストで示したように、オルドス地域を中心に伝承されている「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」という叙事詩は、二つの物語からなっている。それを仮に「二頭の駿馬の物語」(qoyar jayal-un üliġer) と「アルクタイ・タイシの息子の物語」(Aruytai Tayisi-yin köbegün-ü üliġer) と命名する。第4章で呈示したオルドスからの二つのテキストでは次のような構成である。

二頭の駿馬の物語：OO本 1・a・1～14・b・3; QB本 1・1～23・12.

アルクタイ・タイシの息子の物語：OO本 14・b・3～20・a・4;

QB本 24・1～30・12.

二つの物語のなかで、前半の「二頭の駿馬の物語」にはチンギス・ハーンと侍臣メチン以外に人名はない。後半の「アルクタイ・タイシの息子の物語」には、聖主の他にアルクタイ・タイシ夫妻、アルタイ・バヤン（またはアラクタイ・バヤン）、人質の少年らが登場する。前後二つの物語を通してみれば、チンギス・ハーンと侍臣メチンを除いて唯一アルクタイ・タイシという人名が年代記にみられる。

早くも1958年に、内モンゴルのエルデニトクトホは次のような推論をうちだしている。「アルクタイ・タイシの息子の物語」は、『ロ・アルタン・トプチ』にあるモンゴルのアダイ・ハーンらがオイラト部を討ち、バトラ・チンサンを殺し、その息子をアルクタイ・タイシのヒツジの番人にしたとい記述をあらわしているかもしれないという（Erdenitoqtu 1958: 47）。エルデニトクトホは、叙事詩の前半の物語は13世紀後半の作品で、後半の物語は北元時代のアダイ・ハーンのとくに形成されたであろうと示唆している（Erdenitoqtu 1958: 47-48）。その後ナラソンらは、叙事詩は13～14世紀の作品であろうと主張している（Narasun & Öljeibayar 1986: 178-295）。

叙事詩「チンギス・ハーンのと頭の駿馬」を詳しく分析し、その成立年代について興味深い仮説を展開しているのはケシクトクトホである。

ケシクトクトホはまずダムディンスレンの『モンゴル文学珠玉百篇』にある二つのテキストを、「ハルハ本」と「オールドス本」に分類している。いわゆる「ハルハ本」とはすでに1.1で触れたように、1916年にモンゴル国外務省から出版されたものである。「オールドス本」とは、ジャムツァラーノやエルデニトクトホらが収集、発表したものである（Kesigtoqtu 1988: 282-283）。

両者のなかで「ハルハ本」の方がより古く、おそらくモンゴル・ハーン国が成立した1206年から1368年に元王朝が中原から撤退するまでのあいだにできた作品であろう、とケシクトクトホはみている。その証拠として作品中のモンゴル・ハーン国の社会的雰囲気あげている。具体的には三つの要素を強調している。

第一に、大ハーンなどの強大な権力者の存在である。「五色四夷」の国ぐにを配下においたチンギス・ハーンを照射しているのではないか。

第二に、無数の軍隊で大規模な巻狩をおこなうなど、モンゴル・ハーン国初期の軍事、社会制度が反映されている。

第三に、仏教の影響がないこと。一部の写本に *om suvastai siri* ということばがあるが、抄写がくりかえされたときに加えられたにすぎない。チンギス・ハーンの夢判断、山頂での拝天儀礼、家畜を聖別するなど、叙事詩全体としてシャマニズムの色彩がきわめて濃厚である (Kesigtoytaqu 1988: 283-285)。

仏教の影響がないことから16世紀以前と推定し、そのうえでハーン国の社会的側面を考えあわせて、年代を特定している。

ケシクトクトホは、「オルドス本」は北元時代に「ハルハ本」に手を加えたりうえて、再創作されたものであると主張している。それを以下二つの面で確認できるという。

まず、言語表現と物語の展開での創作が考えられる。「ハルハ本」では小さいジャガルが出奔したとき、四方から四色の鳥たちが飛びたってさえずる。その際、「離れて牧地をかえた」、「離反して牧地をかえた」のように表現し、小さいジャガルの出奔を悲しんでいる。ところが「オルドス本」ではわけもなく「南の地方」を絶賛し、「北の地方」をけなしている。それによって小さいジャガルは北から南へ出奔したことを暗示している。つづく「アルクタイ・タイシの息子の物語」の最後では、駿馬は「南の土地」すなわち「漢族の土地」で誕生するようになったと表現し、「南の土地」が「漢族の土地」であることがはっきりしてくる。このような展開は北元と明朝の闘争を反映しているにちがいない、という (Kesigtoytaqu 1988: 285-287)。私はこの意見には賛成できない。「オルドス本」でも鳥たちは「訳もなく北をけなしている」のではなく、むしろ先に逃げだした小さいジャガルを戒めているのではないか。オルドス・モンゴル人は二頭のジャガルは南から北へ出奔したとみている。

次に、新たに「アルクタイ・タイシの息子の物語」がつけ加えられたという。「アルクタイ・タイシの息子の物語」は展開方法や特色などあらゆる方面から北元時代の作品であることが明らかであるという。登場人物のひとりアルクタイ・タイシを歴史上のアルクタイ・タイシと断定できる根拠はないが、北元時代の歴史を彷彿させる。つまり後半の「アルクタイ・タイシの息子の物語」の「聖主」(*ejen boyda*)は北元時代のあるハーンを指し、トカン・タイシ、エセン・ハーンのころの東西モンゴルの内紛を描いたものである。物語はアルクタイ・タイシが少年時代にかごを背負って牛糞を拾わされていたこと、トカン・タイシが捕虜だった少年のころにヒツジの放牧を強制されていたことを織りこんだ作品であるという (Kesigtoytaqu 1988: 288-291)。

以上、主としてケシクトクトホの学説を紹介したが、ここでその問題点を指摘しておきたい。

「ハルハ本」が存在するか否かは大きな問題である。1.1でも述べたように、1916

年にモンゴル国外務省から出版されたテキストの原本は、どこから収集されたかは不明である。仮にその原本をハルハ・モンゴル部の居住地域から収集したとしても、ハルハ・モンゴル部において実際どの程度伝承されていたかを検証しないかぎり、安易に「ハルハ本」と命名することはできないのではないか。ハルハ地域と対照的に、写本と口頭の両方によるオルドス地域での伝承はなみなみならぬものがある。チンギス・ハーン祭祀を数百年にわたって維持し、日常生活のなかで常にチンギス・ハーンを身近な存在としてみているオルドス・モンゴル人。叙事詩の創作者がオルドス・モンゴルであることは何の疑いもない。

叙事詩後半の「アルクタイ・タインの息子の物語」は、北元時代に成立した、との説に私は賛成である。ただし、ケンクトクトホがいう後半の物語にある「聖主」は北元時代のあるハーンを指しているだろう、との主張には異議を唱えたい。『蒙古源流』などの年代記では、北元時代のチンギス・ハーンの子孫は、みな「主の前でハーンの位に即いた」(ejen-ü emün-e-eče qan orun-a sayuju) とある²⁷⁵⁾。北元時代でも、「主」(ejen)、「聖主」といえば、依然としてチンギス・ハーンあるいはチンギス・ハーンの祭殿「八白宮」(naiman čayan ordun) を指していることは、明らかである。

伝承者は北元時代の史実の一部を、叙事詩に織りこんだときも、それを聖主チンギス・ハーンに結びつけた。5.1.1で示したエルベク・ハーンのように、自分の弟の夫人を奪うなど、「天理」に反する行為でモンゴルを混乱させた諸ハーンへの失望が、往時の英明聖主への憧憬を一層引きだたてたのではなかろうか。

5.2 帰る駿馬と帰らぬ駿馬——叙事詩の二つの物語の関連性——

以上、叙事詩の物語の成立年代について、年代記と結びつけた説を検討してきた。叙事詩の物語には年代記の歴史が反映されている。しかし、物語は歴史そのものではない。年代記の「史実」を超えたモチーフが抽出され、物語は成立する。物語で語りつがれるべき「真実」とは何であろう。言い換えれば、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」は何を訴えようとしているのか。なぜ今だに人びとに愛されているのであろうか。

オルドスのナラソンらは、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」は、二頭のジャガルを通してチンギス・ハーンを称賛しようとしたものであるという。二頭のジャガルを心をこめて育てたにもかかわらず、小さいジャガルは不平不満をいって逃げだす。それでもチンギス・ハーンは怒ることなく、ずっと駿馬のことを心配していた。出奔先から帰ってきたあと、チンギス・ハーンの厚い愛情にこたえようと、小さいジャガ

ルは尊い命を捧げた (Narasun & Öljeibayar 1986: 208)。

ナラソンらはさらにオルドス地域にあるチンギス・ハーンの祭殿「八白宮」と関連づけて、次のように指摘している。「八白宮」のひとつに「手綱の白宮」(jiloyu-yin çayan ordun) がある。「手綱の白宮」はチンギス・ハーンが使用したとされる鞍を保存し、御神体として二頭の淡黄色馬 (siry-a) を代々転生させ、維持してきた。祭祀のときにはチンギス・ハーンの鞍をつけ、人びとの参拝をうける。したがって、モンゴル人にとってウマはただの友人ではなく、国家の象徴 (belge temdeg) でもある。叙事詩はチンギス・ハーンとその功臣らを称え、統一モンゴルの強固を謳歌したものであるという (Narasun & Öljeibayar 1986: 209)。

ツェレンソドナムは、「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」は動物を主人公とする叙事詩のたぐいに入るといふ。チンギス・ハーンの名前が登場するのは、モンゴル帝国の崩壊後、ふたたびチンギス・ハーンの名を借りて、再統一を促そうとしたからである (Čeringsodnam 1989: 414-418)。

ケシクトクトホは、叙事詩に登場する二頭の駿馬のモチーフは、チンギス・ハーンの二人の弟、ハサルとベルグーダイではないかと推測している。ハサルはモンゴル諸部の統一と、ハーン国の建立に大きく貢献したが、さまざまな原因で一時チンギス・ハーンと別れたこともある。一方、ベルグーダイは誠心誠意、生涯チンギス・ハーンから離れることはなかった。小さいジャガルはハサルを、大きいジャガルはベルグーダイをそれぞれあらわしているのではないか (Kesigtoytaqu 1988: 304-311)。

上に述べた従来の学説はどちらかというところ、叙事詩の二つの物語を分けて別個に論じる傾向が強かったのではないか。叙事詩が二つの物語から成っている以上、両者に共通する主題があるはずである。

5.2.1 二頭の駿馬の物語

物語の前半、すなわち「二頭の駿馬の物語」において、大きいジャガルと小さいジャガルのどちらを主人公とみなすかも、興味深い問題である²⁷⁶⁾。ケシクトクトホらは、叙事詩は小さいジャガルの反抗精神を賛美するものではなく、大きいジャガルの協調精神を美德とするものであると理解している (Kesigtoytaqu 1988: 296-297; 301-302)。

私は叙事詩を分析する際、「聖主の二頭の駿馬」という「長い歌」を十分考慮しなければならないと思う。詳しくは次節にゆずるが、「聖主の二頭の駿馬」は叙事詩の普遍化された形態、すなわち叙事詩の大衆版である。この大衆版のモチーフこそ、よ

り多くの人びとに真実として受けとめられているからである。

「長い歌」としての「聖主の二頭の駿馬」では、「聖主の二頭の駿馬（に）、小さいジャガルがいたのだ」（Ejen boyda-yin qoyar jayal, Bay-a jayal bayijai sai.）とくりかえす（3.1参照）。ここでのモンゴル語の bayijai sai は、願望に近い表現である。歌は小さいジャガルに対して、「いてほしい」と強く訴えている。ウラト地域でうたわれている「アルタイとハンガイは山々の高いところ」においても、「聖主の二頭のジャガル（に）、小さいジャガルがいて（長く）とどまる」（Ejen Boyda-yin qoyar jayal, Bay-a jayal bayiju toytan-a.）とある。ここでも同じく、小さいジャガルに「長くとどまってほしい」と切望している。小さいジャガルが主人公であることはまちがいない。離反、出奔そして帰還。モンゴル社会における統合の論理と統合への希求が叙事詩に貫かれている。

5.2.2 アルクタイ・タイシの息子の物語

物語の後半、すなわち「アルクタイ・タイシの息子の物語」は、後代の付加である、という諸先学の指摘は正しいと思う。前半の「二頭の駿馬の物語」と後半の「アルクタイ・タイシの息子の物語」の共通点は何であろうか。

前半と後半二つの物語に共通してみられるのは、駿馬の出奔である。

ただのウマではなく、駿馬が漢族の土地に逃げていってしまう。せつかくもどってきた小さいジャガルを死なせてしまう。おまけにそれ以降、駿馬はもっぱら漢族の土地で生まれるようになる。これらはいわば「悪い兆候」、決しておこってはならないことである。ケシクトクトホもこれらの点に注目し、叙事詩はモンゴル族同士の内紛を戒め、一致団結を呼びかける作品であると主張している（Kesigtoytaqu 1988: 296-297, 301-302）。同じ駿馬の出奔でも前半の物語では帰還しているのに対し、後半ではむしろ帰らぬ駿馬になっている。不帰の駿馬には宝のような人材が乗っている。駿馬の出奔はそのまま人材の流出でもある。人材流出への警告こそ、後半の物語の中心的な内容である。

5.3 叙事詩の物語と「長い歌」との関係

叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」は二つの物語からなり、それぞれ完成度の高い作品である。「長い歌」としての「聖主の二頭の駿馬」は、内容的には叙事詩の前半の物語と呼応している。叙事詩と「長い歌」との対応関係は何を意味しているのであろう。

現在、オルドス地域では叙事詩を語れる人は少なくなった。「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」をはじめ、かつては多くの叙事詩が語り手たちによって伝承されていたが、今や写本の形で維持されているといえよう。一方、「聖主の二頭の駿馬」という「長い歌」は、今日でも依然として人びとに愛され、オルドス・モンゴル社会に根づいている。ではなぜ、語り手による叙事詩の口頭伝承の方がおとろえ、「長い歌」のみが存続しつづけているのだろうか。

叙事詩にはさまざまな語り方がある（蓮見 1993: 35-36）。リズムやメロディをともなうことが多い。楽器を用いて伴奏したり、語り手が豊かな表情をつくったりするなど、そもそも語り手はスペシャリストである。特殊な技能をもつ語り手たちが健在していたころ、叙事詩はかれらを通じて大衆社会に伝わっていた。

叙事詩の語り手がスペシャリストであるのに対し、「長い歌」は一般人でもうたえる人は多い。「聖主の二頭の駿馬」という「長い歌」は、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の物語の前半と呼応している。3.1で示したように「長い歌」としての「聖主の二頭の駿馬」には二頭の駿馬を称賛するくだりと、出奔先から急いでチンギス・ハーンのもとへ帰るなど、叙事詩のなかのもっとも感動的な部分を中心となっている。この点からみれば、叙事詩の物語のモチーフを一般人にも広く伝承する方法として、「長い歌」が流布していることになる。言い換えれば、「聖主の二頭の駿馬」という「長い歌」は、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」の普遍化された形態である。

多くの人びとが今なお「聖主の二頭の駿馬」をうたうことができる。そのため、叙事詩「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」は、オルドス・モンゴル族のあいだで定着している。語り手が叙事詩を語るという伝統は失われつつあるが、二頭の駿馬の物語が途絶えることにはならない。

オルドス地域以外では、アラジャンやウラトからモンゴル高原の南西部にかけて、叙事詩はまた「ジュールゲネのある丘陵」という「長い歌」の形で伝承されている。「長い歌」としての変形は多々ある。「長い歌」として普遍化されることは、決して画一化を意味するのではない。

5.4 駿馬には鞍きずがある——物語の再生産——

帰らぬ駿馬に大事な人材である少年が跨って出奔してしまふ。物語は一見悲劇的に終わっているようだが、実はこのような結末にはもっと深い意味が含まれている。

ここで今一度、人質の少年が発見した駿馬に焦点をあててみよう。

金持ちの馬群のなかに埋没していた駿馬について、叙事詩は次のように描いている。

OO 本 (16-a・3~4) :

水槽と桶を(背中に)のせ、両肩のまんなかに(鞍)きずのある、ゆがんだ尾の、可憐なまだらのウマ。

BQ 本 (25・11~12) :

水槽と桶を(背中に)のせ、背中に(鞍)きずのある、尾がはげていて、耳の欠けたウマ。

実にみすばらしいウマである。外見は平凡でもいざ発掘され、訓練したあとはなみなみならぬ才能を発揮する。叙事詩でこのように描かれているウマのモチーフは、13世紀の『モンゴル秘史』にもみられる。

『モンゴル秘史』の第23, 24節ではボドンチャルという人物が一族に見捨てられたあと、「死ぬなら死のう、生きるなら生きよう」と出かける。その際、「背にきずのある、短い尾」(yool tayaritu yoduli segültü)のウマに乗っていた(Eldengtei & Ardajab 1986: 39-40)。ボドンチャルのこのようにないでたちに注目したのは、蓮見治雄である。

蓮見は次のように述べている。「背に鞍きずのある、短い尾」のウマに乗っているのは、ただの人物ではなく、チンギス・ハーンの先祖である。普通の戦士ならいざ知らず、大英雄の誉れ高い祖先にしてはふさわしからぬウマではあるまいか、とみずからの率直な感想をあらわしている(蓮見 1993: 187-189)。

『モンゴル秘史』の表現について、口承文芸の立場で分析した蓮見はさらに指摘する。モンゴルの叙事詩の英雄も駿馬も、表面的な美しさによって判断されるのではなく、内面に秘めた実力によって評価されるという、モンゴル人の普遍的な思考パターンが代弁されているという(蓮見 1993: 194)。

叙事詩と『モンゴル秘史』、両者に共通しているのは、その口伝的要素である。「チンギス・ハーンの子の物語」のなかで、後代の付加と思われる「アルクタイ・タイシの息子の物語」にも、13世紀ころのモチーフが確認できる。「鞍きずのある、尾の短い」ウマに乗ったボドンチャルの登場によって、モンゴルの歴史ははじまった。「アルクタイ・タイシの息子の物語」において、「鞍きずのある」駿馬に乗って逃走した少年はその後どうなったのであろう。誰もが案じる少年と駿馬の次なる物語。物語はさらなる展開を残しているのである。

謝 辞

貴重な写本資料を提供したオーノス氏、ガタギン・ハスウーラ（葛玉山）氏は本論文執筆の機会を与えてくださった。内モンゴル図書館で調査をおこなった際、モンゴル語資料室のアユール（Ayur）主任、セチェンビリク（Sečenbilig）先生、玉海氏をはじめ、多くの方々にお世話になった。北京の民族文化宮図書館の方々にも助けていただいた。

本論文に目を通していただき、ご指導をいただいた国立民族学博物館の松原正毅先生、小長谷有紀先生に篤くお礼を申し上げる。適切な助言をいただいた匿名の査読者の先生方にも感謝の意を表したい。

注

- 1) 近年出版されたアルタ編の『〈チンギス・ハーンの二頭の駿馬〉に関する研究』（“*Činggis-un er-e qoyar jayal-un tuyuji*”-yin sudulul）のなかに、エルデニトクトホの1958年の論文が再録されている（Alta 1992: 15-27）。アルタの編著には1957年から1981年まで『内蒙古日報』（モンゴル語版）をはじめ、およそ9種類の新聞や雑誌に掲載された長短さまざまな論文を収めている。内モンゴルにおいて「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」をめぐる流れをうかがいしることができよう。
- 2) 人民政府初期には学校の読本として採用され、1937年に編集されたのち、中学校の教科書に登場した（Čeringsodnam 1989: 412-413）。
- 3) モスタールト師のいうオルドス南部とはウーシン旗とオトク旗を指す。
- 4) 叙事詞は1935年にソノムらによってロシア語に訳されているが（Čeringsodnam 1989: 413）、私はロシア語訳をみる機会を得ていない。
- 5) 褐色の湾曲地帯との意味、オルドスの別称である。
- 6) ブケとはモンゴル相撲の力士を意味する。チンギス・ハーンの弟ベルグーダイをモンゴル人はブケ・ベルグーダイとよぶ。
- 7) モンゴル文字の書写形態およびその名称については、内蒙古大学蒙古語文研究室編『蒙漢辞典』（1976: 1528）、『モンゴル語基礎文法』と『続モンゴル語基礎文法』（フフバートル 1993; 1997）を参照した。
- 8) モンゴル国のある老人によると、当時の90圓はおよそヒツジ一頭の値段であったという。
- 9) 庫倫、現在のウランバートル。
- 10) *ürgükü*: もっぱらウマなど家畜に対してのみ用いる動詞。急な出来事にウマがびっくりする。モンゴル人は元気が良く、体力のあるウマだけがいろんなことに機敏に反応するとみている。ここでは、二頭の駿馬の生き生きとした姿を描くのに使われている。
- 11) *silgegekü*: 動詞。（家畜や動物が）身震いをする。ウマの場合、長旅のあと放たれて身震いしたら、健康的とみられる。また汗を拭かれたあとにも身震いをする。ここでは主君への忠誠の態度のあらわれである。
- 12) あまりにも体力があり、ちょっとした動きにも敏感に反応することの比喩。
- 13) ウマはよく沙のある柔らかいところで寝転ぶ。これによって疲れが消えるとみられている。
- 14) 磯野富士子の訳した『オルドス口碑集』にも「馬についての歌」として収録されている（モスタールト 1993: 176-177）。上に紹介した歌とは歌詞が異なる箇所もあるが、構造は同じである。
- 15) 近年、内モンゴルの各部族（盟）間の通婚は頻繁におこなわれるようになった。他の地域に比べてオルドス・モンゴルとアラジャン・モンゴルとの通婚は多い。
- 16) 「アルタイとハンガイは山々の高いところ、去勢馬は天の賜物」、この2行の詩はアラジャ

ンの他の歌にも出てくる。たとえば「昇る太陽の日射」(Manduju yarqu naran-u gerel) という歌や、上述とは別の「アルタイ・ハンガイ」などにも確認できる (Bayatur 他 1988: 218-220, 240-242)。

- 17) 近年、ウラト出身の若い研究者とオルドスの研究者とのあいだで、詩や民歌の創作者をめぐる論争が活発化している。こうした議論は新聞や雑誌を通して、多くの牧民にも伝わっている。学問好きなモンゴル人のあいだで、このような論争は当分止みそうにない。
- 18) *toytaqu*: とどまる, おちつく。モンゴルには *mal toytaqu* (家畜がおちつく) といういい方がある。水草豊かな、風避けのできる草原に家畜がおちついて長くとどまることを指す。また世のなかが平和であることを比喩することもある。
- 19) ジェールゲネ: *Jegergen-e*: 一種の薬草で、枯れるまで家畜が食べないほどにおいが強い。漢語で麻黄という。『生物詞典』ではその学名を *Ephedra sinica* としている (Jigmiddorji 他 1994: 666-667)。内蒙古自治区オルドス西部, アラジャン地域に群生する。近年その値段が急上昇したため、人工栽培も増えてきている。
- 20) ウマをつないで節食訓練 (*soyiqu*) するとき、風の強い谷間や峡谷で長時間つなぐことは避ける。
- 21) モンゴル人はかつてチンギス・ハーンの直系子孫たちタイジの属民であった。「某タイジに属していた」という表現は、身分証明の意味もあった。タイジが殺されたり、爵位が剝奪されたりして、領主を失った者、あるいは領主から逃げた者は、「主君のない者」とみられ差別を受け、生計をたてるのが難しくなる。現在「主君のない者」という表現は悪罵になっている。
- 22) モンゴル国南部のダリガンガ地域は、昔から駿馬の産地として有名である。1997年8月にダリガンガを訪れたとき、現地では地元の詩人が最近作詞作曲した「チンギス・ハーンの二頭の駿馬」という歌がはやっていた。私はその歌を聞くことはできなかったが、いかにも駿馬の故郷にふさわしいエピソードである。
- 23) オーノスという親族集団については楊 (1996a: 667-679) を参照されたい。オーノスという人物については、私は別の研究で述べたことがある (楊 1998: 47-48)。
- 24) *ejen* とは「主君」で、*boyda* は「神聖」との意味である。*boyda ejen* ともいう。以下本稿では「聖主」と統一する。また、オルドス・モンゴル語口語では *ejin* と発音する。
- 25) *törükü*: 「生まれる」との意であるが、普通は人間に対してのみ使用する。仔ウマが生まれることを指す場合、*unayalaqu* という。*unaya* は仔ウマの意である。
- 26) *gen-e*: という。動詞 *gekü* に由来し、伝聞を表す。OO 本にこの *gen-e* が多出するのは、物語 (*üliger*) の特徴といえよう。ハイシツヒが公表したモスタールトのテキストとは、*gen-e* (*gel-e*) の使う箇所が若干異なっている。
- 27) *Teleljü kökügülün*: 動物や家畜は基本的に自分の仔にしか授乳しない。仔が生まれたあと母乳が不足したり、実母が死んだりしたら、人間の介入で実母以外の母畜に哺乳させる。この行為を *Telekü* という。*kökügülekü* とは「授乳する」との意味である。
- 28) *ondarayaqu*: *on-du oruyulqu* から転じた動詞。*on* は年、*oruyulqu* は「入れる、入らせる」の意味で、「満一年たつようにする」とは、弱い仔畜でも一年たてばなんとか生きのびるということを指す。ハイシツヒが公表したモスタールトのテキストでは *on-dur oruyulba* となっている (Heissig 1976: 524)。
- 29) *örge*: 宮帳のことである。ただし、その規模は同じく宮帳を指すオルド *ordu* より小さい。モンゴル人は天幕を固定させる縄にウマをつなぐこともある。
- 30) ハイシツヒが公表したモスタールトのテキストでは *Kökegcin* となっている (Heissig 1976: 524)。
- 31) アルガリはメスの野生ヒツジで、ウガールジはそのオスのことである。アルガリはまた、野生ヒツジ全般を指す固有名詞としても使われる。
- 32) *tökügerkü*: 「やる」、「殺す」という意味の動詞。
- 33) *taryumal dobučuy*: 丸々と太った、太りすぎたとの意味である。どちらかという、マイナスのイメージが強い。チンギス・ハーン祭祀の指針書『金書』には、*Dobučay taryun-i unun yabuju* とある (Rintchen 1959b: 64; 楊 1998: 101)。
- 34) ここに *ab-a* という字の一部が紙の破損で欠けている。
- 35) *qoyar* の前に、*ene* (これ、この) ということが紙の破損で欠けている。
- 36) *uyaraq sedkel*: 感動, 感傷, 感無量, 悲しみとの意。

- 37) uyilalčiba という文字が2つあり、誤写であろう。「泣く」を意味することばは、ウイラホ (uyilaqu) とオキラホ (ukilaqu) の2つがあるが、オルドス・モンゴル族は日常のなかでウイラホをよく使う。
- 38) abayai: これはおそらく兄貴を意味する abuyai の誤写であろう。口語では abuyai の発音は、abayai に聞こえる。子音 b のあとの母音は軽く発音されるからである。
- 39) Alan bulan: alan とは alaqu (殺す), bulan とは bulaqu (埋める) の変化形で、alan bulan は「殺して埋める」、「いじめる」との意である。
- 40) ここでは抄写者がまず bayin-a と抄写してしまい、いったん bayinam とあらためて書いているが、結局その下に新しく bayinam-a と書きたしている。
- 41) ハイシツヒが公表したモスタールトのテキストでは、emegen ene metü sanayçi となっている (Heissig 1976: 525)。
- 42) Eng-ün metü sanayçi: eng-ün metü とは「普通のように」との意味である。
- 43) ハイシツヒの公表したモスタールトのテキストでは、yatun-ıyan metü sanayçi となっている (Heissig 1976: 525)。
- 44) bayinam bišüü と書くはずであったが、まちがって bišüü bayinam となっている。
- 45) ʒal Julian Boru mori: ʒal とは「火」、Jula は「灯明」の意である。ここでは「ウマの毛色が火や炎のよう」と理解すると同時に、ウマの性格や足の速さを表現しているともとらえることもできよう。
- 46) 写本では最初の asančilayçi の墨跡がうすくなっている。
- 47) abai: オルドス中部のジュンワン旗・ジャサク旗 (現エジンホロー旗), ウーシン旗西部, オトク旗南部では、父を abai と呼ぶ。一方, オトク旗北東部, ウーシン旗北東部, ハンギン旗では、兄を意味する。この地理的な使いわけは写本の抄写者と関係があるかもしれない。
- 48) 磯野富士子は agi を白ヨモギ, šabay をニガヨモギとしており (モスタールト 1993: 16), ここではそれにしたがう。agi はウマの好物で、オルドス民歌に「白ヨモギのある丘は、馬群の放牧地」(agitu toluyai. aduyu mal-un belčiger) とある。šabay をウマはあまり食べない。šabay の利用については楊 (1996b: 56-65) を参照されたい。
- 49) eber: これは山陽, 南を意味する öbür の誤写である。eber は「角」の意味である。
- 50) ここでは köbten という単語がひとつ多い。あるいは後続の büri がなければ、köbten köbten köke ebesütei と表現できよう。
- 51) köke ebesü: 緑の草。草が青々としている様子を köke と表現する。オルドスでは、芦を köke ebesü ともいう。
- 52) Qouni-yin ʒurban Čabčiyur: QB 本では Qouqai-yin ʒurban Čabčiyur となっている。オルドス・モンゴル語口語では、ča を ja と発音する。
- 53) qatatal-a čiletel-e uyaqu: 駿馬の訓練方法の一環として、夏から秋にかけておこなわれる「つなぐ」(uyaqu) という食事コントロール法がある。小さいジャガルはこれを耐えがたい苦しみとみている。
- 54) ……toqum bišüü: ここでは toqum bayinam bišüü の bayinam ということばが欠けている。
- 55) öngkürülekü: 転がせる。長時間走らせたあとは、鞍をはずして柔らかい沙の上で転がさせ、腰の疲れをとる。いわば、一種の腰部マッサージである。しかし砂利や小石の上だと、痛くて逆効果である。
- 56) gürümel toqum: gürümel とは「編んだ」、「編みもの」という意味であるが、絨毯を材料とした鞍敷も gürümel toqum という。
- 57) kölüstei talbiju: 「汗だらけのまま放す」の意。長時間走ったウマは、その汗を板で削り取って、乾かしてから放す。汗浸しの状態で放すと病気になる。
- 58) boru jayal: boru とは本来「灰色」、「褐色」の意であるが、「いとしい」、「可愛い」という意味でも使われる。たとえば boru küü mini (いとしいわが子) のように、主として年輩の人が子どもに対して使う。したがってここでは、兄の大きいジャガルが弟の小さいジャガルに向かって用いている。磯野は「かわいい茸毛ジャガルの弟よ」と訳している (モスタールト 1993: 5)。
- 59) sayari: ウマの臀部の皮をなめし、着色するなど加工したもの。モンゴル靴 (yutul) などに使われる。また、寒さや乾燥によってひびわれた皮膚のことを指す。転じてウマやロバ

- などを罵るときの悪罵用語にもなっている。なお、モンゴル語には「額が割れるほど喜ぶ」、「皮がひび割れるほど肥える」という表現がある。
- 60) Qadan-u ebesü qaydajici: qadan-u ebesü は「石のあるところの草」、「石の上に茂る草」で、固くてとれないものである。また、ebesü qayda. qayda ebesü という、隔年の枯れ草を指す。qaydajici は yandajici (干ばつで乾く状態)とも読めそうである。
- 61) qalairanam: これはおそらく qaliyuranam の誤写であろう。qaliyuraqu とは草が青々として、風に吹かれて波打つ様子。
- 62) geji: 後出に geju とあり、両者とも口語体である。ハイジッヒの公表したテキストでは man-i üjegen kümün, kümün-ni bayiji geju とある (Heissig 1976: 526)。ここでは kümün-ü (他人の) ということばが欠けているといえよう。
- 63) Dayar: Dayayar の誤写で、口語を直接写したことによるミスであろう。
- 64) oldaqu buyu: 「見つかるのか」との問いかけで、「見つからない」との意を暗示している。
- 65) Ermig: めったに出産しない牝ウマ、出産適齢期に入っても長く妊娠せずに、はじめて仔を生む牝ウマのこと。ここでは、初産の意味であろう。初産は「貞淑な母親」をイメージさせる。『ロ・アルタン・トプチ』第267節にはチンギス・ハーンのことばとして Eremeg çayayçin-iyän unuju とある (Čoyiji 1983:498)。
- 66) qatayur nirayun: 「くぼんだ背中」との意味で、子どもを背負って育てる母親のイメージである。母親の愛情をうたうときによく使われる表現である。
- 67) ürgügsen: ergügsen とつづるのが本来であるが、ürgügsen は口語発音を直接表記したものである。
- 68) qongyur: 形容詞として赤みがかかった淡黄色、いとしい、可愛らしい、柔らかいとの意味で使われる。また名詞として恋人を表す。
- 69) ulayan Buural ayai: ulayan buural とは、赤毛に少量の白毛がまじった毛色。buural は buyurul の口語体のつづりである。QB 本ではブーラル・ウラーンとなっている。
- 70) uridu qoyidu: uridu は南、qoyidu は北をあらわす。モンゴル人のいう「南」は、太陽の昇る方向で、磁石の示す方向とずれている。そのためか磯野は、uridu を東、qoyidu を西と訳している (モスタールト 1993: 6)。
- 71) бүтөкү: 「形成する」、「形になる」という意味の動詞。ここでは水がきれいで、近づいた仔ウマなど家畜の影がはっきり映るほど、静かな水面を表現している。磯野は「一歳駒、二歳駒をかくすのによい(深い)よ」と訳している (モスタールト 1993: 6)。
- 72) alda kiged delim: alda も delim も長さの単位。1alda は2歩の長さで、約5尺である。delim は半尋の長さにあたる。一尋は5尺で、半尋を四捨五入して三尺と訳した。
- 73) yamay-a-u segül: ヤギを意味する yamay-a を現在では imay-a とつづる。yamay-a は口語である。segül は尾の意味である。ヤギの尾は短いことから、「ヤギの尾」は「短い」、「短命」の比喩として使われる。
- 74) gigüürjigenen: 現在は güreljegen-e とつづる。
- 75) Kөрүки: kögerüküi とつづるが, körüki は口語である。「可愛い」、「可憐な」、「可哀相な」との意味である。
- 76) 『ロ・アルタン・トプチ』は、テムジンがハーン位に即くとき、鳥がとんできて「チンギス、チンギス」と鳴いたことから、「チンギス・ハーン」という称号が与えられたと記述している (Čoyiji 1983: 160-161)。ここでは鳥は「お告げ」の役を演じている。北アジアのシャマニズムにおいて、鳥はシャマンの天界への旅を誘導する役割を果たす存在である (ハルヴァ 1991: 483-488)。
- 77) түргинес түргин: 口語を直接文字化したつづりである。本来は түргин-еңе түргин と表記する。
- 78) түңгерçей: 現在は түңгерçег とつづる。種雄ヒツジの陰のうの皮でつくった小袋をいうが、子どものお腹を指すときもある。本稿では陰のうと訳す。
- 79) арун: орун と同じ。「ゆっくり」、「静かに」との意味である。
- 80) qara külüsün: モンゴル人は汗を「黒い汗」と表現する。
- 81) Boyul Miçe: Boyul とは侍臣、家来、隷属民の意で、Miçe は人名である。『ロ・アルタン・トプチ』第266節ではチンギス・ハーンの使用人として登場する (Čoyiji 1983: 488-489)。『金輪千輻』にもみられる (Dharm-a 1987: 79)。オールドス・モンゴル族の叙事詩 *Boyda ejen boyiji qayan* にも Boyul Miçe が登場し、「馬群の管理者」という注釈がついている (Qas-

- biligtu 1984: 95, 109)。ハーンの側において、知恵袋のような存在である。*Boyda ezen boyiji qayan* は1982年にオトク旗に住む70才の Čoyrub 老が語ったものである。このなかに *či ünüdür Altai Qangyai-yin belčiger-tü yabuju. arban tümen aduyu-ban čuylayulju üje da* (今日、アルタイ・ハンガイの草原に行き、十万頭のウマを集めて確かめよ) とある (Qas-biligtu 1984: 95, 109)。なお、後出には *Mičin. Mičen. Bečin* などがある。
- 82) *iši: iši* はオルドス・モンゴル語口語で、辞書類では *esi* とつづる。竿、柄のほか、根拠、根本、由緒の意味でも使われる。
- 83) *tabun öngge dörben qari*: 五色四夷。モンゴルの年代記では五色の国を「青いモンゴル」、「赤いキタド」、「黒いトゥベト」、「黄色いサルトル」、「白いソロンゴス」とする。また、四夷とは「女人国」(*köken jisütü*)、「ジュン・ガル」(*Jegün yar*)、「胸に目をもつ人びと」(*kebeli čoyurqai*)、「犬頭国」(*noqai-yin toluyai-tu*)の四部である (Liu Jinsuo 1981: 123-124)。
- 84) *erten manayar*: *erten* とは「早く」、「朝」の意で、*manayar* は「翌日」、「明日」の意である。両者をあわせて「朝早く」との意味で使われる。
- 85) *qalyabčitu čayan nomun*: *qalyabči* は盾のことである。「-tu」とは「～をもつ」、「～つきの」を意味する。直訳すれば「盾つきの白い弓(矢)」となるが、盾、弓矢からなる武器の一セットを指すのであろう。磯野は「魔除けの白い弓」と訳している (モスタールト 1993: 7)。
- 86) *dörben qošiyun-u mal*: 四種類の家畜。北・中央アジアのトルコ系やモンゴル系の遊牧民は通常ウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギの五種類のみを *mal* (家畜) という。五種類のなかでもとくにウマは「天の駿馬」(*tngri-yin külüg*)と見なされ、天からの賜物と特別に珍重される。家畜を超越した存在としてウマをみるときは、「四種類の家畜」が登場する。この叙事詩のなかでは、ウマが主人公となっていることから、ウマ以外の四種類が家畜とされているのであろう。
- 87) *Altai qan-i arulan yabuju*: このような表現はチンギス・ハーン祭祀の指針書『金書』にもみられる (Rintchen 1959b: 64; 楊 1998: 101, 115)。
- 88) *aqurqan sanayatai*: *aqurqan* とは「短い」、*sanayatai* は「思い」、「考え」、「思想」の意である。*aqurqan sanayatai* は直訳すれば「短い考え方をもつ」となるが、「視野が狭い」ことを表現するのに使われる。ちなみにオルドスには「女の人ほどなににすぐれていても、灰塚のかなたに足跡はなく、一日行程の土地から向こうでは名はない」ということわざがある (モスタールト 1993: 258)。
- 89) *ölü-e qaljın*: *ölü* とは灰色の意で、*qaljın* は頭部の毛が白い家畜を指す。
- 90) *Boldui-yin Boru Tal-a*: *Boru* とは「褐色」、*Tal-a* は「平地」、「平野」の意である。蓮見は、モンゴルの叙事詩について言及したとき、叙事詩に登場するボルゾーティン・ボル・トルゴイという語に注目している。ボルゾー (*boljuj-a*) は「約束」を意味していることから、蓮見は「約束の岡」とし、「英雄どうしの戦闘や集合の場所などの意で、ほとんどの叙事詩に用いられるモチーフである」と指摘する (蓮見 1993: 39)。
- 91) 帯をはずして頸にかけて天地を拜む儀式は、『モンゴル秘史』にもみられる。出征前の祈禱、大ハーンの即位式などに帯を外すことは、服従の意味であろう。現在までオルドスで維持されてきたチンギス・ハーンの軍神 *Qar-a Sülde* 祭祀においても、参加者一同は帯をはずして参列する。
- 92) これと似たような表現を『三百人のタイチグートを鎮圧した伝説』(*Γurban jayun Tayičiyud-i daruγsan domuy*)にもみられる。ダムディンスレンはこの伝説を1947年にウランバートルで出版された『モンゴル秘史』から収録したという (Damdinsürüng 1959: 30-36)。オルドスでは古くからこの伝説の写本が伝わっている。
- 93) *jasaqu*: 本来「つくる」との意であるが、*emegel jasaqu* はしばらく乗ったウマの鞍を「つけなおす」、「ととのえる」ことを指す。
- 94) *qaysayaqu*: 本来「乾かす」、「日乾し」などの意であるが、*mori qaysayaqu* は夏にウマを日中つなぎ夜に放したりする食草量をコントロールする訓練法を指す。
- 95) *küi*: 『二十八卷本辞典』では、「五百戸(からなる集団)を *küi* という」とある (Namjilm-a 1994: 1048)。
- 96) *jüsükü*: 家畜の肉を保存する際、細長く切って乾かす方法があり、これを *jüsükü* という。
- 97) 両の頬にお椀ほどのくぼみができるほど、痩せこけることを指す。

- 98) *çimagi*: これは口語をそのまま文字化したつづりで、現在では *çim-a-yi* と書く。
- 99) モスタールトのテキストで、このくだりの表現はやや柔らかくなっている。磯野は「あなたを死なせたとして、あなたの皮をわたしが着るわけではないのです。あなたの肉をわたしは食うわけではないのです」と訳している (モスタールト 1993: 9-10)。
- 100) *ayusigen-iyen qatayši*: *ayusigen* は肺臓で、*qatayši* は「乾かすよう」との意である。直訳すれば「肺を乾かすよう」となるが、「怒りは五臓から来る」というモンゴルの思想からの表現である。
- 101) *burul*: 現在では *buyurul* とつづる。
- 102) *ulus Mongyol*: *ulus* とは「集団」, 「国家」の意で、「モンゴル国」を *Mongyol ulus* という。*ulus* を *Mongyol* の前にもってくる表現は他にもある。チンギス・ハーン祭祀の指針書『金書』にも数回にわたって出現する (Rintchen 1959b: 81; 楊 1998: 97, 108, 110)。また『アルタン・ハン伝』でも確認できる (珠榮嘎 1991: 322; 吉田他 1998: 109)。加藤九祚によると、13~14世紀のキプチャクにおけるチンギス・ハーンの長男ジュチ家の所領はウルス・バトゥ、ウルス・ベルケとよばれた。モゴリスタンも支配的ハンの名前をつけてウルス・トグルク・チムール・ハナとよばれた (加藤 1983: 657-658)。ここでは *ulus Mongyol* という表現は、*ulus* の方を強調しているのではないか。
- 103) 磯野は「緻ほどもある白い歯を(口を)引きあけてみて、(馬の年齢を知るため) 驚きいったものだ」と訳している (モスタールト 1993: 10)。ウマの年を確認するとき、その歯をみる方法がある。ここでは、別の意味があるかもしれない。元気の良いウマは馬銜を強く引っばってもなかなかそのとおりに動かないものである。こういうウマを「口の固いウマ」という。もし、二頭のジャガルも「口の固いウマ」だったなら、ここでは「歯を引っばって、驚いたものだ」と訳すべきであろう。
- 104) *sor*: 家畜に食べられていない新鮮な草の葉の先端。磯野の「柔らかい葉先」(モスタールト 1993: 10) を踏襲する。
- 105) この表現は現在でもよく使われる。モンゴル人は、人の笑う表情に注目する。とりわけ男の人は「白い歯を見せて笑う」のが良いとされる。
- 106) *jöb qanduju ineyejü. buruyu qanduju uyilaju*: *jöb* とは本来「正しい」, 「右」, *buruyu* は「まちがい」, 「左」の意味である。ウマを乗るとき、ウマの体の左側から飛びのる。ウマをはじめ、五種類の家畜の身体の前側を「正しい側」(*jöb tal-a*)、身体の後側を *buruyu tal-a* という。*jöb qanduju*..., *buruyu qanduju*... (右に向かっては..., 左に向かっては...) という表現は、現在でもよく使われる。
- 107) *qatariba*: *qatariqu* はウマが小走りすることをいうが、速度も格好よさも側対歩までいかない走り方である。二頭のジャガルは駿馬であり、本来なら当然速い側対歩になるはずであるが、帰心矢の如きの大きいジャガルは、興奮のあまり、側対歩にならず少々雑な小走りになってしまったことが活写されている。
- 108) 『ロ・アルタン・トプチ』第225節にも同じような表現がある (Čoyji 1983: 405)。
- 109) *urda*: これは口語のつづりで、現在では *urida*, *urid* とつづるのが一般的である。
- 110) *qayiquy-a*: 「すべて」, 「あらゆる」との意である。モスタールトのテキストではホラーチ (*qariyaçai*) となっており (Mostaert 1937: 233; Sonum 1989: 461)、磯野は「燕」と訳している (モスタールト 1993: 11)。
- 111) ウマの乳をしぼり、馬乳酒をつくるシーズンになると、朝早く仔ウマを捕え、天幕近くにつないでおく。仔ウマから離れようとする牛ウマが搾乳の対象となる。
- 112) *üri šaralaqu*: *üri* とは種、実、果実、精子の意味である。*üri šaralaqu* とは「実が黄色くなる」, すなわち「秋になる」ことを指す。この一句は二頭のジャガルが帰ってきた季節をいおうとしているのではないだろうか。一方、モスタールトのテキストでは *ür suburaqu* となっており (Mostaert 1937: 233; Sonum 1989: 461)、磯野は「朝の光がさいでる」と訳している (モスタールト 1993: 11)。
- 113) *you-a*: 形容詞として美しい、きれいの意であるが、古くから女性の名前によく使われる。
- 114) *qajiyarlaju bayinam*...*emegeleljü bayinam*: この二句は決して単なる語呂あわせではない。日常生活のなかでもやはりウマを捕え、先に馬銜、それから鞍という順番である。馬銜なしで鞍をつけると、ウマが暴れたりすることがある。
- 115) *asaqarayulju*: 「溢れでるほど注ぐ」, 「とまらぬほど流れる」との意である。
- 116) *sögürün*: 写本では *sögürün* の左に *seigürün* と書いてある。ソノムはモスタールトのテ

- キストをモンゴル文字に転写する際、seyigürjü としたうえ、「seyigürkü とはウマなど、母親とその仔畜がたがいに愛しあうさま」との注釈をつけている (Sonum 1989: 462)。
- 117) モンゴル人は何をするにもウマに乗る。侍臣ミチがハーンの命令で馬群をみに行くときも、当然ウマに乗る。とはいっても、天幕のすぐ近くまでウマを飛ばしてきたら、「誰か死んだのか」と怒られ、忌みきらわれる。侍臣ミチも当然ウマから降りて報告すべきだったが、あまりにも興奮していたため、ついウマの背中で叫んでしまったのであろう。
- 118) 二頭のジャガルを迎えでたチンギス・ハーンは、まるでどこにでもいそうな普通の遊牧民のようである。本来なら大ハーンは長衣を肩にかけたり、歩きながら袖に手を通したりすることはしないで、威厳を保つべきであろう。世界帝国を築いたチンギス・ハーンでも、民間説話や物語などでは、親しみやすい人物として登場することが多い。当然、「袖に手を通す間もなく天幕を出る」ことは、「急ぐ」、「慌てる」ことを描写する際によく使われる表現である。
- 119) qoyar jayal či yayuu bile あるいは qoyar jayal-du yayuu bilen は直訳すれば「二頭のジャガルに何があろう」となる。つまり、「二頭のジャガルのことなど、たずねられるに値しない」ということをいおうとしている。
- 120) 自らが所有するウマを他人が乗ることをモンゴル人は嫌がる。日常生活のなかでも、ウマの貸し借りはできれば避けたいものである。オルドス地域の民謡「豊かなハンガイ」(Bayan Qangyai) は泥棒に盗まれたウマを探す歌であり、自分のウマに他人が乗ったのではないかと心配する内容がある (Bayar 他 1984a: 441-444)。ちなみにオルドスには「他人の馬に乗った男はとばしたがる」ということわざがある (モスタールト 1993: 259)。
- 121) yutul-tu kümün: 直訳すれば「長靴をもつ人間」となるが、たぶん「長靴をはいて歩く人間」を意味するのであろう。
- 122) köl-tu kümün: 直訳すれば「足をもつ人間」となるが、よく歩ける人、足の速い人を指す。磯野は「足しかもたぬ人間」と訳している (モスタールト 1993: 13)。
- 123) alatu kümün: alatu とは「股をもつ」との意味である。「種雄ウマは股で乗るものだ。酒は口で飲むものだ」(ajary-a unubal alan-dayan. ariki uuyubal aman-dayan) ということわざがあるように、強力な種雄ウマはどっしりとした股をもつ男がまたがるものである。したがってここで alatu kümün は「強い男」を指していると理解できよう。
- 124) činu: これは ču inu ということばの口語体である。
- 125) モスタールトのテキストでは albatu kümün, すなわち「平民」の意味である。
- 126) oyurčuy kümün: oyurčuy は ourčuy ともつづり、オルドス・モンゴル語口語では uurčay と発音する。「ばらばらの状態」、「おちつきのない様子」を意味する。オルドス地域では人を罵るときによく使われる。また、草原にぼつんと立つ単独の山を指す。『モンゴル秘史』§ 156. § 200 には「盗賊」の意味で使われている (Eldengtei & Ardajab 1986: 453, 641)。
- 127) yodduli: yodduli ともつづる。yodduli の方が古いつづり方であるという説明をオルドスで聞いたことがある。
- 128) tümen ulus: tümen とは「万戸」と呼ばれる軍事組織で、チンギス・ハーンや後世のハーンたちは「万戸」軍団を左右両翼体制に編成していた。tümen ulus を「万戸からなる国」とも訳せるだろうが、ここでは「属民たち」とする。
- 129) seterlejü ariyulaba: 生きたままの家畜を神に捧げることを ungyulaqu, ariyu tataqu, seterlekü という。seter とはチベット語に由来することばで、元来「家畜の寿命を長くする、死から解放する」との意味である。若いオスの家畜を選ぶ。青、黄、白、赤、緑の五色の絹布を飾りつける (Sarangerel 1992: 128-132)。ハイシッヒは、この儀礼を「血祭」の代替であると位置づけている (Heissig 1996: 126)。神に奉納する儀礼は普通家畜が肥えた秋におこなわれる。この点も、二頭のジャガルが「草の実が黄色くなる前に着こう」といったことと一致する。なお、seterlekü という表現はおそらくチベット仏教の伝播にともなってモンゴルに入ってきたいい方であろう。シャマニズムの神像オンゴンと結びつく ungyulaqu の方がモンゴルの古くからの伝統と見なす方が適切であろう。現代におけるこの風習については利光 (1988: 29-36) を参照。
- 130) 「秋の最初の月」とは、陰暦の7月のことである。
- 131) tal-a ködege ügei: tal-a とは「平野」で、ködege は「野外」の意味である。磯野は「野となく原となく」と訳している (モスタールト 1993: 14)。
- 132) 神に奉献 (seterlekü) されている以上、捕まえて乗ったりすることは、普通はできない。

奉献された大きいジャガルを騎乗できるのは、チンギス・ハーンのみであろう。オルドスのチンギス・ハーン祭祀においても、このような神に奉献された家畜が使われる (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 111-113)。

- 133) Aruytai Tayiši: Aruy とは燃料となる牛糞を捨うときに背負うかご (写真5)のことで、Aruytai は「かごもち」の意味である。Tayiši はおそらく漢語の「太師」に由来することばであろう。北元時代、チンギス・ハーンの直系子孫による支配が弱体化した一時期、「タイシ」に権力が集中した。
- 134) Altai Bayan: Bayan は「金持ち」、「ゆたかな」との意味で、「金持ちのアルタイ」とでも訳せよう。
- 135) ここでは、人質あるいは捕虜として抑留されることをいう。
- 136) uytuju yabun: uytuqu とは「出迎える」との意味である。これは、夕方に天幕近くの寝どこへ帰ってくるヒツジの群れを出迎え、頭数を確認したりする様子を描いている。
- 137) ene deger-e: 「このうえで」との意味であるが、小高い丘か、山頂を指しているにちがいない。駿馬が死んだあと、その頭を山頂あるいは聖地オボの上に置き、祭る習慣がモンゴル各地で見られる (写真3)。有名な駿馬の場合だと、その頭をどこで祭っているか秘密にしなければならない。他人に盗まれたら、自分の群れから駿馬が誕生しなくなるという。
- 138) adayun-dur külüg+bayinu ügei+bayinu bolqul-a: 写本では külüg と ügei をつづけて書き、その右下に+マークをつけ、左側にそれぞれ bayinu を二語書き加えている。+マークは修正を意味する。しかし、このように修正を加えていても意味は通じない。boluqul-a の前にもうひとつ ügei が不足している。つまり adayun-dur külüg bayinu. ügei bayinu. ügei bolqul-a とあるべきである。külüg bayinu の bayinu は「存在」を意味し、ügei bayinu の bayinu は「状態」を意味する。+マークをつけずに、adayun-dur külüg ügei bolqul-a (馬群に駿馬がないから) との表現の方が簡素で、良いのではないだろうか。
- 139) bayasu: 糞を指す一般名詞であるが、五畜の糞をそれぞれ意味する固有名詞もある。たとえばウマの糞はホモール (qomuyul) という。
- 140) yančiju: yančiqu は「殴る」、「叩く」を意味する動詞で、jančiqu ともいう。オルドス地域のウーシン旗西部の人びとは jančiqu と発音するのに対し、東部では yančiqu と発音する。
- 141) yarju: 動詞 yarqu の変化形で、「出る」、「出かける」との意であるが、おそらく少年は押しのおされてお尻を叩かれていたので、「起きあがって」と訳す。
- 142) ongyučun qobuy-a: ongyučun は水槽で、qobuy-a は井戸から水を汲みあげる桶で、両者とも井戸にそなえる。桶を使って井戸から水を汲みあげ、それを水槽に入れて、家畜に水を飲ませる。川や湖の少ないゴビ地帯独特の設備である (写真4)。このことから、「二頭の駿馬」という叙事詩は、水の多いハンガイで生まれたものではないと推測できよう。
- 143) 移動遊牧生活を送るモンゴル人のあいだで、騎乗用のウマのほかには家財道具を運ぶウマが別にいる。騎乗用のウマを unayan mori, 運搬用のウマを ačiyān mori という。騎乗用は外観の美しさと足の速さが欠かせないのに対し、運搬用はまず力強さが要求される。運搬に使われたウマは「形がくずれた」といって、騎乗に使うことはない。また、両者を混同することもない。アルタイ・バヤンは駿馬が分からないので、まだらの駿馬を埋没させていた。
- 144) talbibasu: talbiqu は本来ウマを草原に放つことを意味するが、ここでは「ウマに乗って、その馬銜をゆるめる」ことを指す。はみをゆるめた瞬間飛びでる様子を想像させる。
- 145) 尻がいにつけている棒のことで、尻木と訳すことにした。
- 146) uuda: 皮、あるいはフェルトでつくった食料袋。移動や旅するときウマに乗せて使用する。
- 147) ejigi: チーズの一種。ejigi は egejegei の口語を直接文字化したものである。新鮮な乳に発酵乳を加えたのち、加熱する。水分が蒸発するまで加熱してできたものを「白いエージギ」、加熱時間を短くし、乳漿を濾過してできたのは「赤いエージギ」という。
- 148) オルドス・モンゴル族のいうホルートという乳製品は次のように加工される。乳を発酵させ、攪拌して脱脂過程を経て、残った酸乳をさらに加熱する。濾過したあと、型にはめたり、手で丸めたりして天日で乾燥させる。まったく同じ過程をたどり、そうめん状に乾したものはチュルマ (čurma) といい、ホルートとはよばない。
- 149) 沙の入った袋はおそらく地面に置いたのであろう。袋は少年が駿馬の足の力強さと速さ、

自らの馬術をみせつけるためのものであった。

- 150) 動詞 *kөгjikü* は「発達する」, 「意気込む」, 「興奮する」との意で, *degjikü* は「盛んになる」, 「旺盛になる」, 「燃えあがる」との意である。ここでは「人質にされ, 金持ちにいじめられる立場から逃げることができた。水槽や桶を乗せられ, 埋没していた駿馬も伯楽に出会った」ということを表現している。「人間は小さいときから, 駿馬は仔ウマのときから」(*kümün bolqu bay-a-ača, külüg bolqu unayan-ača*) ということわざを思いださせる。
- 151) 二頭のジャガルが牧地を求めて出奔する前半の物語のなかでは, チンギス・ハーンが「炎のような茸毛馬」に乗っていた。
- 152) *ičiqu*: オルドス・モンゴル語口語で, 「行く」, 「赴く」を意味する動詞。*očiqu* とつづるのが普通である。
- 153) *qorudu*: これはおそらく *qoruyan-du* ということばを口語体で *qorundu* とつづろうとしたのが, *qorudu* になったのだろう。*qoruy-a* とは家畜を収容する柵, 囲いを意味するが, ここでは群れを指す。
- 154) *töngkeliy-eče tatabasu: töngkeliy (töngkelig)* は馬銜を構成する鉄製の鑲のことである。ここではズンドゥ・サイハン息子が鉤つきの槍で少年の乗った駿馬の馬銜をとらえようとすることを表現している。
- 155) *boltusju ükübe*: 動詞 *boltusiqu* とはウマなどが走りすぎて疲れることを意味する。
- 156) 金の糸を織りこませ, 龍の紋様をほどこした緞子をマンヌクという。
- 157) *yasun-i sayıqan bariba: yasun* は骨で, *barıqu* は「つかむ」, 「ととのえる」との意である。*yasun-i barıqu* には2つの意味がある。ひとつは, モンゴル医学における「整骨療法」を指す。もうひとつは, 葬送儀礼の一環として, 痙攣などによってゆがんだ遺体をととのえることを指す。なお, モンゴルの葬送儀礼については, 小長谷 (1998: 165-182) を参照されたい。
- 158) アルクタイ・タイシの息子は父親ゆずりの才能をもち, 駿馬であるか否かを鑑定できる。しかし今や囚われの身となっている以上, その才能が幸か不幸か分からない。息子の身を案じて「わが息子に幸あれ」と祈っている。
- 159) *külüg-yin toyusun*: 駿馬のたてた沙ぼこり。広々とした大草原で, はるか遠くの沙ぼこりもすぐ目に入る。人か家畜か車か, あるいは竜巻か, 変化の兆しなのである。ウマの場合, その毛色や走り方などから, 乗っている人を判断する。ほこりをたてて走ってきた客人に, 「ほこりのたて方から, 誰なのか分かっていた」といいながら出迎える。多くの民歌のなかに, ほこりを表現した歌詞が織りこまれている。とくに恋人同士がウマに乗って草原でデートする際, 「恋人のほこり」は愛の象徴とされる。
- 160) *gerden; ger-tegen* の口語体つづりである。
- 161) ここでは鍛冶屋の天幕に行き, 鉄の鉤つき槍をつくってもらい, その槍をもって出かけることを語っている, 「槍をつくってもらい, その槍を手にして」(*temür degege jasayulju. tegün-iyen abuyad*) というような一句があれば, もっと理解しやすくなるのではないだろうか。
- 162) モンゴル人は驚き, 嘆くときによく「お父さんよ, お母さんよ」といって, 先祖に祈ったり, 救いを求めたりする。
- 163) *dooraki yajar eji* とある以上, *degereki tegri abu* とした方が対応する。*abu* という文字が欠けている。
- 164) *ergigülüged: mal-i ergigülkü* ということばがあり, 草原にいる家畜をまとめ, 自宅の方へ向かせることを指す。
- 165) ダムディンスレンのテキストでは *Buyurul Ulayan ajiry-a-ača* (ブーラル・ウラーンという種雄馬から) となっている (*Damdinsürüng* 1959: 68)。
- 166) *tabu yisü*: *tabu* は五, *yisü* は九である。モンゴルには *yisü toyalaqu* 「九を数える」といういい方がある。冬至から数えて, 9日間を *nige yisü* (ひとつの九) とし, *tabu yisü* は「五の九」, すなわち「五番目の九日間」を指す。
- 167) ダムディンスレンのテキストには *teskim-e ebül-ün tabu yisü-yin küiten-dü* という一句はない (*Damdinsürüng* 1959: 68)。
- 168) *salai*: 生まれたばかりの仔畜の体に付着している液体と粘膜類のこと。
- 169) *taryuyqan*: 「太った」, 「ぶよぶよした」との意味である。ダムディンスレンのテキストには *unayan salai-ni qaytayadui. taryuyqan* という一句はない (*Damdinsürüng* 1959: 229)。

- 170) *dabtaqu*: 「練習する」, 「訓練する」との意味である。また競馬の際, 先頭を走るウマがゴールに近づいたとき, 応援者がその騎手と並んで威勢良く走ることも *dabtaqu* という。
- 171) 北・中央アジアのチュルク・モンゴル系諸民族のあいだに古くから狼を祖先とする伝承がある。その点については村上正二は「モンゴル部族の族祖伝承 (一, 二)」のなかで詳しく検討している (1964: 1-34, 36-64)。
- 172) ダムディンスレンのテキストでは *Qar-a Qulan bisiü* となっている (Damdinsürüng 1959: 68)。
- 173) ダムディンスレンのテキストでは *kögüren büri usu-tai* となっている (Damudinsürüng 1959: 68)。
- 174) *qalayuram*: ツェレンソドナムは *qalayuram* は *alyur* と同じ意味であるとしたらうえ, 語頭に *h* がつくのは, 『モンゴル秘史』にみられる特徴をおびたものであると指摘している (Čeringsodnam 1989: 417)。額爾登泰らによると, モンゴル語族のなかで語頭の母音前に摩擦音 *h* がつく現象は, ダウール語の一部方言から確認できるという (額爾登泰他 1980: 188)。これらの説に依拠すれば, オルドスの写本は古い言語学的特徴を維持しているといえよう。モスタールトは, オルドス・モンゴル族は黄河によって他地域との交流が限定されていたうえに清朝の分治政策もあって, オルドス方言は非常に保守的であるとみている (Mostaert 1937: 10)。オルドス方言に関する詳しい分析は Mostaert (1926; 1927) がある。
- 175) *sayin kökügülösen*: ダムディンスレンのテキストでは *sayan kökügülösen* となっている (Damdinsürüng 1959: 69)。
- 176) *sibayud*: *sibayu* (鳥) の複数形。ダムディンスレンのテキストでは *sibayun* となっている (Damdinsürüng 1959: 69)。
- 177) *čimkü*: 後出は *čimkikü* で, ダムディンスレンのテキストでも *čimkikü* となっている (Damdinsürüng 1959: 69)。「つねる」, 「つまむ」, 「ちぎる」との意味であるが, 小型家畜を「去勢する」意味でも用いられる。ここでは「ちぎって食べる」, 「つまむように食べる」との意である。
- 178) *qoni qury-a*: *qoni* はヒツジ, *qury-a* は仔ヒツジを指す。両者を並べて使うときは広く「小型の家畜たち」, 「家畜群」を意味する。
- 179) ウマとヒツジの食草習慣はそれぞれ異なる。ウマとくに仔ウマは高くて, 柔らかい草を食べるのに対し, ヒツジは丈の低い草など, 何でも食べる。何でも食べるヒツジは生命力が強いとみられる。
- 180) *gejige inü alda kiged delim sayiqan bayinam*: OO 本では *ebesün-ni kečignen jilen-dür adali. alda kiged delim sayiqan bui-j-a* となっている (4・b・5-6)。両者はまったく違う意味であるが, 髪を意味するギジゲと草の名前ケチゲネは発音が似ている。おそらく長い口語伝承の過程で生じた変化であろう。
- 181) ダムディンスレンのテキストでは *er-e-yin* となっている (Damdinsürüng 1959: 69)。
- 182) *Boysiry-a*: *Bojšury-a* ともいう。『蒙漢辞典』(1976: 471) では阿蘭雀としている。
- 183) *abčiraba*: ダムディンスレンのテキストでは *abčiba* となっている (Damdinsürüng 1959: 69)。
- 184) *alanggir*: モンゴル族が使用する弓は, 木に牛角などをはめこんで作る。木だけでできている弓を *alanggir* という。
- 185) *abuljiy-a*: ダムディンスレンのテキストでは *abaljay-a* となっている (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 186) *Altai Qan-u aru bayuqu*: ここでは *Altai Qan-u aru-bar bayuqu* とあるべきで, *-bar* ということばが欠けている。
- 187) 写本ではこの箇所に……記号がついている。おそらくハスウーラ (葛玉山) がビシューガルマのオリジナル写本を書きうつした際, 当該箇所の欠損, 不明瞭な部分をそのまま残したのであろう。ダムディンスレンのテキストではここで *tnгри еčиге-деgen мөргүбе: qar-a bay-a-yin sayin-iyar qayan ese boluluy-a bi: qayan*……となっている (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 188) ダムディンスレンのテキストでは *qajayar-iyar yayakiju* (馬銜をどうやって…) となっている (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 189) 写本ではここに……記号がある。上記と同じく, ビシューガルマのオリジナル写本に欠落があったと思われる。ダムディンスレンのテキストではここで *yayun-dayan emegel-iyen*

- toqunam: učirtu urulduyan bolunam bije (どのウマに鞍をつけよう。わけあって大規模な軍事演習になったら) とある (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 190) bolunam buja: ダムディンスレンのテキストでは bolunam bije となっている (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 191) ダムディンスレンのテキストでは Qouqai-yin Ğurban çabçiyur-tu kürjü nutuylaba とある (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 192) ダムディンスレンのテキストでは joysuysan mori metü yabubai となっている (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 193) ingkiji: ダムディンスレンのテキストでは ingkijü となっている (Damdinsürüng 1959: 70)。オールドス・モンゴル族は ingkiji と発音する。
- 194) šidü: ダムディンスレンのテキストでは çayan šidü となっている (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 195) üjigür: ダムディンスレンのテキストでは üjügür となっている (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 196) 男の笑い方を描くのに, erbis を使っている点にいささか理解に苦しむ。erbis も irbes も女の表情を形容することばである。ハイジッヒが公表したモスタールト師のテキストでは, irjas となっている (Heissig 1976: 533)。男の笑いを表すには, irjas が適切であろう。
- 197) ダムディンスレンのテキストでは yurban sar-a-yin yajar-i bolbaçu となっている (Damdinsürüng 1959: 70)。
- 198) gejä jigüdülebe: ダムディンスレンのテキストでは gemen jegüdülebe となっている (Damdinsürüng 1959: 71)。
- 199) köl-dü: ダムディンスレンのテキストでは költü となっている (Damdinsürüng 1959: 71)。
- 200) yurban edür: ダムディンスレンのテキストでは yurban edür-ün となっている (Damdinsürüng 1959: 237)。
- 201) yaruyad oçiqul-a: ダムディンスレンのテキストでは yarun oçiqul-a となっている (Damdinsürüng 1959: 71)。
- 202) ali yajarbui: OO 本では qamiy-a bai となっており (15・a・4), 純粹に「ヒツジはどこだ?」との意味である。これに対して ali yajar bui は, 少年とアラクタイ・バヤンの二人の目の前にヒツジがいなくて, 「お前はここにいるが, ヒツジは全然ちがうところにいるではないか」とのニュアンスがある。おそらくヒツジ群はすでに天幕近くの寢床にもどっているのに, 番人の少年がまったく姿を見せないの, アラクタイ・バヤンが怒ったのであろう。
- 203) uyilaju sayuba: ダムディンスレンのテキストでは okilaju sayadaba となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 204) külüg aça: ダムディンスレンのテキストでは külüg olju aça となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 205) quluyur: ダムディンスレンのテキストでは quluyar となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。オールドス・モンゴル語の口語発音は quluyur である。
- 206) čimadu: ダムディンスレンのテキストでは čimadur となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 207) aduyu-ban: ダムディンスレンのテキストでは aduyun-ıyan となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 208) degjirebe: ダムディンスレンのテキストでは degjibe となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 209) mal-ıyan emün-e-eče uytuju: 夕方, 家畜群は草原から屯営地にもどってくる。アラクタイ・バヤンは屯営地から出迎えるとき, ちょうど家畜群の先頭につかる。これを「正面から迎える」という。
- 210) mori-u: ダムディンスレンのテキストでは morin-u となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 211) alay boru mori: ダムディンスレンのテキストでは quluyar alay mori となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 212) bida tegün-ü: ダムディンスレンのテキストでは bida がない (Damdinsürüng 1959: 72)。

- 213) qarın qarın: qarın がひとつ多いのは、抄写段階でのミスであろう。
- 214) sungduu sayıqan: ダムディンスレンのテキストでは *suydur sayıqan* となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 215) üy-e: 「節」の意味であるが、ここでは前出の *alda* と同じ意味で用いている。
- 216) tegün-ü: ダムディンスレンのテキストでは *tegün-ü* (「彼すなわち小さいジャガルの」) が無い (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 217) ダムディンスレンのテキストでは *öndür deger-e* となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 218) bar-a: bar は口語のつづりである。ダムディンスレンのテキストでは *barayan* となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 219) abuyad: これは *jasayulju abuyad* の略であろう。
- 220) degereki tngri abuyçibau douraki yajar abubau: *abuyçibau* と *abubau* はいずれも口語のつづりである。ダムディンスレンのテキストでは *abuyaçibau* となっている (Damdinsürüng 1959: 72)。
- 221) abalan talbiba: talbiba は「～してやった」との意で、直訳すれば「巻狩してやった」となる。
- 222) Qatun: モンゴル人は黄河やモンゴル高原のトゥール河を *Qatun yool* (妃の河) とよぶ。
- 223) erükü: 「掘る」を意味する動詞。ウマはよく足で地面を掘る。草の根を掘りおこして食べ、乾いた地面を掘って湿った沙のうえで寝ころがることもある。冬、雪が降ったら、雪をかきわけて地面に生えている草を食べる。
- 224) ダムディンスレンのテキストでは *maytaba* となっている (Damdinsürüng 1959: 60)。
- 225) medegsen: ダムディンスレンのテキストでは *maytaysan* となっている (Damdinsürüng 1959: 61)。
- 226) Nayur: 私の写本では *ayui* (石窟) とつづっている。後出12・5の *qani* など写本の一部では語末の *r* と語尾の *i* が同じ形になっている。ここでは *Damdinsürüng* (1959: 61) にしたがる。
- 227) bariju: 動詞のあとにつく *bariju* は「～したりして」を意味する。
- 228) köndelen: 横の、横たわるとの意。馬銜はウマの口のなかで横につけられるとの表現。
- 229) ダムディンスレンのテキストでは, *köndelen köke temür emkügülün, körjen-tü toqum-i kölösü-tei talbin, küiten temür emkүjү yakiju ay-a*: (ロ一杯青い鉄をつけられ, ざらざらした鞍敷を汗びたしのままつけられ, 冷たい馬銜をつけられ, ひどいではないか) となっている (Damdinsürüng 1959: 61)。
- 230) duyurum: *duyuram* ともつづる。軽やかな走り方をする若いウマのこと。
- 231) ey-e-tei: *ey-e* とは友情, 情愛の意。現在 *ey-e-tei* とは普通夫婦間が仲睦まじいことを指す。
- 232) üilügsen: ダムディンスレンのテキストでは *eyilügsen* となっている (Damdinsürüng 1959: 62)。
- 233) ウマが疲れて走らなくなると, よけい鞭でたたかれる。「疲れたウマに馬銜が重く, 疲れた人間に耳も重い」(*eçegsen morin-du qajayar kündü, yadaısan kümün-dü çiki kündü*) ということわざもある (内蒙古大学蒙古語文研究室 1976: 141)。
- 234) bügüde-deger: ダムディンスレンのテキストでは *bügüdeger* となっている (Damdinsürüng 1959: 62)。
- 235) butan-u ebesü boytai とある以上, *qadan-u ebesü qayda-tai idey-e* (石のあるところの草は, 枯れ草とともに食べよう) と表現してもよいのではないか。
- 236) ダムディンスレンのテキストでは *simegülgügen* (吸わせる) となっている (Damdinsürüng 1959: 62)。
- 237) ダムディンスレンのテキストでは *omuy-ıyan daruyadui-du, ayusgin-ıyan çerdegedüi-dü, yayakinam bolbau çi minu*: (血気をおさえないで, 怒りをあらわにしてどうするの, お前は) となっている (Damdinsürüng 1959: 62)。
- 238) öd: *ögede* の口語体つづりである。*Damdinsürüng* は *ögede ügei-yi ösgen* としている (Damdinsürüng 1959: 62)。
- 239) テキストでは *blam-a* となっているが, *bay-a* の誤写である。
- 240) *Boısaçay-a* は *Boıury-a* の誤写であろう。ダムディンスレンのテキストでは *Boıury-a* となっている (Damdinsürüng 1959: 63)。

- 241) 写本では blam-a となっている。
- 242) ダムディンスレンのテキストでは kögegeküi となっている (Damdinsürüng 1959: 63)。
- 243) neyilün: ダムディンスレンのテキストでは eyilün となっている (Damdinsürüng 1959: 63)。
- 244) egüldürejü: ダムディンスレンのテキストでは egeldürjü となっている (Damdinsürüng 1959: 63)。
- 245) ここでは ulus-iyän ということばが欠けている。
- 246) quyur とは胡琴, quyurçi は胡琴を弾く人を指す。各種の儀礼において胡琴は欠かせない存在である。チンギス・ハーン祭祀において, チンギス・ハーンの歴史を語るウチュク öcig のなかに quyur çuyur kög dayutu (胡琴と胡笳で演奏する旋律のよい歌をもち) とある (Rintchen 1959b: 63; 楊 1998: 100)。
- 247) アルガスン・ホールチの名は『ロ・アルタン・トプチ』第225節に登場する。チョイジは, 「アルガスン・ホールチの物語」は13世紀の史実をもとに, 文人たちが加筆してできたものであるという (Čoyiji 1983: 404-415)。『蒙古源流』, 『金輪千輻』にもみられる。
- 248) alçin qarçayai: alçin はおそらく OO 本6-b.5~6にある al naçin の誤写であろう。
- 249) takilçuur: ダムディンスレンのテキストでは takiljayur となっている (Damdinsürüng 1959: 64)。
- 250) kümün: ダムディンスレンのテキストでは künei となっている (Damdinsürüng 1959: 64)。
- 251) ダムディンスレンのテキストでは Bay-a Jayal yörgen ködelbe: Yeke Jayal şoyşan ködelbe: (小さいジャガルは急いで走りだし, 大きいジャガルはゆっくり歩きだした) となっている (Damdinsürüng 1959: 64)。
- 252) güibe: ダムディンスレンのテキストでは kürbe (着いた) となっている (Damdinsürüng 1959: 65)。
- 253) ダムディンスレンのテキストでは qas Čayayçin となっている (Damdinsürüng 1959: 65)。
- 254) Ebüdüg-iyen sögüdjü: ebüdüg は膝, sögüdkü はひざまずくとの意である。ここでは悲しさのあまり, 歩けなくなることを描いている。
- 255) ダムディンスレンのテキストでは Ermeg Čayayçin となっている (Damdinsürüng 1959: 65)。
- 256) ダムディンスレンのテキストでは aba-yin となっている (Damdinsürüng 1959: 65)。
- 257) jusayaysan: 夏のあいだ, 緑の草を食べていても, 使役されて肥らなかった様子を指す。
- 258) usun: ここでは対格を意味する i が欠けている。
- 259) 「馬糞のあるところ」とは, ウマが住みなれた地帯を意味する。
- 260) ダムディンスレンのテキストでは Yeke Jayal yörgen ködelbe: Bay-a Jayal şöysin ködelbe: とある (Damdinsürüng 1959: 66)。
- 261) irebesü: ダムディンスレンのテキストでは irebeü となっている (Damdinsürüng 1959: 66)。
- 262) ダムディンスレンのテキストでは jebe ongdudqui となっている (Damdinsürüng 1959: 67)。
- 263) ここで小さいジャガルがハーン主君に対して çï という第二人称をつかっている点は興味深い。第二人称単数形は çï と ta の二つがあり, ta の方は敬語である。オルドス・モンゴル族は日常生活のなかで, ta をさほど用いない。叙事詩のなかでチンギス・ハーンに対して敬語を使用していないことから, 親しみやすいイメージが一層鮮明になっている。
- 264) ここでは Jayal ということばが欠けている。
- 265) erin: ダムディンスレンのテキストでは erün となっている (Damdinsürüng 1959: 67)。
- 266) kinan: ダムディンスレンのテキストでは kiqan となっている (Damdinsürüng 1959: 67)。
- 267) ülü medebe: ダムディンスレンのテキストでは medebe ではなく, maytaba となっている (Damdinsürüng 1959: 67)。
- 268) teyimü-eçe: ダムディンスレンのテキストでは teyimü-yin となっている (Damdinsürüng 1959: 67)。
- 269) gitun: ダムディンスレンのテキストでは gitun alaba となっている (Damdinsürüng 1959: 67)。

- 68)。
- 270) ダムディンスレンのテキストには、この4行の内容はない (Damdinsürüng 1959: 68)。
- 271) 年代特定にあたっては、Čoyiji が校注した『ロ・アルタン・トプチ』(Čoyiji 1983) を参照した。
- 272) 『ロ・アルタン・トプチ』では、息子の嫁となっている (Čoyiji 1983: 556)。モンゴルでは、父親が死去したあと、息子たちは生母以外の父親の夫人をめとることができる。兄の死後、弟たちがその夫人を妻として迎える。逆は道理に合わないと言われる。日常生活のなかで、父と息子の嫁、兄と弟たちの嫁は互いを避けるようにして暮らす。オルドスでは近年まで、チンギス・ハーンの直系子孫の夫人たちがチンギス・ハーン祭殿の前を通るとき、数キロ先から下馬し、かならず顔をおおいかくしていたのも、この習慣を守っていたからである。
- 273) 現在、鍋を意味するトゴー、あるいはトガンを *toyuy-a* とつづるが、『蒙古源流』では *to-yan* となっている。
- 274) 以上参照した Sayang Sečen の『蒙古源流』は、Mostaert (1956 *manuscrit A* 136~147; *manuscrit B* 120~128; *manuscrit C* 136~145) による。
- 275) たとえば Mostaert (1956: *manuscrit A* 143; *manuscrit B* 126; *manuscrit C* 142) にこのような記述がある。
- 276) チンギス・ハーンの二頭の駿馬、大きいジャガルと小さいジャガルのどちらが好きなのかは、人によって異なるだろう。私はオルドス地域でフィールド・ワークをしているとき、たくさんの人にこの質問を試してみた。老人や女性のほとんどは大きいジャガルが好きだという。これに対して男性は小さいジャガルの生き方こそ、モンゴル人の理想ではないかという。

文 献

Alta, B.

1992 《Činggis-un er-e qoyar jayal-un tuyuji>-yin sudulul (モンゴル文『〈チンギス・ハーンの二頭の駿馬〉に関する諸研究』). 呼和浩特: 内蒙古教育出版社。

Bayatur & Čoyimbul 他

1988 *Mongyol arad-un dayuu-yin čobural: Alašan ayimay-un tegübüri* (モンゴル文『モンゴル民歌叢書——アラシャン盟集』上・下). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

八省区蒙古語文工作協作小組弁公室編

1979 『全国蒙文古旧図書資料聯合目録』呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

Bayar, 郭永明, 東晴, 趙星

1980 *Ordus arad-un dayuu* (モンゴル文『オルドス民歌』) 1. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

1984 *Ordus arad-un dayuu* (モンゴル文『オルドス民歌』) 2. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

Čeringsodnam, D.

1989 *Mongyol uran jokiyal* (モンゴル文『モンゴル文学』). 北京: 民族出版社。

Čoyiji (校注)

1983 *Altan tobči* (モンゴル文『黄金史』). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

Damdinsürüng, če.

1959 *Mongyol uran jokiyal-un degeji jayun bilig orusibai* (モンゴル文『モンゴル文学珠玉百篇』). *Instituti Linguae et Litterarum Comitети Scientiarum et Educationis Altae reipublicae Populi Mongoli, XIV, Ulaanbaatar.*

Dharm-a

1987 *Altan kürdün mingyan kegesütü* (モンゴル文『金輪千輻』). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

Eldengtei & Ardajab

1986 *Mongyol-un niyuča tobčiyān: seyiregülül tayilburi* (モンゴル文『蒙古秘史還原注釈』). 呼和浩特: 内蒙古教育出版社。

楊 『チンギス・ハーンの二頭の駿馬』について

額爾登泰&烏雲達賚他

1980 『〈蒙古秘史〉詞匯選釈』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

Erdenitoйtaqu

1958 《Qoyar jayal-un tuyuji》-yin tuqai (モンゴル文「《二頭の駿馬の伝説》について」).
Mongyol teūke kele bičig 5, 46-58.

Гalluu 他

1991 *Mongyol arad-un dayuu-yin čobural: Bayannayur ayimay-un tegübüri* (モンゴル文『モンゴル民歌叢書——バヤンノール盟集』). 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

原山 煌

1995 『モンゴルの神話・伝説』東京：東方書店。

ハルヴァ・ウノ

1991(89) 『シャマニズム』田中克彦訳，東京：三省堂。

蓮見治雄

1993 『チンギス・ハーンの伝説』東京：角川書店。

Heissig, W.

1971 *Catalogue of Mongol books, manuscripts and xylographs*. Copenhagen: The Royal Library Copenhagen.

1976 Ein Ordos-manuskript der “Geschichte von Činggis khans zwei rennern”. *Zentralasiatische Studien* 10, 521-543.

1994 *Geschichte der Mongolischen literatur* II. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

1996 A note on the custom of Seterlekü. *Götter im wandel (Gesammelte aufsätze zum synkretismus der Mongolischen volksreligion)*, pp. 126-130. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

フフバートル

1993 『モンゴル語基礎文法』東京：たおフォーラム。

1997 『続 モンゴル語基礎文法』東京：インターブックス。

Jigmiddorji & Yömjab 他

1994 *Amidu bodas-un toli* (モンゴル文『生物詞典』). 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

珠 榮嘎 (訳注)

1991 『阿勒坦汗伝』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

加藤九祚

1983 「カザフ族の遊牧生活」『国立民族学博物館研究報告』8(3), 653-696.

Kesigtoйtaqu, Č.

1988 *Mongyol-un erten-ü udq-a jokiyal-un sudulul* (モンゴル文『モンゴル族古典文学研究』). 海拉爾：内蒙古文化出版社。

小長谷有紀

1991 「モンゴルの家畜屠殺をめぐる儀礼」畑中幸子・原山煌編『東北アジアの歴史と社会』pp. 303-333, 名古屋大学出版会。

1998 「モンゴルの葬送儀礼」周達生・塚田誠之編『中国における諸民族の文化変容と民族間の動態』(国立民族学博物館調査報告 8) pp. 165-182.

Konagaya, Yuki

1997 The Mongolian perspective on animal resources. In Takao Yamada & Takashi Irimoto (eds) *Circumpolar animism and shamanism*, pp. 273-278. Hokkaido University Press.

Liu Jinsuo

1981 *Arban buyantu nom-un čayan teūke* (モンゴル文『十善福白史冊』). 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

Masijiryal

1979 *Ordus arad-un dayuu* (モンゴル文『オルドス民歌』). Döngšeng: Yeke Juu Ayimay-un Mongyol kele bičig-ün alban Ger.

Mostaert, A.

1926 Le dialecte des Mongols Urdus (Sud). *Anthropos* XXI, pp. 851-869.

1927 Le dialecte des Mongols Urdus (Sud). *Anthropos* XXII, pp. 160-186.

- 1937 *Textes oraux Ordos* (Monumenta Serica Monograph Series 1). PeiP'ing: Cura Universitatis Catholicae Pekini Edita.
- 1947 *Folklore Ordus* (*Traduction des Textes Oraux Ordos*) (Monumenta Serica Monograph XI) PeiP'ing: The Catholic University.
- 1956 *Erdeni-yin tobči*, Mongolian chronicle by Sayang Sečen, Part I,II, III, IV, Harvard-yenching Institute Scripta Mongolica II, Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- モスタールト, A.
1993(66) 『オールドスロ碑集』磯野富士子訳, 東京:平凡社。
- 村上正二
1964 「モンゴル部族の族祖伝承——とくに部族制社会の構造に関連して(1-2)」『史学雑誌』73(7), 1-34, 73(8), 37-64。
- Namjilm-a (整理)
1994 *Qorin naimatu tayilburi toli* (モンゴル文『二十八卷本辞典』). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Naranbatu & Rinčin, D.
1984(79) *Mongyol arad-un dayun tabun jayu* (モンゴル文『モンゴル民歌五百首』上). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Narasun & Öljeibayar
1986 *Ordus-un jokiyal bötügel-ün tegübüri* (モンゴル文「オールドス・モンゴル族の作品選」). *Yeke Juu-yin soyul teüke-yin materiyal 1*, 178-295.
- 内蒙古大学蒙古語文研究室 (編)
1976 『蒙漢辞典』呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Qasbiligtu, Č.
1984 *Ordus-un soyul-un öb* (モンゴル文『オールドス文化遺産』1). 伊克昭盟民族研究会 & 伊克昭盟民間文学研究会。
1986 *Kesigbatu-yin silüg-üd* (モンゴル文『ゲシクバト詩集』). 北京: 民族出版社。
- Qurčabayatur, L.
1992(90) *Qatagin arban yurban atay-a tegri-yin tayily-a* (モンゴル文『ハタギン部十三天神祭』). 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- Rintchen, B.
1959a *Zum kult Tsinggis-Khans bei den Mongolen. Opuscula ethnologica memoriae ludovici Biro Sacra*, pp. 9-22. Budapest.
1959b *Les materiaux pour l'étude du chamanisme Mongol*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Sarangerel
1992 *Degedü Mongyol-un jang ayali* (モンゴル文『デート・モンゴルの風俗習慣』). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Sayinjiryal & Šaraldai
1983 *Altan ordun-u tayily-a* (モンゴル文『黄金オールドの祭祀』). 北京: 民族出版社。
- Serruys, H.
1975 A catalogue of Mongol manuscripts from Ordus. *Journal of the American oriental society* 95, 191-208. Columbia University.
- Sonum (転写校注)
1989(82) *Arji burji qayan* (モンゴル文『アルジ・ブルジ・ハーン——オールドス民間文学』). 北京: 民族出版社。
- 塔亜, D.
1999 『アリンピルの《ジャンガル》——新疆オイラト・モンゴルの英雄叙事詩』千葉大学ユーラシア言語文化論講座。
- 利光(小長谷)有紀
1988 「毛を刈らない去勢山羊の話」『民博通信』39, 28-36。
- Tuyay-a
1998 *Mongyol qayučin nom-un sudur-un olan ulus taki çuylayuly-a-yin teükeçilegsen tölüb* (モンゴル文「各国に所蔵するモンゴル文献の歴史的経緯」). 『内蒙古社会科学』(1), 106-115。

楊 『チンギス・ハーンの二頭の駿馬』について

Tümen, R.

1984 *Ayta morin-u irügel-ün sudur* (モンゴル文「去勢馬の祝詞」). *Ordus-un soyul-un öb* 1, 185-196.

Üninulayan

1993(90) *Mongyol-un erten-ü uran jokiyal* (モンゴル文『モンゴル古代文学』). 呼和浩特: 内蒙古教育出版社。

Uspensky

1996 *Old Tibetan and Mongolian collections in the Libraries of St. Petersburg. Asian research trends* 6, 173-184.

若松 寛

1993 『ゲセル・ハーン物語——モンゴル英雄叙事詩1』東京: 平凡社。

1995 『ジャンガル——モンゴル英雄叙事詩2』東京: 平凡社。

楊 海英

1995 「チンギス・ハーン祭祀の政治構造」『内陸アジア史研究』10, 27-54。

1996a 「オルドス・モンゴル族オーノス部の家系譜」『関西外国語大学研究論集』63, 667-679。

1996b 「モンゴル社会における野生植物の香辛料的利用」『食品工業』39(16), 56-65。

1997 「オルドス・モンゴルの祖先祭祀」『国立民族学博物館研究報告』21(3), 635-708。

1998 『〈金書〉研究への序説』(国立民族学博物館調査報告7)。

吉田順一&賀希格陶克陶他

1998 『《アルタン・ハーン伝》訳注』東京: 風間書房。

Žamcarano

1955 *The Mongol chronicles of the seventeenth century.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

《 2000 年 12 月 25 日 》

2000 年 12 月 25 日

2000 年 12 月 25 日、チンギス・ハーンが生まれた日である。この日は、モンゴルの歴史の中で最も重要な日の一つである。チンギス・ハーンは、12 世紀後半に、現在のモンゴルの北西部で、チンギス・ハーンの子孫である。彼は、1206 年に、大モンゴル帝国を築き、東にシベリア、西に中東、南に中国、北にシベリアまで、その勢力を拡大させた。彼の功業は、世界史に大きな影響を与えた。この日は、モンゴルの民族の誇りと歴史の記憶を呼び起こす日である。

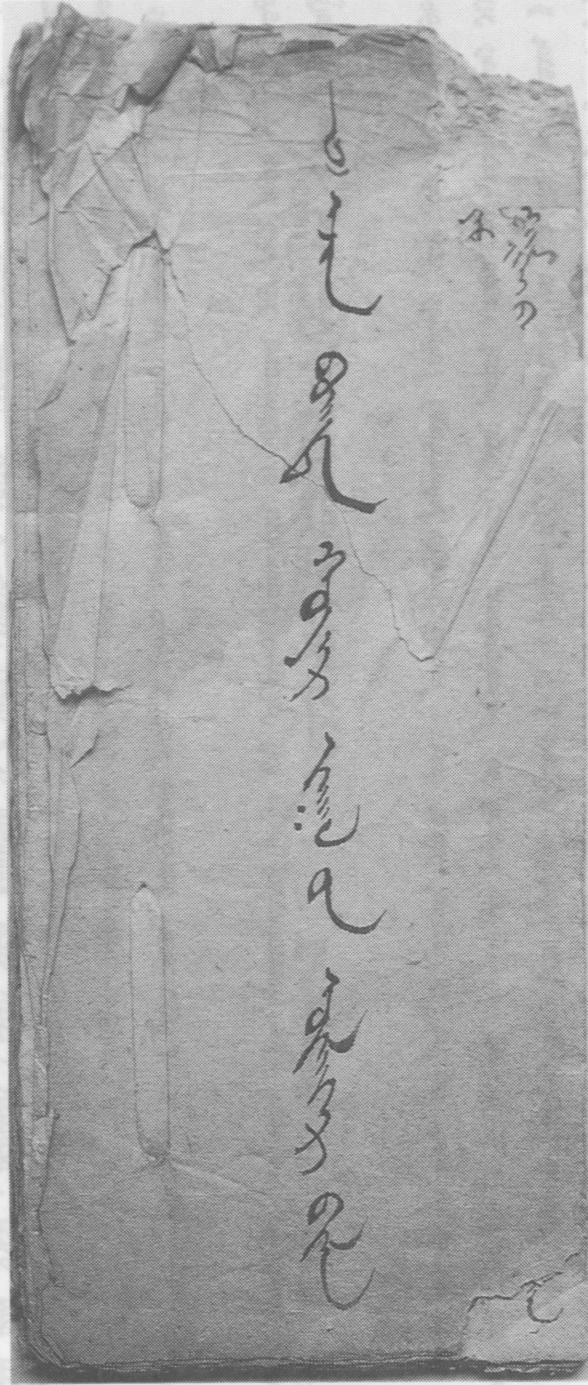
蒙古語

1. 2000 年 12 月 25 日、チンギス・ハーンが生まれた日である。この日は、モンゴルの歴史の中で最も重要な日の一つである。チンギス・ハーンは、12 世紀後半に、現在のモンゴルの北西部で、チンギス・ハーンの子孫である。彼は、1206 年に、大モンゴル帝国を築き、東にシベリア、西に中東、南に中国、北にシベリアまで、その勢力を拡大させた。彼の功業は、世界史に大きな影響を与えた。この日は、モンゴルの民族の誇りと歴史の記憶を呼び起こす日である。

2. 2000 年 12 月 25 日、チンギス・ハーンが生まれた日である。この日は、モンゴルの歴史の中で最も重要な日の一つである。チンギス・ハーンは、12 世紀後半に、現在のモンゴルの北西部で、チンギス・ハーンの子孫である。彼は、1206 年に、大モンゴル帝国を築き、東にシベリア、西に中東、南に中国、北にシベリアまで、その勢力を拡大させた。彼の功業は、世界史に大きな影響を与えた。この日は、モンゴルの民族の誇りと歴史の記憶を呼び起こす日である。

3. 2000 年 12 月 25 日、チンギス・ハーンが生まれた日である。この日は、モンゴルの歴史の中で最も重要な日の一つである。チンギス・ハーンは、12 世紀後半に、現在のモンゴルの北西部で、チンギス・ハーンの子孫である。彼は、1206 年に、大モンゴル帝国を築き、東にシベリア、西に中東、南に中国、北にシベリアまで、その勢力を拡大させた。彼の功業は、世界史に大きな影響を与えた。この日は、モンゴルの民族の誇りと歴史の記憶を呼び起こす日である。

2000 年 12 月 25 日、チンギス・ハーンが生まれた日である。この日は、モンゴルの歴史の中で最も重要な日の一つである。チンギス・ハーンは、12 世紀後半に、現在のモンゴルの北西部で、チンギス・ハーンの子孫である。彼は、1206 年に、大モンゴル帝国を築き、東にシベリア、西に中東、南に中国、北にシベリアまで、その勢力を拡大させた。彼の功業は、世界史に大きな影響を与えた。この日は、モンゴルの民族の誇りと歴史の記憶を呼び起こす日である。



手紙の写本

Handwritten text in a cursive script, likely Mongolian or Tibetan, written vertically on a rectangular piece of paper. The text is arranged in approximately 15 columns, reading from right to left. The script is dense and fluid, with some characters appearing to be ligatures. There are some faint markings on the left side of the page, possibly a signature or a date.

1-a

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on page 1-a, written vertically on a rectangular piece of paper. The text is arranged in approximately 15 columns, reading from right to left. The script is dense and fluid, with some characters appearing to be ligatures. The paper shows signs of wear and discoloration.

1-b

Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a transcription of a historical document. The text is written in a cursive style (sōsho) and covers most of the page. There is a small mark on the left side of the page.

ろんのおあろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも

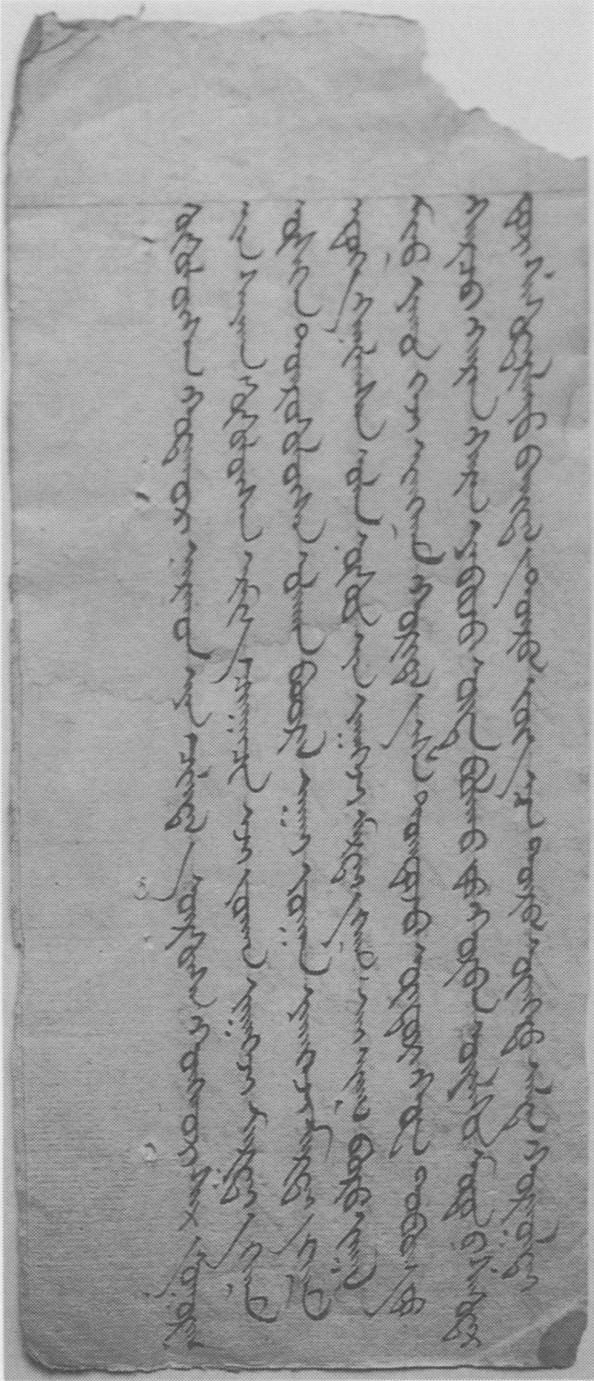
ろしはあつたのんも

3-a

Handwritten Japanese text in vertical columns, continuing from page 3-a. The text is written in a cursive style (sōsho) and covers most of the page.

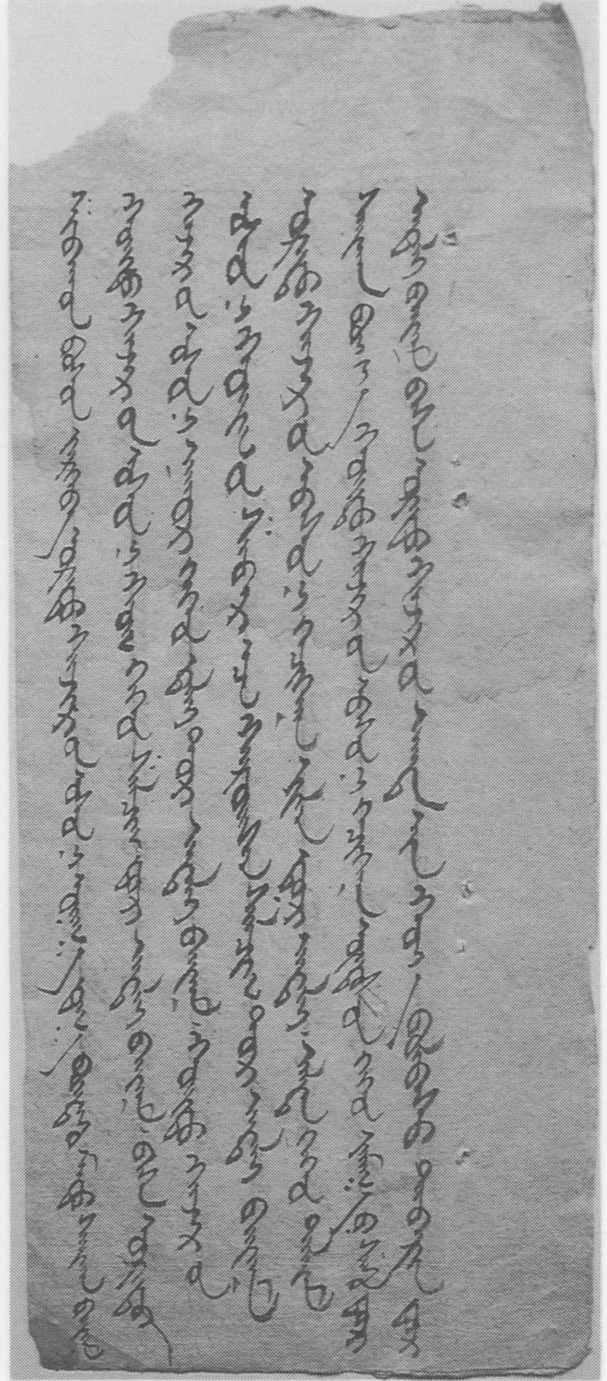
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも
ろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんもろしはあつたのんも

3-b



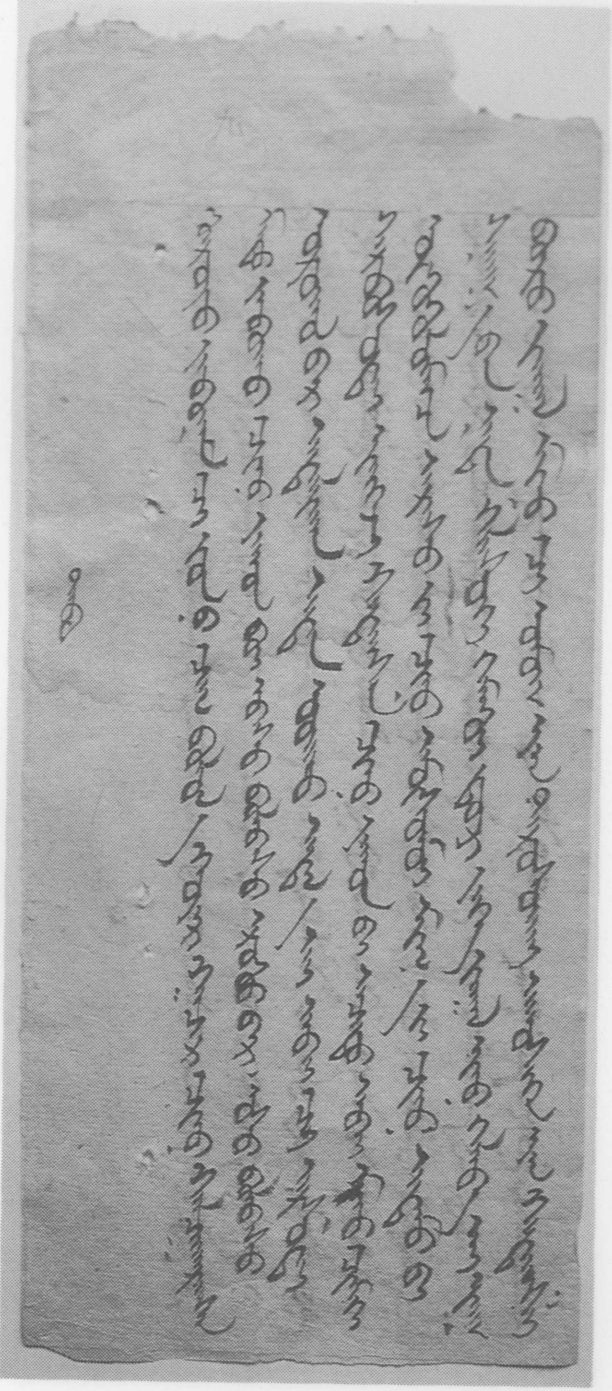
Handwritten text in a cursive script, arranged in approximately 12 vertical columns, reading from right to left. The text is written on aged, yellowish paper with some staining and irregular edges.

4-a



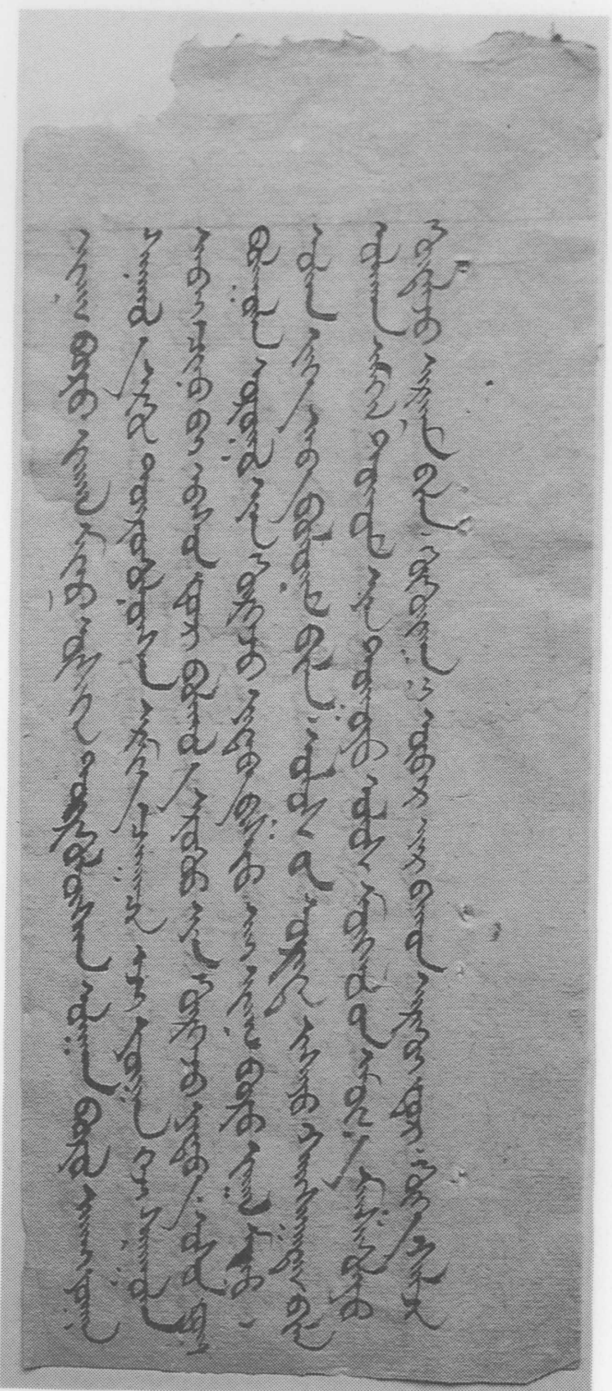
Handwritten text in a cursive script, arranged in approximately 12 vertical columns, reading from right to left. The text is written on aged, yellowish paper with some staining and irregular edges.

4-b



Handwritten text in vertical columns, likely Mongolian script. The text is dense and fills most of the page.

9-a



Handwritten text in vertical columns, continuing the script from page 9-a. The text is dense and fills most of the page.

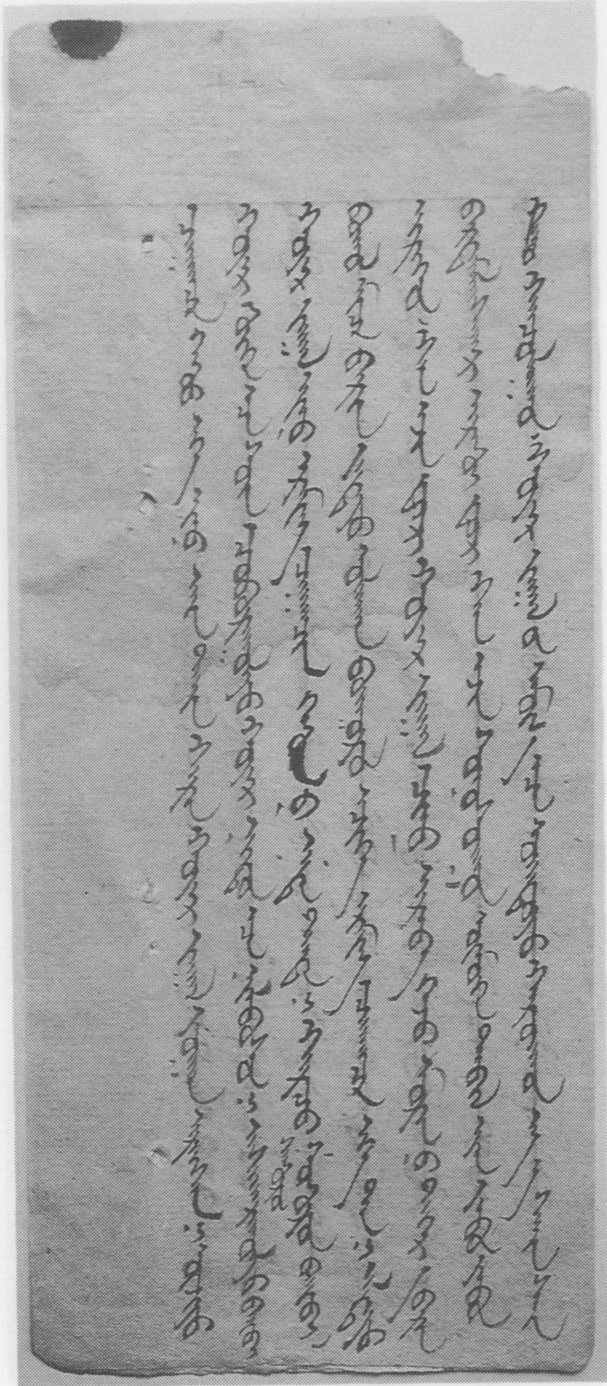
9-b

Handwritten Japanese text on a vertical strip of paper, likely a fragment from an ancient manuscript. The characters are in cursive (sōsho) style, arranged in a single column from right to left.

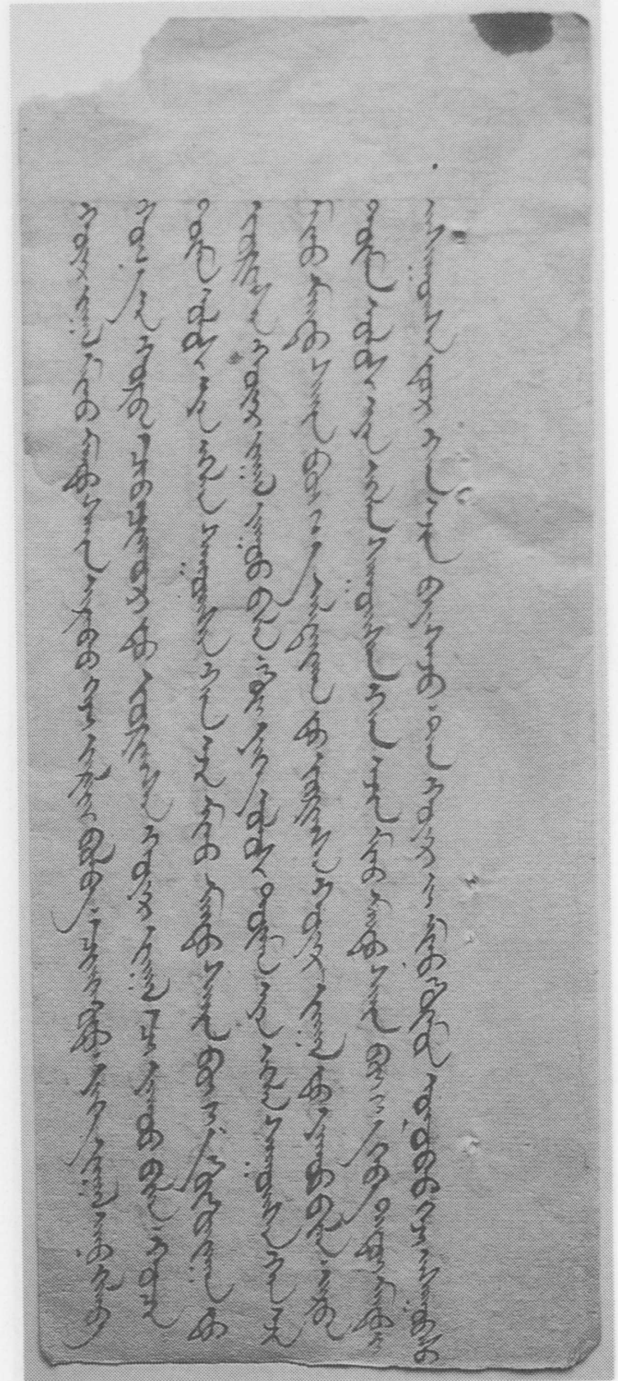
10-a

Handwritten Japanese text on a vertical strip of paper, similar to 10-a. The characters are in cursive style, arranged in a single column from right to left.

10-b



12-a



12-b

14-a
 手紙の文は、縦書きで、右から左へ書かれている。文字は、和蘭文字とローマ文字が混在している。内容は、ある人物への挨拶や報告のようである。

14-a

14-b
 手紙の文は、縦書きで、右から左へ書かれている。文字は、和蘭文字とローマ文字が混在している。内容は、ある人物への挨拶や報告のようである。

14-b

16-a
 手紙の文面には、縦書きの日本語が記されている。文字は比較的整然と書かれており、読みやすい。文の内容は、宛先への挨拶や近況の報告、そして今後の予定やお願いなどが含まれているように見える。紙の質感や色合いもよく写し出されている。

16-a

16-b
 16-bの文面には、縦書きの日本語が記されている。この文は、16-aよりもやや小さく、あるいは筆致が異なる部分がある。内容は16-aと同様に挨拶や近況報告の性質のものと思われる。紙の損傷や汚れも若干見られる。

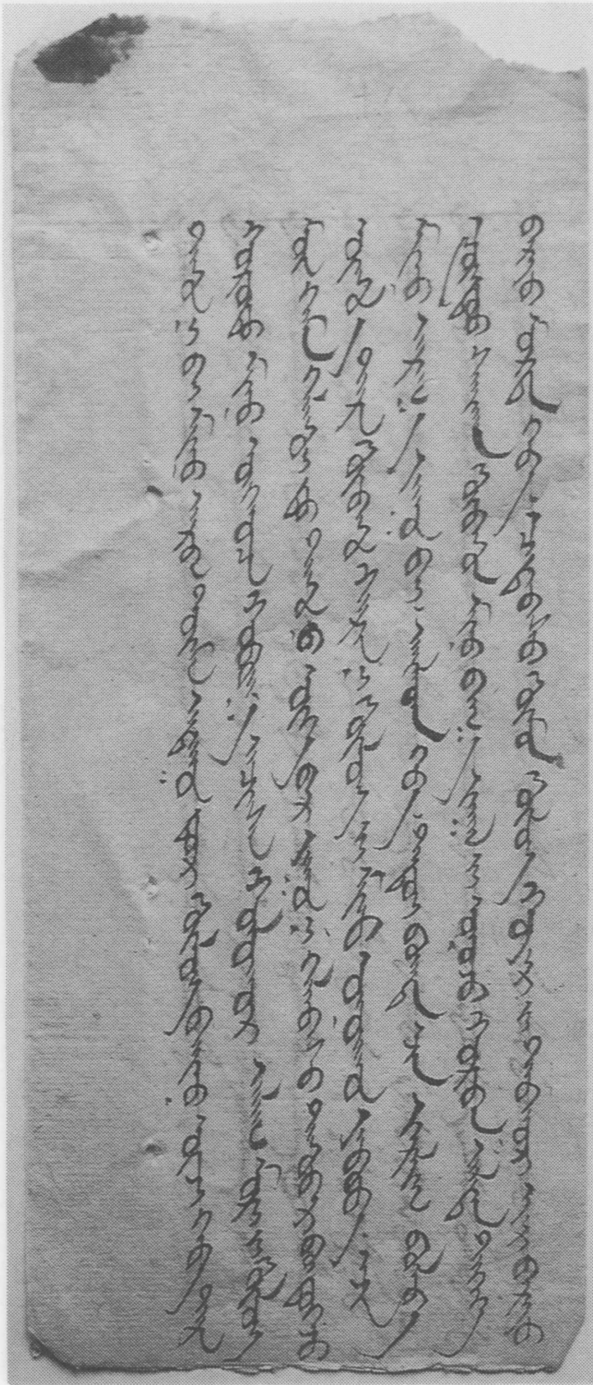
16-b

Handwritten text in a cursive script, likely Mongolian or Tibetan, written vertically on a rectangular piece of paper. The text is dense and fills most of the page. On the left side, there is a small vertical label that reads "17-a".

17-a

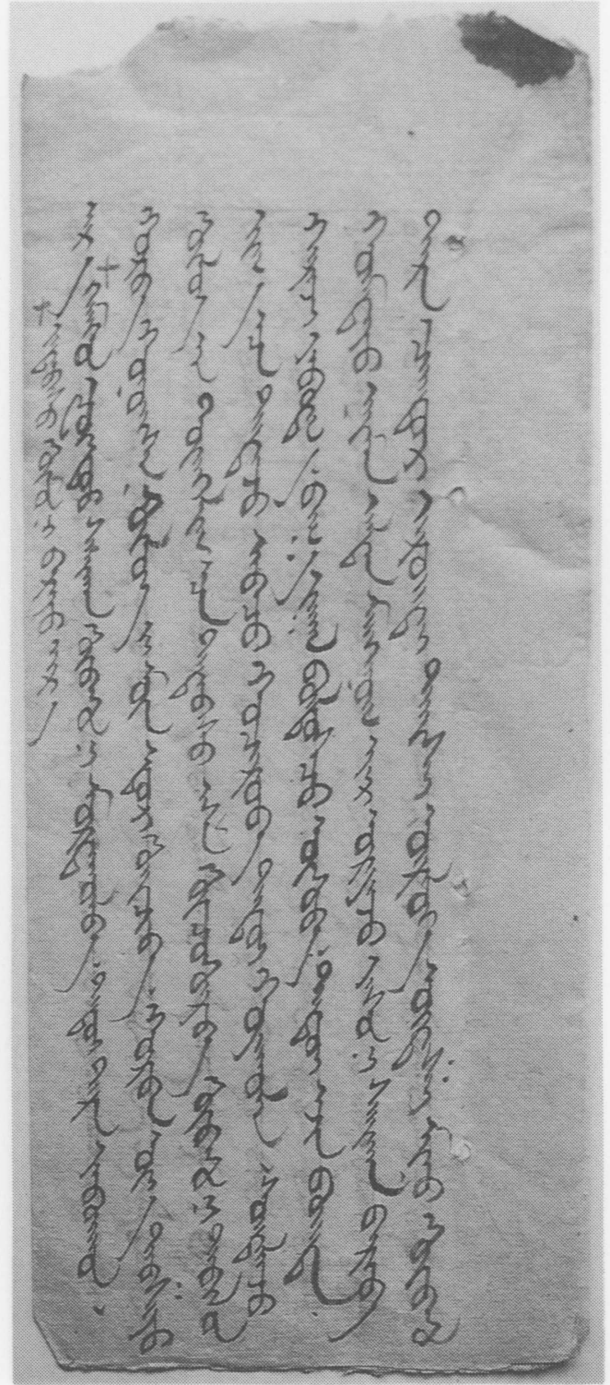
Handwritten text in a cursive script, similar to the one on page 17-a, written vertically on a rectangular piece of paper. The text is dense and fills most of the page. On the left side, there is a small vertical label that reads "17-b".

17-b



Handwritten text in a cursive script on a piece of aged paper. The text is arranged in approximately 10 vertical columns, reading from right to left. The characters are small and densely packed, typical of traditional Japanese handwritten documents.

18-a



Handwritten text in a cursive script on a piece of aged paper. The text is arranged in approximately 10 vertical columns, reading from right to left. The script is similar to the one in image 18-a. There is a small, distinct mark or character at the top left of the page.

18-b

Handwritten text in vertical Japanese columns, likely a transcription of a historical document. The text is written in a cursive style on aged paper.

いあ

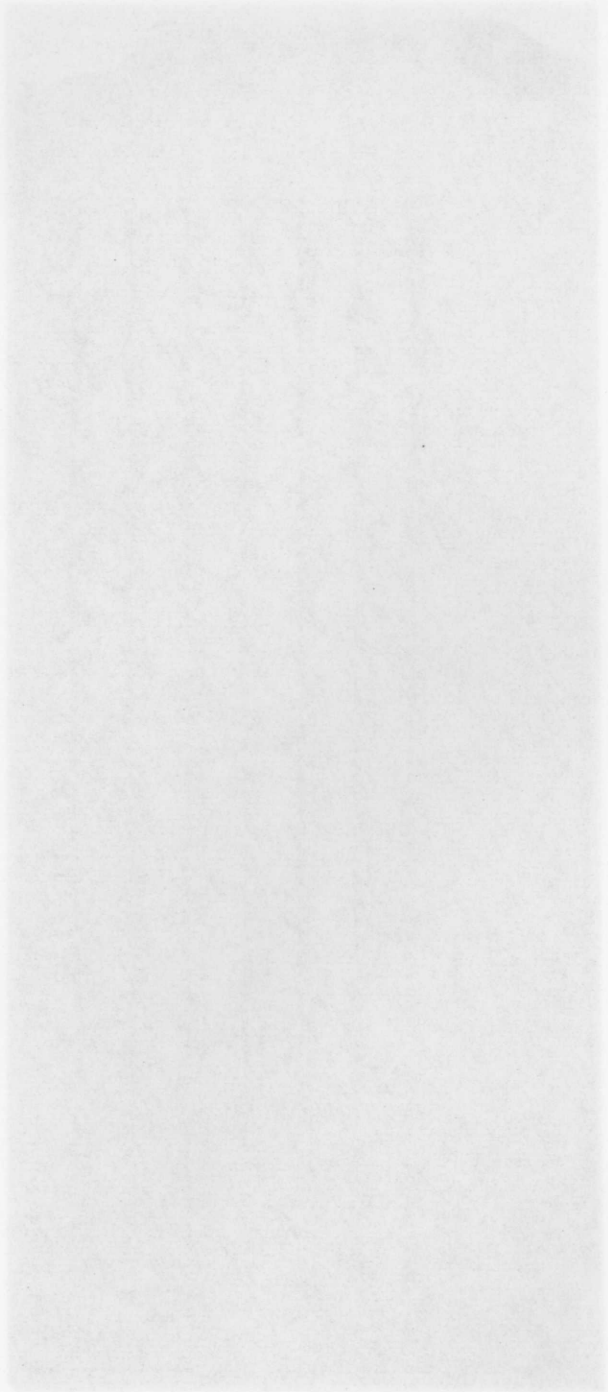
19-a

Handwritten text in vertical Japanese columns, continuing the transcription from page 19-a. The text is written in a cursive style on aged paper.

19-b

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Japanese or a related language. The text is arranged in vertical columns on aged paper.

20-a



20-b